空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書　第１冊

御崎谷遺跡（みさきだにいせき）・大床遺跡（おおとこいせき）

―明治の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査―

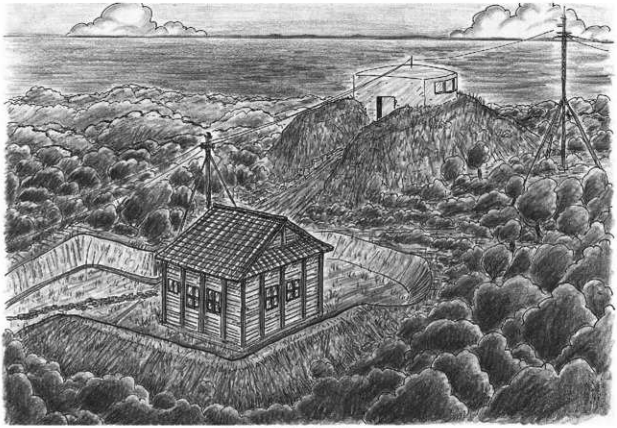
２００１年３月

教育委員会

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書　第１冊

御崎谷遺跡（みさきだにいせき）・大床遺跡（おおとこいせき）

―明治の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査―



西郷海軍望楼大胆復元想像イラスト

２００１年３月

島根県教育委員会

序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成10年度に実施した隠岐郡西郷町字岬町の隠岐空港整備事業予定地内に所在する御崎谷遺跡、大床遺跡の２遺跡の発掘調査成果を記録したものです。

この調査では、明治時代の海軍望楼跡、第二次大戦中の防空監視哨跡といった戦争遺跡を検出するとともに、それぞれの施設で使用された陶磁器、無線用電池、ガラス製品、銃弾の薬莢などを発見しました。これらの遺構・遺物によって、それぞれの時代の戦争に関わる軍事施設の様相を知ることができました。さらに、日本海に周囲を囲まれた地理的環境から、隠岐島が軍事上の要地として捉えられていたことが分かる貴重な資料といえます。

本書が、隠岐島における近現代史及びこの地域の歴史に触れる契機となり、私たちの周りに残されている文化財への理解に少なからず寄与すれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と調査報告書作成にあたって、御協力いただきました地元の皆様をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会

教育長　山　崎　悠　雄

例　言

1．本書は、島根県教育委員会が島根県土木部港湾空港課から委託を受けて、平成10（1998）年度に実施した隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査を行った遺跡は次のとおりである。
御崎谷遺跡（隠岐郡西郷町大字岬町字御崎谷）
大床遺跡（隠岐郡西郷町大字岬町字大床）

3．調査組織は次のとおりである。
〔調査指導〕　伊藤玄三（法政大学）
〔平成10（1998）年度〕
事務局　勝部　昭（文化財課長）　穴道正年（埋蔵文化財調査センター長）
秋山　実（課長補佐）　川崎　崇（企画調整係主事）
調査員　丹羽野裕（調査第5係長）　原田敏照（同主事）　山中弘志（同臨時職員）
内田直美（同臨時職員）　野津　旭（同臨時職員）
野津研吾（研修生、隠岐島後教育委員会）
〔平成12（2000）年度〕
事務局　穴道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）　内田　巌（総務課長）
松本岩雄（調査課長）　今岡　宏（総務係長）　川崎　崇（総務係主事）
調査員　広江耕史（調査第6係長）　原田敏照（同主事）
石橋俊朗（同教諭兼文化財保護主事）　池橋こずえ（同臨時職員）

4．本書の執筆・編集は、原田が他の調査員の協力を得て行った。なお、遺物観察表については、石橋が作成した。

5．挿図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系のX軸方向である。従って各遺跡の座標北方向と磁北、真北との関係は以下のとおりである。
御崎谷遺跡　磁北より7°61′32″、真北より0°41′32″東の方向
大床遺跡　磁北より7°61′29″、真北より0°41′29″東の方向

6．本書に掲載した遺構実測図は、調査員が作成した。

7．遺物の実測図は、調査員を中心として以下のものが実測した。
守山博義（調査第6係臨時職員）　田中芳文（同臨時職員）

8．遺跡の調査前地形測量図は㈱出雲測量に、調査後の空中撮影及び図化については㈱ジェクトに委託した。

9．遺物の写真は、調査員、整理作業員の協力を得て原田が撮影した。なお巻頭カラー写真の図版は、牛嶋　茂氏（奈良国立文化財研究所）と杉本和樹（西大寺フォト）の撮影による。

10．遺物の整理作業については以下の方に従事いただいた。
奥村美恵子　大田栄子　村上広美　西上美穂子　金森千恵子、大畑真由美　川津　史

11．本報告作成作業に関わる実測図の浄書、版下の作成は、大畑、金森、川津が中心として行い、浄書については以下の方にも従事いただいた。
河野真由美　小豆沢美貴　高橋啓子　野田清美

12．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

13．調査にあたり協力・教示いただいた方は次のとおりである。
菊池　実（群馬県教育文化財団）、石塚久則（群馬県教育文化財団）、村瀬隆彦（静岡県教育委員会）、家田淳一（佐賀県立九州陶磁文化館）、原　　剛（防衛庁防衛研究所）、前島正裕（国立科学博物館）、横田　登（隠岐島後教育委員会）、西尾良一、藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、山下峰司（瀬戸市歴史民俗資料館）、熱田貴保、林　健亮、東森　晋、伊藤徳広（島根県埋蔵文化財調査センター）
県土木部港湾空港課、隠岐支庁空港建設局

14．現地調査の発掘作業に従事していただいた方は次のとおりである。
竹林啓二郎、藤野芳武、斉藤正敏、藤野庄一、佐々木幹夫、長谷川幸生、藤野治平、服部壽年、小谷勇二、原　米夫、餅田光邦、横田光和、高橋　洋、土桑知則、平井政行、伊勢宗高、日野喜勝、岩山和宏、川原千香子、川原ゆかり、西尾文成、吉田直樹、白川ひとみ、山崎いずみ、安部　亨、村上礼子、滝下好一、白根健太、池田ひろし、池田明生、川上フミエ、有馬充、下沢　収、岡田　圭、真野幸子、小林和子、船田一也、村上広美、米津正基、高比良将行、中西　進、角　浩子、物部久美子、杉谷昭子、遠藤桂子、篠原久栄、森脇真子、村上志津子、西村　航
石川裕之、小沢卓也、荒木聖志、池田大輔、磯邊良樹、大野正明、佐々木芳和、鷲野真吾、滋野勝也、酒井幸樹、田黒大輔、木下隼人、田村英俊、野津侑三、藤野純、藤野梓、松本大地、森口拓朗、餅田　建、米沢祐、米津元貴、若葉継典、渡辺陽介、村上健介、永海主税

本文目次

序

第1章　調査に至る経緯 …… 1

第2章　調査の方法と調査経過 …… 3
第1節　調査経過 …… 3
第2節　調査の方法 …… 3
第3節　遺跡の概要 …… 3

第3章　遺跡の環境と歴史的背景 …… 5
第1節　遺跡の位置と立地 …… 5
第2節　周辺の遺跡と歴史的背景 …… 6

第4章　御崎谷遺跡の遺構と遺物 …… 8
第1節　調査前の状況と概要 …… 8
第2節　盛土構築物 …… 11
第3節　アンテナ設置用土坑群 …… 16
第4節　敷地跡の調査 …… 23
第5節　出土遺物 …… 36
第6節　小　結 …… 63

第5章　大床遺跡の遺構と遺物 …… 72
第1節　調査前の状況と概要 …… 72
第2節　レンガ積み半地下施設（「聴音壕防空監視哨」） …… 72
第3節　敷地跡 …… 77
第4節　出土遺物 …… 80
第5節　小結 …… 89

第6章　ま　と　め …… 92
第1節　隠岐の近代の戦争遺跡 …… 92
第2節　日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸監視関連） …… 94
第3節　第二次大戦中の戦争遺跡（監視施設） …… 96
第4節　小結 …… 98

挿図目次

第1図　調査地（御崎谷・大床遺跡）の位置 …… 1
第2図　御崎谷・大床遺跡周辺地形図（1/3000） …… 5
第3図　調査遺跡と周辺の遺跡（1/50000） …… 6
第4図　御崎谷遺跡　調査前測量図（1/600） …… 8
第5図　御崎谷遺跡　調査後測量図（1/200） …… 9～10
第6図　御崎谷遺跡　望楼跡完掘状況（1/100） …… 12
第7図　御崎谷遺跡　望楼跡構造物実測図（1）（1/60） …… 13
第8図　御崎谷遺跡　望楼跡構造物実測図（2）（1/60） …… 14
第9図　御崎谷遺跡　望楼跡土層断面図（1/60） …… 15
第10図　御崎谷遺跡　アンテナ設置用土坑配置図（1/60） …… 16
第11図　御崎谷遺跡　主柱土坑（SK02）実測図（1/40） …… 17～18
第12図　御崎谷遺跡　支線土坑（SK01・03）実測図（1/40） …… 20
第13図　御崎谷遺跡　支線土坑（SK04）実測図（1/40） …… 21
第14図　御崎谷遺跡　SK01実測図（1/60） …… 21
第15図　御崎谷遺跡　4柱設置土坑（SK01）実測図（1/30） …… 22
第16図　御崎谷遺跡　敷地跡調査最終状況（1/150） …… 23
第17図　御崎谷遺跡　土塁下部土層断面図（1/20） …… 24
第18図　御崎谷遺跡　敷地跡土層断面図（1/60） …… 25
第19図　御崎谷遺跡　土塁下部礫群検出状況（1/20） …… 27
第20図　御崎谷遺跡　礎石建物跡実測図（1/40） …… 29～30
第21図　御崎谷遺跡　敷地跡木柱設置土坑群配置図（1/40） …… 31
第22図　御崎谷遺跡　敷地跡主柱土坑（SK01）実測図（1/30） …… 32
第23図　御崎谷遺跡　敷地跡支線土坑（SK02）実測図（1/30） …… 33
第24図　御崎谷遺跡　敷地跡支線土坑（SK03）実測図（1/30） …… 33
第25図　御崎谷遺跡　敷地跡土坑（SK04～07）実測図（1/20） …… 34
第26図　御崎谷遺跡　敷地跡礫瓦敷き遺構実測図（1/120、1/60） …… 35
第27図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（1）（1/3） …… 37
第28図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（2）（1/3） …… 38
第29図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（3）（1/6、1/3） …… 39
第30図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器実測図（素焼容器）（1/3） …… 43
第31図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器実測図（白色容器）（1/3） …… 45
第32図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（白色容器）・碍子実測図（1/3） …… 46
第33図　御崎谷遺跡　出土ガラス瓶実測図（1）（1/2） …… 48
第34図　御崎谷遺跡　出土ガラス瓶実測図（2）（1/2） …… 49
第35図　御崎谷遺跡　出土ガラス製品実測図（1/2） …… 50
第36図　御崎谷遺跡　出土金属製品実測図（1）（1/3） …… 52
第37図　御崎谷遺跡　出土金属製品実測図（2）（1/2） …… 53
第38図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（棟瓦）（1/5） …… 57
第39図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（雁振・熨斗・袖）（1/5） …… 58
第40図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（軒・桟・面戸）（1/5） …… 59

第41図　御崎谷遺跡　出土施釉瓦実測図（雁振・熨斗）(1/5) …… 61
第42図　御崎谷遺跡　出土施釉瓦実測図（袖・軒・桟）(1/5) …… 62
第43図　大床遺跡　調査前地形測量図 (1/600) …… 72
第44図　大床遺跡　調査後地形測量図 (1/300) …… 73
第45図　大床遺跡　防空監視哨実測図 (1/40) …… 75
第46図　大床遺跡　防空監視哨土層断面図 (1/60) …… 76
第47図　大床遺跡　敷地跡平坦面土層断面図 (1/60) …… 77
第48図　大床遺跡　建物跡実測図 (1/40) …… 78
第49図　大床遺跡　敷地跡横穴実測図 (1/40) …… 79
第50図　大床遺跡　SK01実測図 (1/30) …… 80
第51図　大床遺跡　出土陶磁器実測図 (1/3) …… 81
第52図　大床遺跡　出土陶器・煉瓦・土管実測図 (1/6、1/3) …… 83
第53図　大床遺跡　出土ガラス製品実測図 (1/2) …… 84
第54図　大床遺跡　出土金属製品実測図 (1/3) …… 87
第55図　大床遺跡　出土瓦実測図 (1/3、1/5) …… 88
第56図　隠岐の戦争遺跡 …… 92
第57図　日露戦争前後の戦争遺跡位置図 …… 94
第58図　大戦中の戦争遺跡位置図 …… 96

表目次

表1　調査地と周辺の遺跡　一覧 …… 7
表2　御崎谷遺跡　陶磁器一覧 …… 41
表3　ダニエル電池素焼容器　色調－スタンプ相関表 …… 42
表4　ダニエル電池磁器容器　色調－スタンプ相関表 …… 44
表5　御崎谷遺跡　出土電池容器　一覧 … 47
表6　御崎谷遺跡　出土ガラス製品　集計表 …… 51
表7　御崎谷遺跡　出土金属器　集計表 … 54
表8　御崎谷遺跡　出土瓦　集計表 …… 55
表9　西郷海軍望楼（御崎谷遺跡）関連年表 …… 64
表10　御崎谷遺跡　出土陶磁器観察表 …… 65
表11　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（素焼）観察表 …… 66
表12　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（白色容器）観察表 …… 67
表13　御崎谷遺跡　出土碍子　観察表 …… 67
表14　御崎谷遺跡　出土ガラス製品　観察表 …… 68
表15　御崎谷遺跡　出土金属製品　観察表 …… 69
表16　御崎谷遺跡　出土瓦　観察表 …… 70
表17　御崎谷遺跡　出土瓦　計測位置対応一覧 …… 71
表18　大床遺跡　出土陶磁器　集計表 …… 82
表19　大床遺跡　出土ガラス製品　集計表 …… 85
表20　大床遺跡　出土金属器　集計表 …… 86
表21　大床遺跡　出土瓦　集計表 …… 88
表22　大床遺跡　出土陶磁器　観察表 …… 90
表23　大床遺跡　出土ガラス製品　観察表 …… 91
表24　大床遺跡　出土金属製品　観察表 … 91
表25　大床遺跡　出土瓦　観察表 …… 91
表26　隠岐島の戦争遺跡 …… 93
表27　日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸部監視関係） …… 95
表28　第２次大戦中の戦争遺跡（監視施設） …… 97

図版目次

図版1上　御崎谷遺跡・大床遺跡全景
下　御崎谷遺跡　全景
図版2上　御崎谷遺跡　盛土構築物土層
下　大床遺跡　防空監視哨土層
図版3　御崎谷遺跡　出土陶磁器
図版4　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器・碍子
図版5上　御崎谷遺跡　出土陶磁器1（椀・蓋）
下　御崎谷遺跡　出土陶磁器2（土瓶蓋）
図版6上　御崎谷遺跡　出土陶磁器3（急須・土瓶ほか）
下　御崎谷遺跡　出土陶磁器4（壺・蓋ほか）
図版7上　御崎谷遺跡　出土陶磁器5（非掲載1）
下　御崎谷遺跡　出土陶磁器6（非掲載2）
図版8上　御崎谷遺跡　出土ガラス製品1（瓶）
中　御崎谷遺跡　出土ガラス製品2（小形瓶）
下　御崎谷遺跡　出土ガラス製品3（灯具）
図版9上　御崎谷遺跡　出土燻し瓦
下　御崎谷遺跡　出土施釉瓦
図版10上　大床遺跡　出土陶磁器1（椀・壺）
下　大床遺跡　出土陶磁器2（椀・蓋・皿）
図版11上　大床遺跡　出土陶磁器3（統制番号入り）
下　大床遺跡　出土陶磁器4（非掲載）
図版1　御崎谷遺跡　全景（北西上空より）
図版2上　御崎谷遺跡　望楼跡調査前（北より）
中　御崎谷遺跡　敷地跡調査前（南より）
下　御崎谷遺跡　望楼跡より日本海を見る
図版3上　御崎谷遺跡　調査後全景（北より）
下　御崎谷遺跡　望楼跡完掘状況（北より）
図版4上　御崎谷遺跡　望楼跡完掘状況（東より）
下　御崎谷遺跡　望楼跡出入口付近（北より）
図版5上　御崎谷遺跡　望楼跡調査状況
中　御崎谷遺跡　望楼跡出入口付近検出切石
下　御崎谷遺跡　望楼跡盛土土層断面
図版6上　御崎谷遺跡　アンテナ設置土坑群（南より）
中　御崎谷遺跡　木柱設置土坑（SK02）検出石材
下　御崎谷遺跡　SK02検出切石
図版7上　御崎谷遺跡　SK02付設溝土層断面
中　御崎谷遺跡　支線土坑（SK01）完掘状況
下　御崎谷遺跡　SK01検出支線固定用切石
図版8上　御崎谷遺跡　支線土坑（SK03）完掘状況
中　御崎谷遺跡　SK03検出支線固定用切石
下　御崎谷遺跡　支線土坑（SK04）完掘状況
図版9上　御崎谷遺跡　敷地跡完掘状況（北より）
下　御崎谷遺跡　敷地跡完掘状況（南東より）
図版10上　御崎谷遺跡　敷地跡完掘状況（北西より）
下　御崎谷遺跡　敷地内支線土坑（SK03）完掘状況
図版11上　御崎谷遺跡　瓦・礫敷き遺構検出状況
中　御崎谷遺跡　建物礎石群・大甕検出状況
下　御崎谷遺跡　大甕内調査状況
図版12上　御崎谷遺跡　敷地跡木柱設置土坑（SK01）完掘状況
中　御崎谷遺跡　支線土坑（SK02）土層断面
下　御崎谷遺跡　SK02完掘状況
図版13上　御崎谷遺跡　支線土坑（SK03）完掘状況
中　御崎谷遺跡　SK04内礫検出状況
下　御崎谷遺跡　SK05土層断面
図版14上　御崎谷遺跡　SK05内礫検出状況
中　御崎谷遺跡　SK06内礫検出状況
下　御崎谷遺跡　SK07完掘状況
図版15上　御崎谷遺跡　敷地外土坑（SK01）完掘状況
中　御崎谷遺跡　敷地跡土墨土層断面
下　御崎谷遺跡　土塁下部礫群検出状況
図版16上　御崎谷遺跡　土墨盛土断面（敷地跡溝との関連）
中　御崎谷遺跡　ダニエル電池容器出土状況（土塁付近）
下　御崎谷遺跡　礎石調査状況

図版17　御崎谷遺跡　出土陶磁器1
図版18上　御崎谷遺跡　出土陶磁器2
下　御崎谷遺跡　出土大甕底部（文字）
図版19上　御崎谷遺跡　出土七輪五徳
下　御崎谷遺跡　出土七輪
図版20上　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器
中左　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（セット）
中右　御崎谷遺跡　出土素焼容器底部スタンプ
図版21上　御崎谷遺跡　出土白色磁器容器スタンプ
下　御崎谷遺跡　出土碍子
図版22上　御崎谷遺跡　出土ビール瓶
下　御崎谷遺跡　出土ガラス製品
図版23上　御崎谷遺跡　出土金属製品1
下　御崎谷遺跡　出土金属製品2
図版24上左　御崎谷遺跡　出土金属製容器
上右　御崎谷遺跡　出土金属器3
下　御崎谷遺跡　出土棟止瓦（燻し）
図版25上左　御崎谷遺跡　出土棟止瓦（燻し）
上右　御崎谷遺跡　出土鳥伏間（燻し）
中　御崎谷遺跡　出土棟止瓦（燻し）
下　御崎谷遺跡　出土棟巴（燻し）
図版26上　御崎谷遺跡　出土雁振瓦（燻し）
下　御崎谷遺跡　出土熨斗瓦（燻し）
図版27上　御崎谷遺跡　出土桟瓦・面戸瓦（燻し）
中　御崎谷遺跡　出土袖瓦（燻し）
下　御崎谷遺跡　出土軒瓦（燻し）
図版28上　御崎谷遺跡　出土雁振瓦（施釉）大
下　御崎谷遺跡　出土雁振瓦（施釉）小
図版29上　御崎谷遺跡　出土熨斗瓦（施釉）
下　御崎谷遺跡　出土桟瓦（施釉）小
図版30上　御崎谷遺跡　出土袖瓦（施釉）
下　御崎谷遺跡　出土雁振瓦・袖瓦（施釉）
図版31上左　御崎谷遺跡　出土軒瓦（施釉）
上右　御崎谷遺跡　出土桟瓦（施釉）
上左　御崎谷遺跡　出土軒袖瓦（施釉）
上右　御崎谷遺跡　出土軒瓦（施釉）
図版32　大床遺跡　全景（東側上空より）
図版33上　大床遺跡　防空監視哨跡調査前
中　大床遺跡　敷地跡調査前（東より）
下　大床遺跡　防空監視哨跡調査前
図版34上　大床遺跡　完掘状況（西より）
下　大床遺跡　防空監視哨跡完掘状況（北より）
図版35上　大床遺跡　敷地跡完掘状況（東より）
下　大床遺跡　建物跡完掘状況（東より）
図版36上　大床遺跡　監視哨跡堆積状況
中　大床遺跡　監視哨跡完掘状況（西より）
下　大床遺跡　監視哨跡盛土土層断面
図版37上　大床遺跡　土管出土状況
中　大床遺跡　SK01完掘状況
下　大床遺跡　敷地跡上層堆積状況
図版38上　大床遺跡　横穴断面土層
中　大床遺跡　横穴完掘状況
下　大床遺跡　現地説明会風景
図版39上　大床遺跡　出土陶磁器（統制番号）
中左　大床遺跡　出土陶磁器（国民食器）
中右　大床遺跡　出土陶磁器（椀・蓋）
下　大床遺跡　出土陶器（かまど縁、番号）
図版40上　大床遺跡　出土陶器（かまど縁、非掲載）
下左　大床遺跡　防空監視哨レンガ・土管
下右　大床遺跡　防空監視哨レンガ
図版41上左　大床遺跡　出土ビール瓶
上右　大床遺跡　出土ビール瓶・瓶（非掲載）
下　大床遺跡　出土ガラス製品
図版42上左　大床遺跡　出土カップ
上右　大床遺跡　出土カップ底部（陸平マーク）
下　大床遺跡　出土金属製品1
図版43上　大床遺跡　出土金属製品2
下　大床遺跡　出土桟瓦（燻し）
図版44上左　大床遺跡　出土熨斗瓦（施釉）
上右　大床遺跡　出土桟瓦スタンプ（燻し）
下　大床遺跡　出土桟瓦スタンプ（燻し）

第１章　調査に至る経緯

現在の隠岐空港は、YS－11型機によって運航されている。しかし、同型機はすでに製造中止の上に数年後には退役が予定されている。これに変わる後継機としてはジェット機が交流人口の増大化・地域活性化・定住化を図る上でも最適であると考えられた。このことから早急にジェット化にスムースに移行できるよう空港の整備事業が計画された。

この計画に伴う埋蔵文化財調査については、1996年（平成８年）から周辺事業予定地内も含め隠岐島後教育委員会・島根県教育委員会によって遺跡の分布調査が実施された。これによって、空港整備事業予定地内に御崎谷遺跡・大床遺跡・東船遠跡の３か所で遺跡の存在が明らかになった。

・御崎谷遺跡（西郷町大字岬町字御崎谷）…… 明治：海軍望楼跡
・大床遺跡（西郷町大字岬町字大床）…… 昭和：防空監視哨跡
・東船遺跡（西郷町大字今津字東船）…… 旧石器時代～中世：集落跡等

分布調査の成果を基に遺跡の取り扱いについて協議が行われ、御崎谷遺跡・大床遺跡については、遺跡の時代・性格について不明確な点が多いことや近代以降の新しいものである可能性があったが、地元の要望等もあり調査を行うこととなった。

そして、隠岐島後教育委員会により1997（平成９年）には、遺跡の広がりを確認するため東船遺跡の発掘調査が行われた。これにより東船遺跡の調査範囲が確定することとなった。以上の分布調

第１図　調査地（御崎谷・大床遺跡）の位置

査、範囲確認調査を基に埋蔵文化財調査の基本計画が協議され、現地調査については、島根県教育委員会が1998（平成10）年度～2000（平成12）年度の３か年で基本的に行うこととなった。また、埋蔵文化財調査を円滑に進めるための調査地の用地買収・重機による表土掘削・立ち木伐採・発掘作業員確保等の環境整備について協議し、本格的な調査を実施するための準備は整えられた。

現地調査は、1998（平成10）年度に御崎谷遺跡・大床遺跡・東船遺跡の３か所について行い、11年度以降については、東船遺跡の調査を継続して行うこととなった。また、1999（平成11）年度には、地元住民の方からの指摘と文献資料から御崎谷遺跡と大床遺跡の中間地点の谷奥に遺跡が存在することが新たに確認された。この新たに発見された遺跡を御崎谷Ⅱ遺跡として2000（平成12）年度に調査することとなった。

1998（平成10）年度の調査は、４月から諸準備をおこない、１パーティで同年６月に御崎谷遺跡から実施し、同年８月からは大床遺跡の調査を開始した。この２遺跡については、同年９月には調査を終了し、それ以降同年12月まで東船遺跡の調査を行い、1998（平成10）年度の現地調査は終了した。

1999（平成11）年度の調査は、調査班を２パーティに増やして４月より実施した。遺跡は、前年度から継続して東船遺跡の調査を実施し、同年12月に終了した。

2000（平成12）年度は、前年度同様に東船遺跡の調査を４月より実施し、途中、御崎谷Ⅱ遺跡の調査を行い、同年12月に終了した。この段階で、東船遺跡の調査部分のうち調査を実施できなかった部分が残ることとなったが、それについては、協議の結果、島後教育委員会によって2001（平成13）年度に調査を実施することが決定した。

今回報告する御崎谷遺跡・大床遺跡（西郷町大字岬町）の２遺跡は、1998（平成10）年度に調査を実施したものである。なお、他の２遺跡（東船遺跡・御崎谷Ⅱ遺跡）については、2001（平成13）年度に報告予定である。

第２章　調査の方法と調査経過

第１節　調査経過

調査は、現地での準備段階を経て、1998（平成10）年５月に２遺跡の地形測量を50cmコンター、1/200スケールで実施した後に６月３日より御崎谷遺跡で発掘作業を開始した。

まず、遺跡の広がりの確認と遺構の様相を確認するために、４本のトレンチ（２m×８m程）を設定し、盛土構築物・敷地跡の様相と遺構の広がりを確認した。その後、敷地跡と盛土構築物以外の部分については、表土を重機掘削によって除去することとした。そこで、御崎谷遺跡の調査を中断し、７月７日からは、大床遺跡のトレンチ調査を開始した。大床遺跡では、６本のトレンチ（２m×８m）によって遺構の様相と広がりを確認することができた。そして、７月15日からは、御崎谷遺跡の調査を再開し、盛土構築物・敷地跡の精査、アンテナ設置用の土坑群の検出を行った。この頃から発掘作業員の減少が見られ、日によっては、２・３人といった状況から作業があまり進まない日々が続いた。このことから、新たな作業員の確保が必要となったが、思うように新たな確保が得られない状況であった。そこで、７月の終わりからは、隠岐高校の生徒によって発掘作業が主に進められた。このように、作業員不足に悩まされることがあったが、８月末には、作業員の十分な確保ができ９月７日には終了し、大床遺跡の本格的な調査を実施することになった。

大床遺跡では、レンガ積み半地下施設と敷地跡の調査を併行しながら行い、10月２日に調査を終え、東船遺跡の調査に入った。その後10月24日には、両遺跡の見学会を開催し35名程の地元からの参加者が見られた。また、11月25～26日には両遺跡の空撮を行い調査は完全に終了した。

第２節　調査の方法

御崎谷遺跡・大床遺跡の両遺跡では、まず、調査前の地形測量図を作成し、ともに盛土を施した構築物と建物等が存在する敷地跡の存在が想定された。このことから両遺跡とも似たような遺跡であったことから、ほとんど同じ方法によって現地調査を行った。また、両遺跡調査後の全体の測量図及び全景写真は、空撮により図化（25cm1/100）・撮影した。

（御崎谷遺跡）

御崎谷遺跡では、盛土構築物と敷地跡の両者の中軸を通る土層観察用のベルトを設定し、それに直交する土層観察用のベルトを必要と考えられる箇所にいくつか設定した。

そして、盛土構築物と敷地跡を中心にいくつかのトレンチ調査をおこない、基盤層までの深さ、堆積状況等の大まかな様相を確認し、今後の調査の方針を決定した。

表土掘削は、盛土部分及び敷地跡部分では人力で行ったが、他の部分については重機によって除去を行い、遺構の精査につとめた。また、土坑等の遺構を検出した場合には、上層の写真・図化等の記録（土層観察は、中軸１本または、直交する十字方向の２本で基本的に行った。）後に完掘した。そして遺構完掘後には、遺構の図化を1/10又は1/20スケールでおこなった。ただし、盛土構築物については主に遺跡調査システム「SITE」を使用し、打ち出して図化したものを現地で校正し完成させた。

遺跡から出土する遺物については、その出土状況が廃棄された状況を示すものがほとんどであったことから、細かな出土状況の記録は行わないで、大まかに分けた区域で一括して取り上げた。

なお、盛土構築物については断ち割りで盛土の断面は確認しているが、最終的に盛土を除去し、基盤層まで検出する作業は行わなかった。

（大床遺跡）

大床遺跡でも御崎谷遺跡と同じように、レンガ積み半地下施設と敷地跡の両者を通る土層観察用のベルトと、それに直交するベルトを設定し調査した。そして、レンガ積み半地下施設と敷地跡のベルト沿いにトレンチを設定し、基盤層までの深さ、堆積状況等の確認を行った。

トレンチ調査の結果を基に、レンガ積み半地下施設周辺と、敷地跡の建物基礎周辺以外の部分では表土を重機によって除去した。

表土除去後には、土層の観察・写真・図化を行った後にベルトを取り去った。レンガ積み半地下施設の調査は、施設内の堆積土を除去すると同時に施された盛土を断ち割り、断面を観察・記録した段階で終了した。なお、盛土の全面除去を調査では実施しなかった。また、施設跡の図化は遺跡調査システム「SITE」を使用し、現地で校正し図化した。同じように建物基礎も「SITE」を使用し図化した。

出土した遺物については、御崎谷遺跡と同様に大まかな区域で一括して取り上げた。また、遺構の一部として存在するレンガ・土管については、その一部を取り上げて持ち帰ったのみである。

（出土遺物の検討）

御崎谷・大床遺跡で出土した遺物については、基本的に分類し、同一型式のものは1点のみ図化し掲載した。また、陶磁器で小片のものは図化を省略し、写真掲載のみにとどめている。

ダニエル電池の容器については、規格品であることからやや規格より大きさが異なるものとマークごとに各点数図化し、掲載した。

第3節　遺跡の概要

ここでは、御崎谷・大床遺跡で検出した両遺跡の遺構・遺物について概略を述べる。

御崎谷遺跡は、盛土構築物・建物跡が存在する敷地跡・アンテナ設置用土坑群の3つの遺構群で構成されている。文献資料などから盛土構築物は、海上監視を行う施設と考えられる。同様に文献資料から建物跡は、実際の勤務をおこなう施設と考えられた。またアンテナ設置用土坑群は、その構造や類例、文献資料から通信用アンテナ設置用のものと推測している。出土遺物は、陶磁器、ガラス製品、碍子、ダニエル電池容器、鉄製品である。遺跡の時期は、海軍望楼が設置された1898（明治31）年から廃止された1910（明治43）年までと考えられる。しかし、1924（大正13）年に逓信省が土地の一部を取得していることからそれとの関係を検討しなければならない。確かに、出土陶磁器が新古の2相に分かれる可能性があることや、遺構が改修された状況を見てとることも可能である。しかし、残念ながら逓信省の時期の実態が現段階でも不明であり、今後の検討課題である。

大床遺跡は、聞き取り調査から大戦末期の防空監視哨跡である。遺構は、レンガ積み半地下施設と建物跡を含む敷地跡で構成されている。レンガ積み半地下施設は、本来上部に簡素な屋根を設けた「聴音壕防空監視哨」であり、建物跡は管理棟であったものと考えられる。遺物は陶磁器、ガラス製品、鉄製品があり、また、陶磁器には「国民食器」や統制番号が付けられたものがあり、戦時下の様子を表している。

第３章　遺跡の環境と歴史的背景

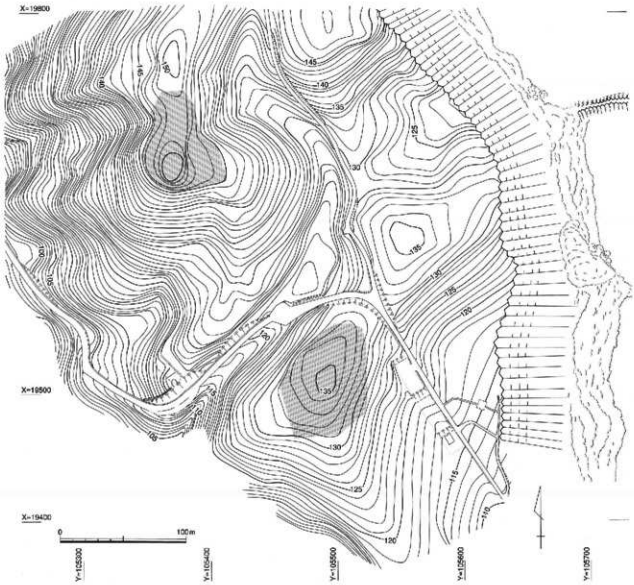
第１節　遺跡の位置と立地

御崎谷・大床遺跡は、隠岐の島後西郷町大字岬町に所在し、南側には日本海が広がり、晴れた日には島前のみならず本土をも望むことができる眺望の非常に開けた位置にある。

両遺跡ともその所在地の地名が示すように南面する日本海に突き出た岬の突端部分に位置し、そこはちょうど隠岐島後の玄関口である西郷湾の入り口に当たる場所である。また、岬の先端には1921年（大正10年）３月に日本初の国産レンズを点けた「西郷岬灯台」が設置されている。

御崎谷遺跡は、岬の突端から北へ500m 程奥へ入った標高135m の丘陵上に位置し、その背後には小さい谷が存在する。遺跡はちょうど、谷で区切られた丘陵の一番高い地点に立地しており、現状では日本海まで遮るものは無く視界が良好な地点である。また、背後の谷には御崎谷Ⅱ遺跡が存在する。御崎谷Ⅱ遺跡は、海軍望楼の官舎跡と考えられる遺跡であり、両遺跡で検出した遺構によって「海軍望楼」が機能していたものである。

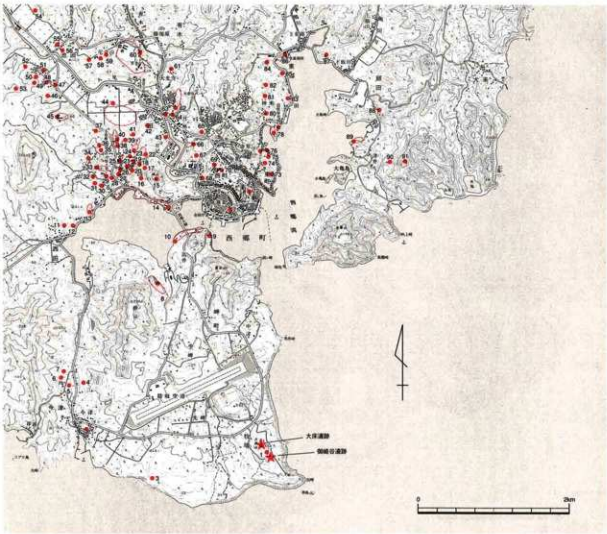
大床遺跡は、御崎谷遺跡の存在する同一丘陵の最頂部に立地している。遺跡の場所は、標高150m の「大床山」の頂上にあたり、非常に視界の開けた所である。



第２図　御崎谷・大床遺跡周辺地形図（1/3000）

第２節　周辺の遺跡と歴史的背景

遺跡の存在する島後の西郷湾周辺では、多数の遺跡がこれまで確認されている。旧石器時代では、隠岐空港の事業地内である今津所在の東船遺跡で細石核と台形様石器が出土し、約３万～２万４千年前まで隠岐島における人類の歴史を遡ることが可能になった。また、縄文時代では、宮尾遺跡から前期に遡る土器が発見されている。そして、弥生時代の遺跡では、月無遺跡で弥生時代前期～中期の遺物が出土しており、いち早く稲作農耕が開始されていることが分かる。また、弥生時代後期後葉には、山陰地方で首長墓として築かれていた四隅突出型墳丘墓が大城遺跡で見つかっている。また、古墳時代では、西郷湾周辺が隠岐の古墳群の中心地の一つであり、前方後円墳が多数築造されている。このように本土との密接な繋がりを保ちつつ、西郷湾周辺の特に矢尾川流域と玉若酢神社周辺では、各時代の人々の痕跡を多く確認することができる。一方で、御崎谷遺跡・大床遺跡の所在する岬町南側の台地上では、黒曜石の剥片散布地が散見されるのみで、明確な遺跡は認められない。また、この台地上は、開拓が行われる戦後まで、本格的に集落が営まれたことは無かったようである。近代に入り、調査で検出した遺跡や西郷灯台が大正10年に設置される頃までは、あまり人の手が加わった様子が認められない場所であった。



第３図　調査遺跡と周辺の遺跡（1/50000）

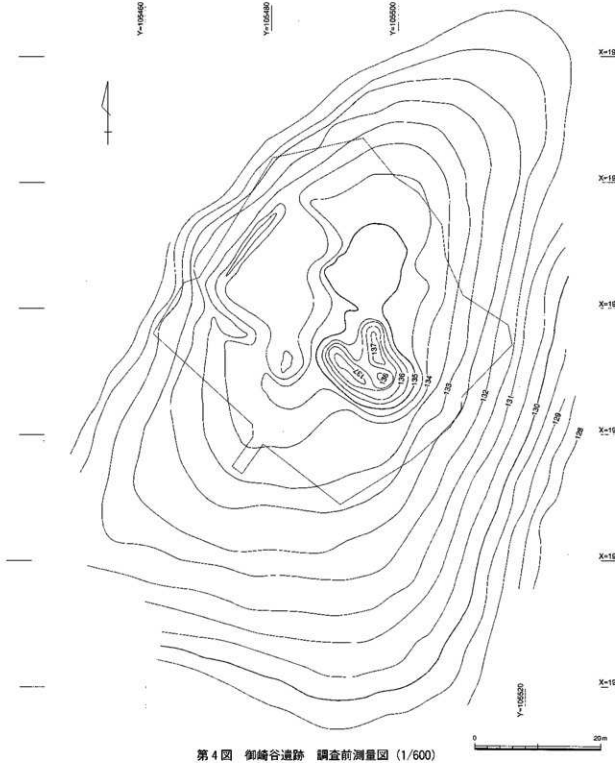
表1　調査地と周辺の遺跡　一覧

地図番号	遺跡名	概要	地図番号	遺跡名	概要
	御崎谷遺跡	近代、海軍望楼跡	46	中山古墳群	古墳3基（墳形不明）
	大床遺跡	近代、防空監視哨	47	小宮神社古墳	古墳、前方後円墳、葺石他
1	御崎谷Ⅱ遺跡	近代、海軍望楼官舎跡	48	平東古墳群	円墳2基
2	東船遺跡	集落跡　旧石器～中世	49	釜山古墳	古墳、横石
3	国主塚古墳	円墳	50	平西の古墳	円墳、横穴式石室
4	森遺跡	集落跡　奈良時代	51	平神社古墳	前方後円墳、石室、葺石、埴輪
5	奥田Ⅰ遺跡	包含地　須恵器・土師器	52	本先古墳	円墳、石棺、土師器・須恵器
6	奥田Ⅱ遺跡	集落跡　須恵器・土師器	53	小松城跡	城跡
7	奥山Ⅲ遺跡	集落跡　須恵器・土師器	54	嘉宗遺跡	散布地、土師器
8	飯の山横穴墓群	20基以上、壁画、須恵器、玉類	55	船ヶ谷古墳	古墳（墳形不明）
9	高井古墳	円墳	56	開蔵国分寺跡	寺院跡、礎石、軒平瓦
10	くだりま遺跡	散布地、石鏃	57	野中西遺跡	散布地、須恵器
11	西田古墳	円墳	58	野中東遺跡	散布地、須恵器
12	磯中学校脇古墳	古墳、刀子、鏃先、須恵器他	59	高城遺跡	散布地、土師器
13	大座古墳群	円墳3基	60	尼寺原遺跡	掘建柱建物跡、鉄器、瓦、須恵器
14	下西海岸遺跡	散布地、縄文土器・石鏃	61	大光寺跡	寺院跡、石垣
15	国府尾城跡	城跡	62	名田古墳群	古墳3基（円墳、前方後円）
16	白髪古墳群	古墳4基	63	月無遺跡	散布地、弥生土器、木器他
17	国府原館跡	館跡	64	八田横穴墓群	横穴墓、須恵器
18	甲の原古墳群	古墳4基	65	要木遺跡	散布地、土師器・須恵器
19	甲の原古墳群	古墳5基	66	大城遺跡	散布地、弥生土器（スタンプ文）
20	大将軍遺跡	散布地、須恵器、黒曜石	67	大城四隅突出型墳丘墓	弥生土器、管玉
21	大将軍遺跡	散布地、須恵器、黒曜石	68	大川神社古墳	古墳、円墳、横穴式石室
22	能木原遺跡	散布地、須恵器	69	西郷小学校1号墳	古墳、円墳
23	能木原古墳群	古墳8基	70	西郷小学校2号墳	古墳、円墳
24	能木原古墳群	古墳9基	71	天神古墳群	古墳、円墳2基、葺石
25	甲の原遺跡	散布地、須恵器、黒曜石	72	西郷公園古墳	古墳、円墳
26	宮の前遺跡	散布地、須恵器、黒曜石	73	平崎古墳群	横穴墓
27	宮の前1号墳	古墳、円墳	74	清久寺裏遺跡	散布地、古銭、陶磁器
28	宮の前2号墳	古墳、円墳	75	ヘギ遺跡	散布地、土師器・須恵器
29	十若都命神社境内古墳群	円墳4基	76	ヘギ古墳	古墳、土師器・須恵器
30	岩倉古墳	円墳	77	釜鳥トンネル遺跡	散布地、須恵器
31	神殿古墳群	円墳5基	78	宮尾古墳群	古墳、円墳5基
32	神殿古墓群	古墓40基以上、塔婆	79	宮尾遺跡	集落跡、縄文土器、石器他
33	十若都命神社古墳群	14基、前方後円・円墳、須恵器他	80	神米遺跡	散布地、土師器
34	雑掛寺跡	寺院跡、礎石、軒平・丸瓦	81	神米古墳群	古墳3基
35	椿古墳	円墳	82	小用横穴墓	横穴墓、須恵器
36	下西御崎神社古墳群	円墳2基	83	小田向光寺古墳	古墳、円墳、石室、勾玉・刀他
37	ヒノメサン古墳群	古墳2基	84	宮山城跡	城跡
38	馬場遺跡	散布地、	85	小出古墳	古墳、円墳
39	嘉宗谷南古墳群	古墳2基	86	水産高校西側横穴墓	横穴墓、須恵器
40	ハサコ古墳群	4基、円墳、前方後円墳	87	能田小学校裏古墳	古墳、須恵器、土師器
41	嘉宗谷古墳群	古墳4基	88	津井古墳群	古墳2基
42	田井古墳	古墳、墳形不明	89	諫遠跡	集落跡、縄文・弥生土器他
43	H記古墳	円墳	90	遠常寺跡	寺院跡
44	矢馳川流域条里遺跡	条里制遺跡	91	遠常寺山経塚	経塚
45	中山遺跡	集落跡、竪穴住居跡、須恵器他			

第４章　御崎谷遺跡の遺構と遺物

第１節　調査前の状況と概要

調査前の遺跡の現況は山林であった。伐採後の状況では盛土構築物が目立つ状況であり、その上部構造が崩壊した状態が観察された。また、地元では「砲台跡」「望楼跡」などと呼称されていたが、この施設のいわれについて確証あるものはなかった。敷地跡では、一段低く削られた平坦面や北西側の土塁状の高まりを確認することができた。また、アンテナ設置用の土坑の存在は確認できない状況が長く続き、水はけの悪い窪みとして長く認識している状況であった。



第４図　御崎谷遺跡　調査前測量図（1/600）

第5図　御崎谷遺跡　調査後測量図（1/200）

検出した遺構は、盛土構築物・敷地跡・アンテナ設置用土坑が主なもので、ほかに敷地跡で検出した瓦・礫が集中した遺状の遺構を検出している。この遺状の遺構は、敷地跡の礎石建物と共存したものかは明らかにできなかったものである。それでは、以下遺構ごとに順次述べていきたい。

第2節　盛土構築物

盛土構築物は、南面する日本海上を監視していた施設と考えられる。構造は、盛土上に砕石を混ぜた材料によって部屋を造り、北側に出入り口を設けたものである（これをとりあえず「本体」と呼称する）。そして、出入り口には傾斜の付いたスロープとその両側に設けられた盛土が付設してある。（「側面盛土と仮称する」）また、スロープ両側の盛土は、本体の盛土とはやや軸が異なることや盛土構築状況から一体のものとして築造されたものではなく、前後して盛土されたものと考えられる。

1．盛土構築物の規模

盛土構築物は、標高135m 程の自然地形に盛土し築かれている。また、その下端はやや南側に傾斜しており水平ではない。形状は馬蹄形を呈し、下端で南北17.5m×東西13.5m である。高さは本体部分で2ｍ程（上部構造をプラスすると2.5m 以上）、スロープ側面盛土で2.7m である。側面盛土は下端で幅６ｍ程の細長い形状を呈し、主軸は N－28°－W 方向である。一方、本体は南北10.5m で主軸は N－53°－W 方向である。

2．本体上部構造

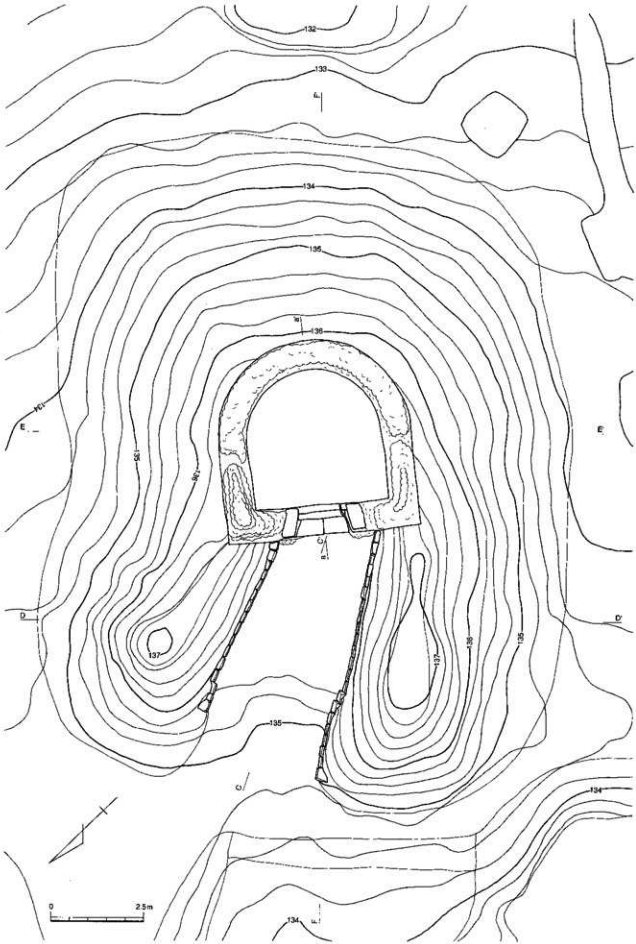
本体上部には、砕石混じりの壁材による部屋が設けられている。この部屋が露天であるのか屋根が存在していたかについては、調査前にすでに崩壊していたことから明確ではないが、日本海側に窓が存在していた可能性が壁の残存部分から窺えることから、本来は何らかの屋根が存在していたものと考えられる。

上部構造は馬蹄形で南側に弧を描く形状である。その規模は、東西25.6m×南北25.6m、床からの高さ南側0.8m、北側1.6m 以上である。北側には出入り口が設けられている。壁の厚さは3.7m であり、内壁には所々漆喰が残存し、白色に塗られた室内であったことが推測される。外面については剥落が激しいことも関係するが、よく分からない状態であった。床は白色の床が残存している。なお壁材の残存している上面は、基本的には剥落による面と考えられるが、南側から2.8m のところで東西両サイドとも壁が高くなることが見てとられ、南側には窓が設けられていたことが推測される。

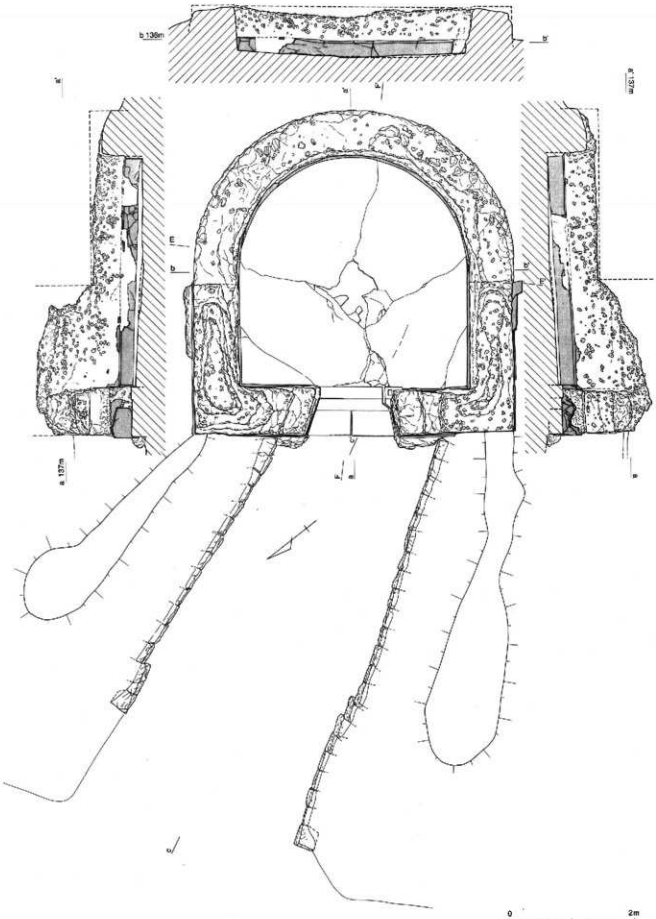
上部構造の北側の出入口は、規模が幅東西1.2m である。両サイドには加工具の痕跡を残す切石が積まれ、床は非常に平滑に仕上げられた切石が置かれている。両サイドの石材は長さ0.7、幅0.33、高さ0.33m 程のものであり、東側で１段、西側で２段積み上げられている。また、床の切石は６枚敷かれており、西側のものには８×５cmの方形のホゾ穴が存在しドアの受けであった可能性が考えられる。

3．スロープの構造

スロープは緩い傾斜で床は土そのままであった。側面には盛土が施され内側下端には盛土に沿って１段の切石が並べ置かれていた。切石は加工具の痕跡が残るもので、33cm×26cm程のものである。スロープの規模は東西３ｍ程の幅で北側に向かって開く形態である。



第6図　御崎谷遺跡　望楼跡完掘状況（1/100）



第７図　御崎谷遺跡　望楼跡構造物実測図（１）(1/60)

4．盛土の構築状況

盛土は、自然地形上に構築されていることが各土層で確認される旧表土によって分かる。そして、盛土は何回かの段階を経て築成されていることが土層観察から判明した。ここでは、順次工程ごとに記述したい。なお、上部構築物下の構造を確認していないので工程を完全には把握していない。

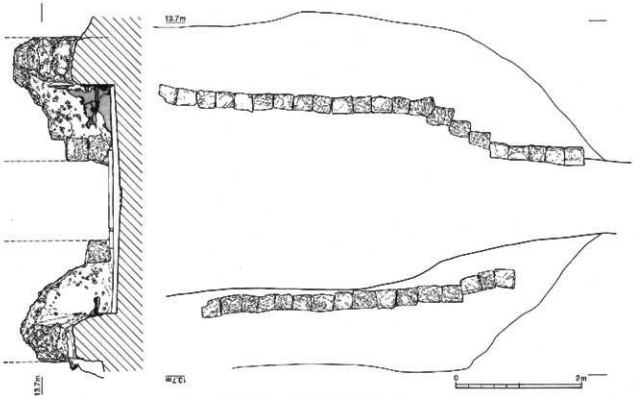
まず、第1段階の盛土は、旧表土上に標高135.5m前後まで施している。各土層図でいえば、A層にあたり、この段階で厚さ1m程盛土している。この段階は本体の上部構造を設置する前段階にあたる工程と考えられる。

そして、第2段階の工程では上部構造の土台を設置する段階である。また、この段階で土台設置前に砕石を敷く工程が考えられる。それは、B層としたFライン11の砕石層がこの土台の下部に潜り込んでいる可能性が考えられることから想定される。

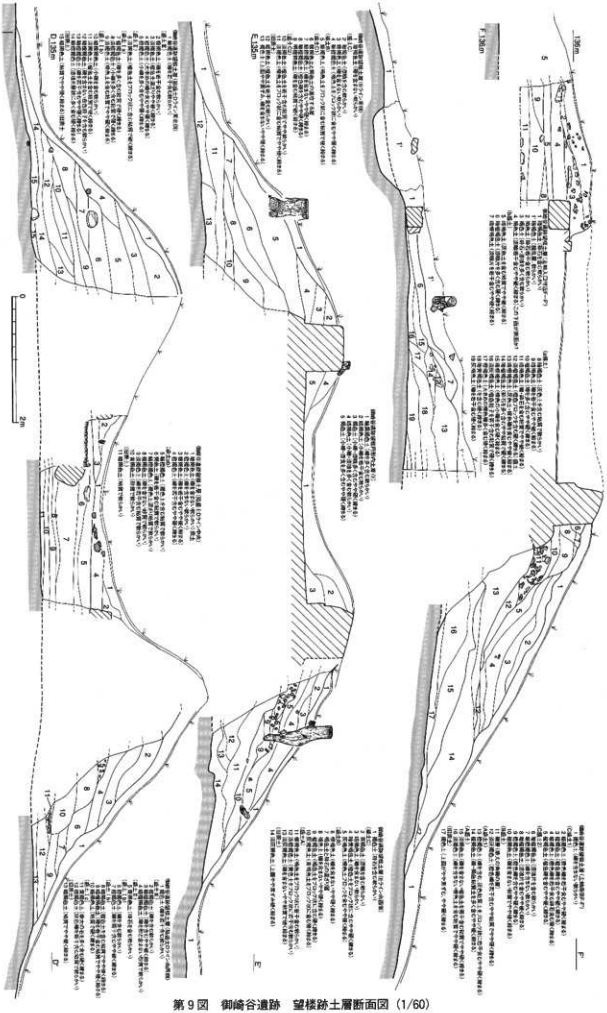
次の第3段階では、砕石層又は粘質のよく締まった層を土台上面まで施す工程であり、標高135.7m程で上面を揃えている。土層図ではB層としているものが相当する。また、この上面の高さは、ほぼ上部構築物の床面の高さに相当している。最後の第4段階では、上部施設が構築されているものと考えられ、その後に最終的な盛土が現状の高さまで施されている。

さて、本体の築成工程は判明したが、一方のスロープ及び側面盛土の工程について検討したい。

まず、標高135.6m付近まで盛土（a層）している。これは、出入口に置かれた切石の下面にあたる。そして、135.7mまで整地（b層）し、この面がスロープ機能面と考えられ、さらに側面盛土沿いの石材もこの面に設置されている。側面盛土では、Ⅰ層がa・b層に対応し、Ⅱ層は切石上面のレベルと対応し、砕石や締まった粘質土の層であるので、裏込め的な性格のものと思われる。Ⅲ層は最終的工程の盛土と推測される。



第8図　御崎谷遺跡　望楼跡構造物実測図（2）(1/60)



第９図　御崎谷遺跡　望楼跡土層断面図（1/60）

第3節　アンテナ設置用土坑群

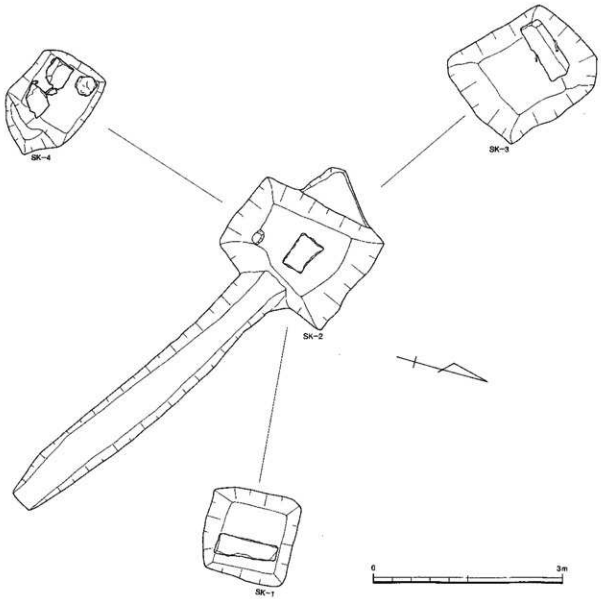
1．概要

この節で述べるアンテナ設置用土坑群とは、盛土構築物の西側に近接している4基の土坑から構成されている。4基の土坑は、SK02を中心として3方向にSK01・03・04が配置されている。

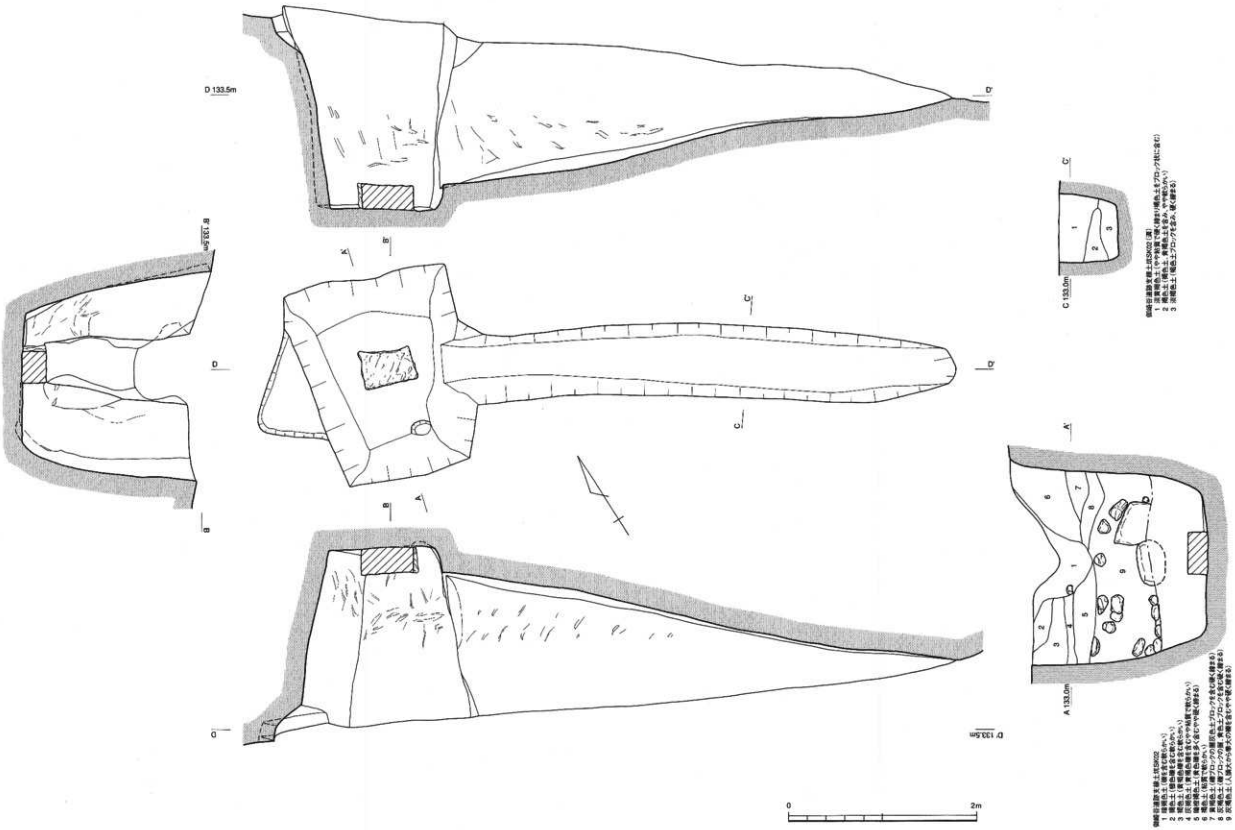
それぞれの土坑は木柱設置用土坑（SK02）とそれを支える支線固定材を埋設した土坑（SK01・03・04）とに性格が分かれており、4基の土坑でセットとなるものである。結論として、土坑群の機能はその配置状況や土坑内部に置かれた切石の状況と類似する資料が東京都多摩送信所跡[5]に存在すること、文献に海軍望楼に無線電信機の設置が記録されていることからアンテナ設置用の土坑と解釈した。

2．主柱土坑（SK02）

SK02は、標高133.5m付近で検出した。土坑の構造は木柱設置用の溝が付設し、土坑底部に木柱の土台としての切石が置かれている。形状は、南北2.1m×東西2.7mの長方形を呈し、東壁に溝が付設する。深さは2.1mで底面は水平であり、底面中央には土台の切石が置かれている。切石は、



第10図　御嶽谷遺跡　アンテナ設置用土坑配置図（1/60）



第11図　御崎谷遺跡　主柱土坑（SK02）実測図（1/40）

短径0.34m、長径0.58m、厚さ2.8mの長方形である。東壁に付設した溝は、土坑側に低く傾斜しており、その比高差は0.9mである。溝の規模は幅0.8m、長さ2.5m、深さは土坑側で2.5mであり、土坑に向かって深くなる。

土坑の断面上層は、下層の9層で多量の人頭大の礫が出土しており、これは主柱の裏込めとして充填されていたものと考えられる。また、1層以外の層も土坑と主柱の隙間を埋めた層と考えられる。1層は、締まりのない軟らかい層であるので、人為的な層ではなく、主柱を抜き取った後か、切り倒した後の流入土と思われる。

2．支線土坑（SK01・03・04）

支線土坑は、主柱を支える支線（バンセン）の根元を巻き付ける固定用の石材を掘設したものである。3基の土坑とも長方形の切石を土坑に納めて、その切石は片側に寄せて置かれている点が共通している。それぞれの土坑内固定石材と主柱土坑の中央石材との水平距離は、01で4.8m、03で5.1m、04で4.95mであり、若干の異なりはあるが、ほぼ等距離に設置されている。

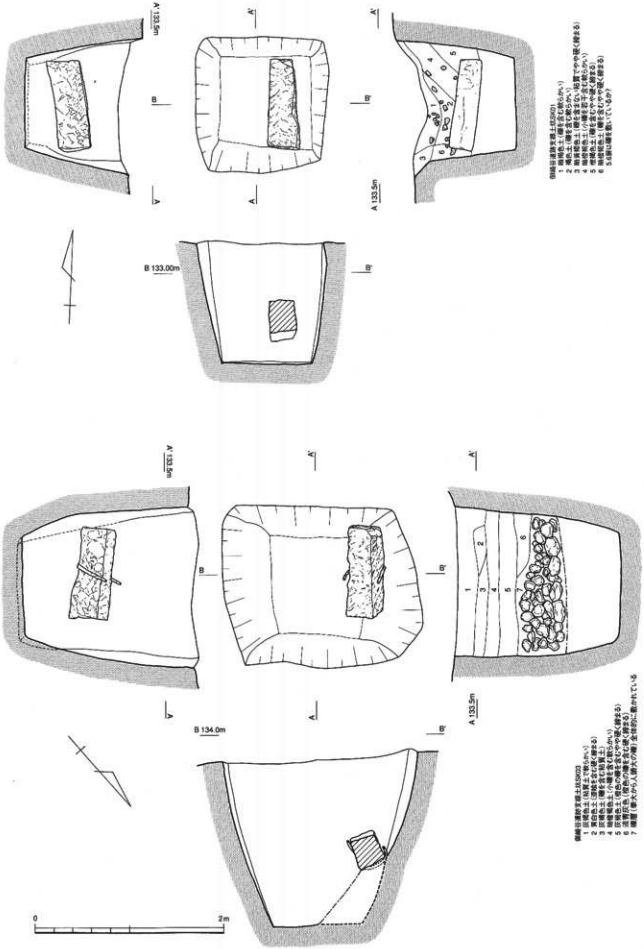
SK01　土坑は、主柱土坑の東側に存在し、標高133mで検出した。形状は、東西1.4m、南北1.45mのほぼ正方形である。深さは1.3mで底面は平坦である。土坑内に置かれた支線固定石材は、縦0.95m、横0.3m、厚さ0.33mの規模で東壁に沿って置かれている。石材の置かれているレベルは、標高132.3mで底面より0.3m程上に置かれている。この床面より高く置かれている原因は、支線の角度を調節するためと考えられる。土坑内の土層は、土砂で整地した後に切石を置き、1～5層で土坑内を充填したものと推測することが可能である。

SK03　土坑は、主柱土坑の北西側の標高134mで検出し、4基の土坑群発見の契機となった土坑である。形状は長径2.05m、短径1.7mのやや北西－南東軸に長い長方形である。深さは1.8mで支線土坑中最も深く掘られており、底面は平坦である。土坑内に置かれた固定石材は縦0.95m、横0.3m厚さ0.3mの規模で北西壁に沿って置かれている。石材はやや内側（主柱土坑側）に傾いた状態で出土し、その中央付近には径2.5cm程の鉄筋が巻かれた状態であった。また、巻かれた鉄筋は主柱土坑に向けた状態であった。石材の置かれているレベルは、標高132.6mで底面より0.6m程上に置かれており、支線の角度を調節したものと考えられる。

土坑内の土層は、1～6層が礫混じりの層であり、土坑内に充填した土層と推測される。その下層の7層は、拳大から人頭大の礫層であり、これは、切石設置後に固定用として詰められたものと考えられる。そして、切石より下層の土砂は、整地用として置かれた層と思われる。

SK04　土坑は、主柱土坑の南側標高133mで検出した。形状は南北1.2m、東西1.3mのほぼ正方形であり、支線土坑中規模の最も小さい土坑である。深さは1m程で底面は平坦である。土坑内に置かれた固定石材は、本来1つの石材が2つに割れて南壁沿いに出土している。これを復元すると縦0.9m、横0.35m、厚さ0.35mと考えられる。石材の置かれているレベルは、標高132.2mで底面上に置かれており、他の支線土坑と異なっている。

土坑内の堆積状況は他の土坑と異なり、切り合いが確認されている。十層から当初の人為的な埋土と考えられる6～9層を切り込んでおり、その後に1～3層が堆積している。このように土坑は何らかの理由で掘り返されていることが分かり、切石が割れているのも関連しているものと考えられる。



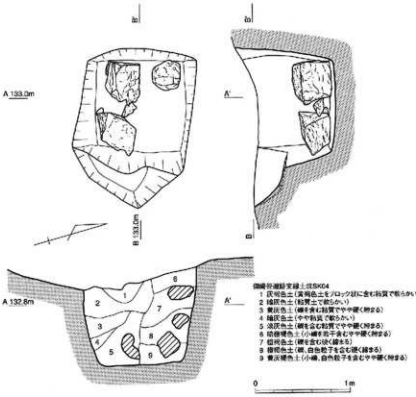
第12図　御崎谷遺跡　支線土坑（SK01・03）実測図（1/40）

3．不明遺構（SX01）

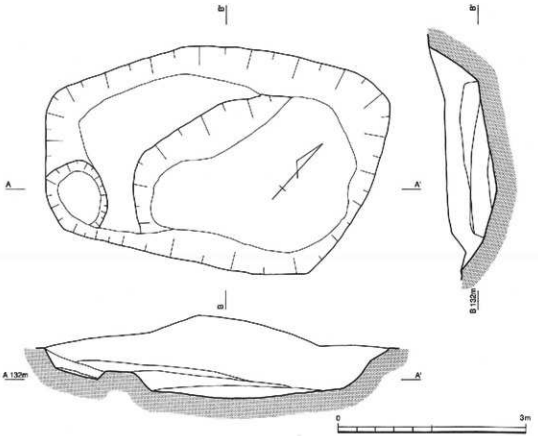
盛土構築物周辺にはアンテナ設置用土坑以外にも遺構が存在している。性格が明確に出来ないものであることからSX01と呼称している。

SX01は、盛土構築物の前面（南側）に存在している不整形の土坑状の遺構であり、標高133mで検出している。その規模は、長径5.4m、短径3.5mであり、深さは1.3mとやや浅いものである。

覆土は暗褐色の締まりの無い層であり、人為的な埋められた層ではなく、周辺からの流入による土層と推測される。



第13図　御崎谷遺跡　支線土坑（SK04）実測図（1/40）



第14図　御崎谷遺跡　SK01実測図（1/60）

4．四柱設置土坑（SK01）

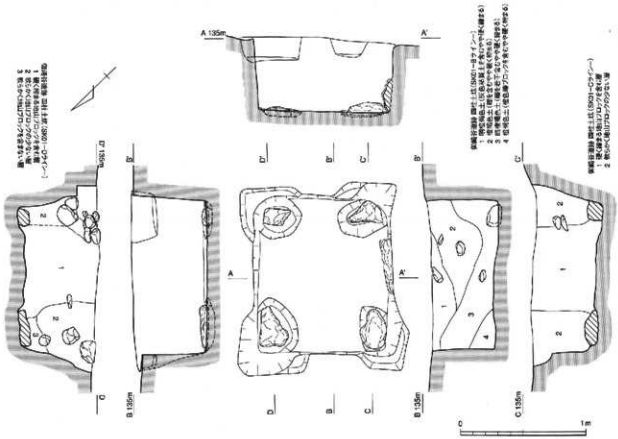
盛土構築物の背後（北側）で敷地跡に近接した標高135mで、各コーナーに人頭大の自然石を置いた方形土坑を検出している。検出当初は、ピット状の遺構4基と認識していたものである。発見当初ピット状遺構と認識したものは、石材上に置かれた木柱の痕跡または、木柱の抜き取り痕を誤認したものと後に判明した。

土坑は、若干四隅が広がる方形の平面形で、長径1.25m、短径1.1mの規模である。深さは0.6mで底面は平坦である。各コーナーの底面は深さ5cm程浅く掘りくぼまれて、そこに人頭大の自然石が置かれている。置かれていた石材は4つともだいたい長さ3.2cm、幅20cm、厚さ15cm程のものである。この石材上には木柱が立っていた可能性を考えている。それは、その部分の土層がピット状に締まりのない軟らかい土砂であることから解釈される。

土坑内の堆積土は、Bラインで確認される1～4層は、硬く締まる層であり、人為的な埋土と考えられる。

一方、C及びDラインで確認される2～3層は、各隅の石材と対応しているものであり、前述したように木柱の掘られていた痕跡を示すものと考えられる。1層は、Bラインの1～4層に相当するものと考えられ、土坑内に人為的に充填された土砂と思われる。

この方形土坑は、柱を4本掘えるための土坑であることが判明したが、その性格については、類例の検討が不十分なこともあり不明であるが、無線通信用のアンテナに関連するものである可能性が考えられる。



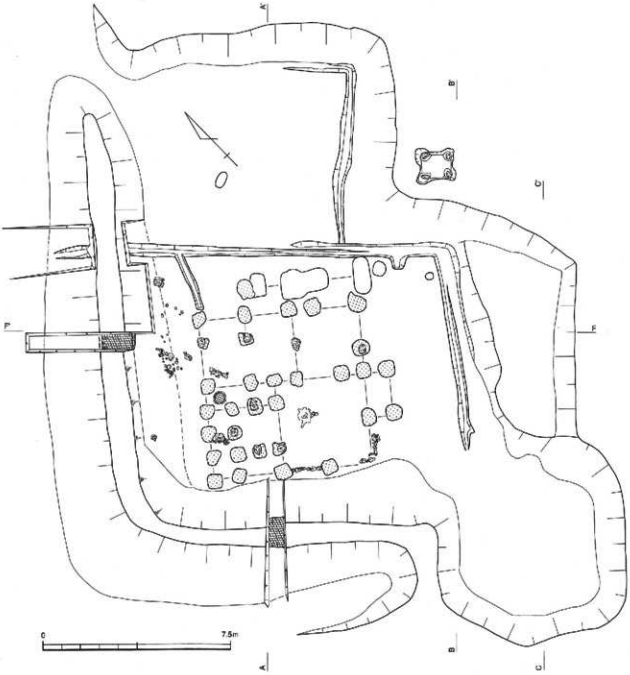
第15図　御崎谷遺跡　4柱設置土坑（SK01）実測図（1/30）

第4節　敷地跡の調査

1．概要

敷地跡と呼称している区域は、盛土構築物の背後（北西側）に存在する。敷地跡の造成は、盛土構築物の存在する面を2m程一段掘り下げた半地下状の平坦面を造ることでおこなわれている。

半地下状の築造は、海上から見えない点や風を遮る点で効果的であったものと想像されるが、その本来の意図については不明である。また、北西側には土塁状の盛土を施して区画している。この敷地跡への進入口は、北側コーナーが開いていることからも分かり、またこの方角の谷には、付随する官舎跡（御崎谷Ⅱ遺跡）が存在している。敷地跡は、大きく3つに分けて考えることができ、溝で区画された建物跡が存在する区域、その北側の進入口の方形区域、南側のやや不整形な方形の区域が存在している。



第16図　御崎谷遺跡　敷地跡調査最終状況（1/150）

2．敷地跡の規模

敷地跡の中心的役割を果たしたと考えられる建物跡が存在する区画は、幅30cm、深さ15cm程の「L」字形の溝で他の平坦面と区画されている。この「L」字形の溝には、建物の一角からの溝も合流しており、溝が排水溝の役目も担っており、その堆積土中の状況から「ダニエル電池」で使用された液体が流されたことも分かった。東側の溝と西側の土塁状盛土で区画された区域の規模は、長径11m、短径９ｍで、面積は99㎡程である。この区画内には、礫石による建物跡のほかに電柱設置用の土坑等が存在する。

北側の区画は、北側コーナーが開いた進入口に通じる区域である。その規模は長径9.5m、短径7.5mで、面積は約71㎡程である。この区画では、建物跡などの遺構は検出していない「広場」であり、その機能については不明な点が多い。この区画では底面に石材を置いた小形の土坑を１基検出している。

南側の区画は、他の２つで構成される「長靴」形の区画の南側コーナーに付設されたように思われる区画である。平面形は方形とも円形とも言い難い不整形な形である。規模は径5.5m程であり、遺構等は検出されなかった。

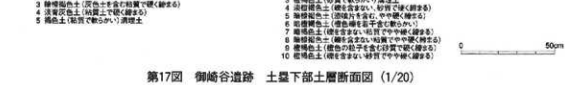
3．敷地跡の堆積状況と土塁状盛土

ここでは敷地跡の堆積状況及び土塁状盛土の構築状況といった土層について述べたい。

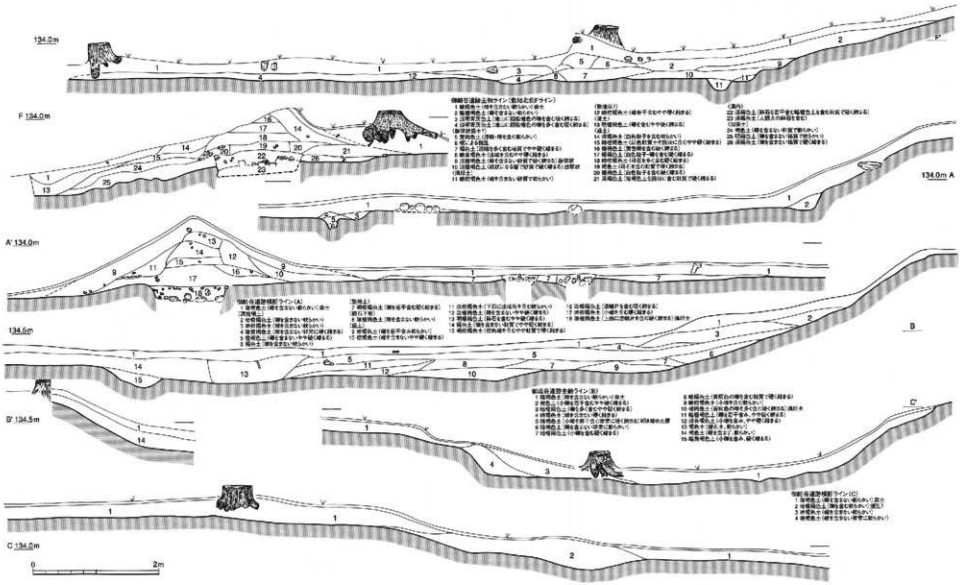
排水溝の堆積状況　排水溝の堆積土は砂質の土層（Ａライン６層、Ｂライン11層）であり、緑錆を多く含む層である。この緑錆はダニエル電池で使用された硫酸銅に起因するものと推測される。

土塁状盛土と排水溝との関係　敷地跡の区画溝は北西側に向かって流れるように作られており、最終的に北西の土塁状盛土にぶつかっている。この土塁と排水溝との関係を土層断面から見たものが第17図である。調査では土塁状盛土の外側（北側）と内側（南側）をトレンチ状に断ち割ってその断面を観察した。その結果、排水溝は、盛土下部でも検出でき、溝に特有の砂質の堆積層（５層、及び３層）が認められた。果たして木製などの材質で盛土下を暗渠状に通過していたのか、排水溝の機能を停止する様な状況で盛土が構築されたのかは、土層断面からでは、今一つ明確にすることはできなかった。

敷地跡の堆積状況　敷地跡では、主に盛土構築物と同一の軸（Ｆライン）とそれに直交する北東・南西ライン（Ａライン）で土層観察した。また、補助的にＢ及びＣラインでも観察をおこなった。



第17図　御崎谷遺跡　土塁下部土層断面図（1/20）



第15図　御嶽谷遺跡　散地跡土層断面図（1/60）

Fラインでは、流入による堆積層と人為的な硬く締まった層が確認された。1～4層は表土及び流入による自然堆積層と考えられ、5～10層は非常に硬く締まっており、人為的に版築状に叩き締めた層と推測される。叩き締められた層は、後述する礫・瓦等が敷き詰められた遺構の下面に対応するものである。このような硬く締まった層はBライン（5層）でも確認することができ、敷地跡の南東側（盛土構築物側）にこの層が広がっていることが分かる。このことから、この層はおそらく盛土構築物への出入りのために盛土されたもので、盛土構築物のある平坦部との段差を解消するために盛られた可能性が考えられる。なお、この層は溝が埋まった後に盛られたものであり、少なくとも建物が建てられた後に築成されたものであるが、建物が存続していた時期と重なるかどうかは良く分からない。

Fライン12層及びAライン7層は、地山直上に堆積している層である。礎石の下部構造の礫は、この層を切り込んだ浅い土坑に詰められている。このことからこの層は、造成後の整地土と推測されるものである。

Bラインの土層では、1～4層及び11、12、14、15層が流入による自然堆積土である。そして、5層が盛土、6～9層は自然堆積土又は5層と同一の盛土層のどちらかと考えられる。また、10層が溝の覆土と推測される。

Cラインの土層は、表土及び自然に堆積した土砂と考えられるものである。

土塁状盛土の構築状況　土塁状盛土については、北西側（Fライン）と南西側（Aライン）の2ヶ所で断ち割り、断面を観察した。Fラインでは旧表土（24～26層）が検出されていることから、大きく造成して盛土は施してはいないようである。下部には砕石を含む層（18～19層）を置き、基本的に硬く締まった層（16、17層）で中心を築土した後に側面に盛土（14、15層）している。

一方Aラインでは、小礫を含む層（17層）をまず築いている。その後に中心部分に盛土（13～16）を施し、その周囲を11と12層で整えてから、最終的に全体的に築土（9、10層）を施して完成させている。なお、17層の上層で側面側に盛られた11と16層には、白色の漆喰片が含まれている。これが何のためであるかは、現時点では良く分からないものである。

このAラインでの工程をFラインで確認される工程と比較すると、中心部分に硬く締まる層を盛り上げ最終的に周囲全体に盛土を施す順序は基本的に同じものであると言える。

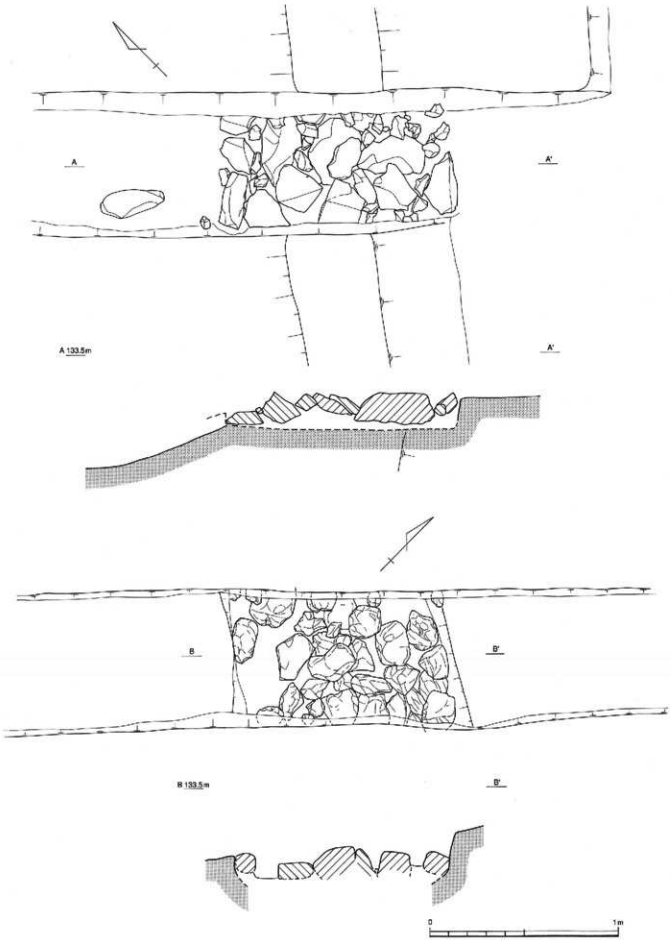
なお、土塁隅付近の盛土中から上瓶が出土しており、中に埋め込まれた状況であった。

土塁状盛土の下部礫群（第19図）　土塁状盛土の各2か所で立ち割った結果、その盛土下部より礫群（Fライン22、23層、Aライン18層）が検出された。この礫群は、溝状に掘られた中に詰め込まれているものである。また、礫の上面の高さは両者とも133.3m前後である。

北西側（Fライン）で確認された下部礫群は、幅1.3m、深さ推定で15cm程の溝に礫が詰められているものである。礫は人頭大の大きさのものが詰められその隙間に拳大の礫が入っているものである。また、大きめの礫は1段～2段程の重なりで、何重にも重なっているものではない。

南西側（Aライン）で確認された礫群は、幅1.15cm、深さ推定で25cm程の溝に詰められているものである。礫の状況は、北西側と同じ様なものである。

これらの礫群は、上面の盛土の下部構造として考えることも可能であるが、もう一つの可能性として当初溝で区画されていた敷地が存在し、改築によって土塁状の盛土が巡らされたとも考えられる。このことは非常に重要な問題ではあるが、確定することは難しい。



第19図　御崎谷遺跡　土塁下部礫群検出状況（1/20）

4．建物跡（図20）

建物跡は礎石建ちの建物であり、また瓦の出土から瓦葺きであった可能性が強いと考えられる。礎石の構造は、径70cm程の方形で浅く掘り窪めた土坑の中に根固めとして拳大の自然石を詰めてその上面に礎石を置いたものである。礎石は粗く加工した石材で径40cm角の方形状で厚さは20cm程の大きさである。礎石又は根固めの場所は、総数で31か所検出している。そのうち根固め上に原位置を保って礎石が出土しているものは、7か所確認された。そして、南西辺及び南側コーナーにあたる部分では礎石の並ぶ軸に沿った石列を検出している。これも建物跡に関連するものと考えている。なお、礎石7は根固めの石が無いもので、動いている可能性もあり、礎石22は切り株で破壊された礎石である可能性が考えられるものである。

なお、当初礎石として認識していなかったが、東コーナーにあたる箇所に存在する礫を詰めた土坑（SK04）も周辺の礎石の並びから礎石として考えて良い可能性が考えられる。

礎石は、基本的に1間（181.8cm）又は半間（90.8cm）の間隔をもって配置されている。その中で特に北西側（礎石9－11の並びと礎石9－29の並びで区画される部分）は、礎石が半間の間隔で非常に密に並ぶ区域である点が特徴である。また、礎石9・16・17、18、10で囲まれた場所では大甕が土中に埋め込まれた状況で出土しており、この部分がトイレである可能性も高い。

復元される建物は、SK04を礎石として考え、石列も関連するものとした場合には礎石1－29、礎石1－SK04、礎石29－石列角、SK04－石列角を各辺とする正方形プランのものが考えられ、その南東辺に半間×1間程張り出した構造が推測される。その規模は、一辺6m程（3間半）になり、張り出した部分は盛土構築物側に面しており、おそらく礎石15－24の部分は出入口であると考えられる。

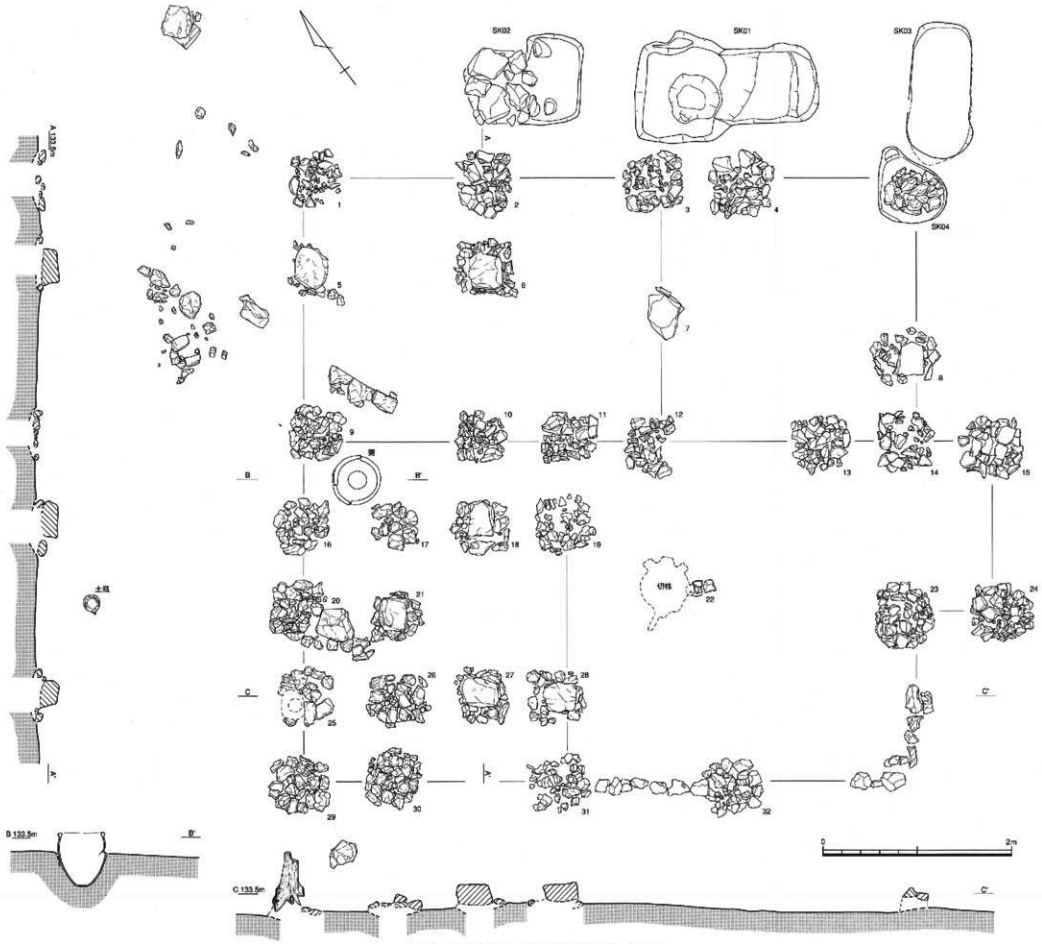
また、この礎石の並びから建物の間取りを推測するのは困難な作業であるが、一応復元を試みたい。

礎石の並びから建物は、礎石9－14の並びで南西側（2間×3間半）と北東側（1間半×3間半）の大きく2つに区画される。

その南西側は、礎石11－31の並びでさらに北西側（2間×1間半）と南東側（2間×2間）の2つに分けられる。この北西側は、礎石が外周に沿って半間間隔（礎石19－17－26－28）で「コ」字形に巡っている。これは、おそらく礫石が密であることから床貼りの部屋であった可能性が考えられるものである。また、礎石9－10の部分は、大甕の設置されている区域への戸があったものと推測される。一方、南東側は、礎石12－13の並びが1間と広いので、この場所は壁でなく戸のあった場所と思われる。

北東側は、良く分からないが、礎石2－10の並びで北西側（1間半×1間）と南東側（1間半×2間半）に分けられる可能性がある。あるいは礎石7が生きている場合には、ここで区切られた北西側（1間半×2間）と南西側（1間半×1間半）に分けられる可能性も高い[2]。

以上述べてきたように、やや復元に検討課題を残す点は多いが、建物は盛土構築物側の方向に出入口を備えた正方形プランのものである。そして、建物内は大きく4つに分けられる間取りで構成されていたものと推測される。



第20図　御崎谷遺跡　礎石建物跡実測図（1/40）

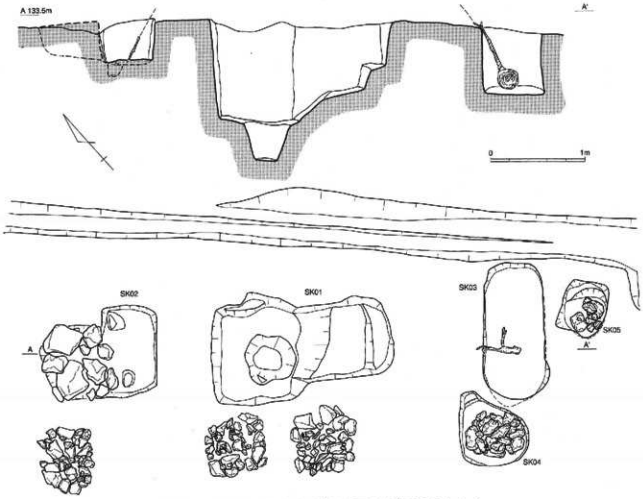
5．土坑

敷地跡で検出している土坑は、全部で7基存在する。そのうち建物跡の北東辺沿いで6基検出している。建物跡区画で検出した6基の内3基（SK01～03）は関連性をもった土坑群であり、木柱（電柱）設置のための土坑群と考えている。また、SK04・05・06はいずれも土坑内に拳大の礫を詰めており、類似した特徴を持っている。SK07は北側の区画で検出し、土坑底に平たい石材を設置したものである。

木柱設置土坑群　この土坑群は、標高133.5mで検出している。その性格はSK01を主柱土坑、SK02・03を支線固定用の土坑とした機能が考えられる。SK01の主柱設置部分と02・03との距離は、それぞれ1.5m、2.6mを計測する。また、これらの土坑の軸は近接する建物跡の軸に沿っていることから同時期に機能していた可能性が高い。以下これらの土坑について述べたい。

主柱土坑（SK01）（図22）　この土坑は、木柱設置用の方形土坑に階段状土坑が付設した構造のものである。全体規模は長径1.95mであり、短径は本体で1.05m、階段部分で0.83mである。

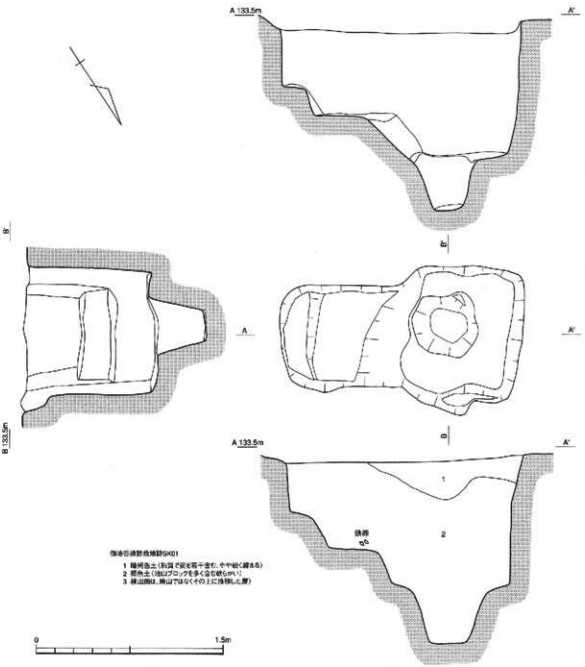
木柱を設置する方形の本体部分は、深さ1.05mで平坦に加工され、さらに中央に径0.5m、深さ0.45mの円形ピットが掘られている。おそらく、この円形に掘られた部分に木柱が設置されていたものと推測される。付設する階段状の部分は2段に掘られているもので、土坑に木柱を設置するための作業用のものと考えられる。土坑の土層は、基本的に木柱設置後に充填された裏込め的な層と推測される。なお本来は木柱が設置された痕跡が土層で認められるが、土層観察時には床面の円



第21図　御崎谷遺跡　敷地跡木柱設置土坑群配置図（1/40）

形ピットの存在が未確認であったこともあり、注意して観察していなかった。このことから土層で痕跡を確認できなかったものと考えられる。確かに中央付近の土層は他と比べ軟らかい層であったことから、注意していれば木柱の何らかの痕跡を確認できていたものと思われる。

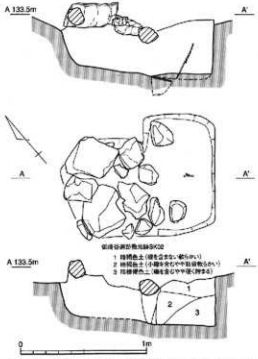
支線土坑（SK02）（図24）　遺構は、主柱土坑北西側に存在し、長方形に近い平面形で未掘の土坑と切り合っている。土坑規模は長径0.95m、短径0.6mで、底面は平坦に加工され深さは0.4mである。土坑内からは、針金（番線）が出土しており、これは主柱土坑に向かっている状態であった。本来は支線固定材が存在していたものと考えられるが、存在していなかった。もう一つの支線土坑であるSK04の状況から考えると、木材による固定材が埋設されていたものかもしれない。土坑内堆積土は、基本的に丸太等の固定材設置後の埋土と推測されるものである。また、土坑の切り合い関係はこの土坑が先に掘られていることが土層断面から確認される。



第22図　御崎谷遺跡　敷地跡主柱土坑（SK01）実測図（1/30）

支線土坑（SK03）（図23）　遺構は、主柱土坑南東側に存在し、楕円形の平面形を成し、支線固定用の丸太を埋設していた土坑である。土坑の規模は長径1.45m、短径0.65mで、底面は平坦に加工され深さは0.7mである。土坑内からは、針金（番線）が出土している。これは丸太に針金が円形に巻かれた状況を示す出土状況であった。また、その巻かれた針金の先は主柱土坑に向かっている。なお丸太は腐朽して無いが、針金の円形部分から径20cm程と考えられ、長さは1.4m前後と推測される。

土坑内の堆積土は、基本的に丸太設置後の土坑内に充填された埋土と推測されるものである。



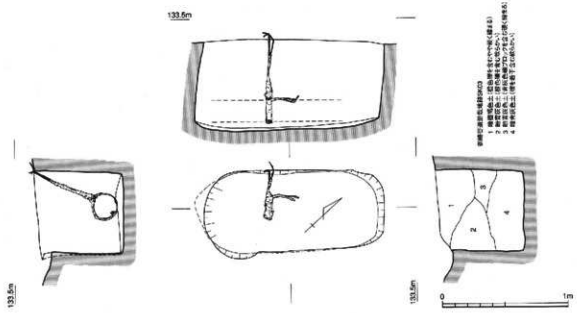
第23図　御崎谷遺跡　敷地跡支線土坑（SK02）実測図（1/30）

その他の土坑

SK04（図25）　遺構は、支線土坑のSK02の南西側で検出した礫を詰めた土坑である。一応土坑として認識して調査したが、礎石の下部の可能性が高い。形状は不整形であり、長径0.75m、短径0.65mである。深さは、完全に掘りきっていないが、1m以上と推測される。詰められた礫は、拳大程の大きさのもので礎石根固めの礫と同質のものである。

SK05（図25）　遺構は、支線土坑のSK03の南東側に存在する不整円形の土坑である。規模は長径0.6m、短径0.5mで、底面は平坦で、深さは0.35mである。土坑底には拳大ほどの礫が入っているものである。今ひとつ性格が分からない土坑である。

SK06（図25）　遺構は、「L」字形の区画溝の東コーナー付近で検出した小形の円形土坑である。規模は、径0.3m程で底に向かって狭くなるものである。深さは45cmで、土坑底には土砂が堆積して



第24図　御崎谷遺跡　敷地跡支線土坑（SK03）実測図（1/30）

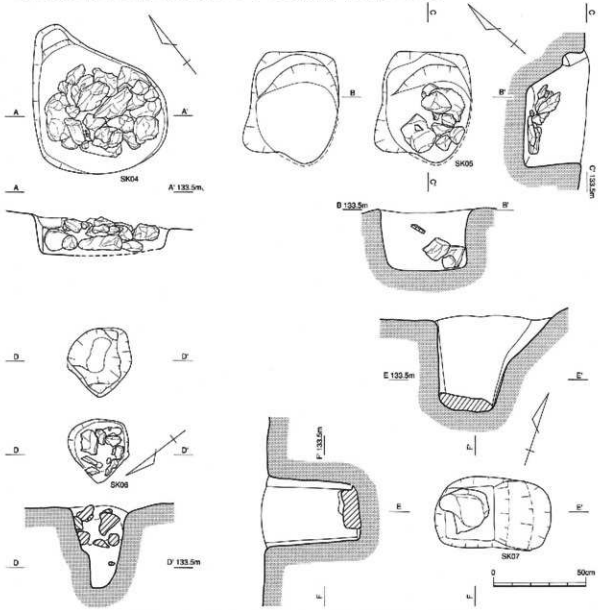
いるが、上方に礫が詰められているものである。性格は不明である。

SK07（図25）　遺構は、北側の区画の中央よりやや西側で検出している。形状は楕円形で長径0.6m、短径0.4mの規模である。底面は平坦であり、石材が置かれている。石材は径25cm、厚さ10cm程の自然石であり、土坑の大きさと変わらない規模のものが置かれている。

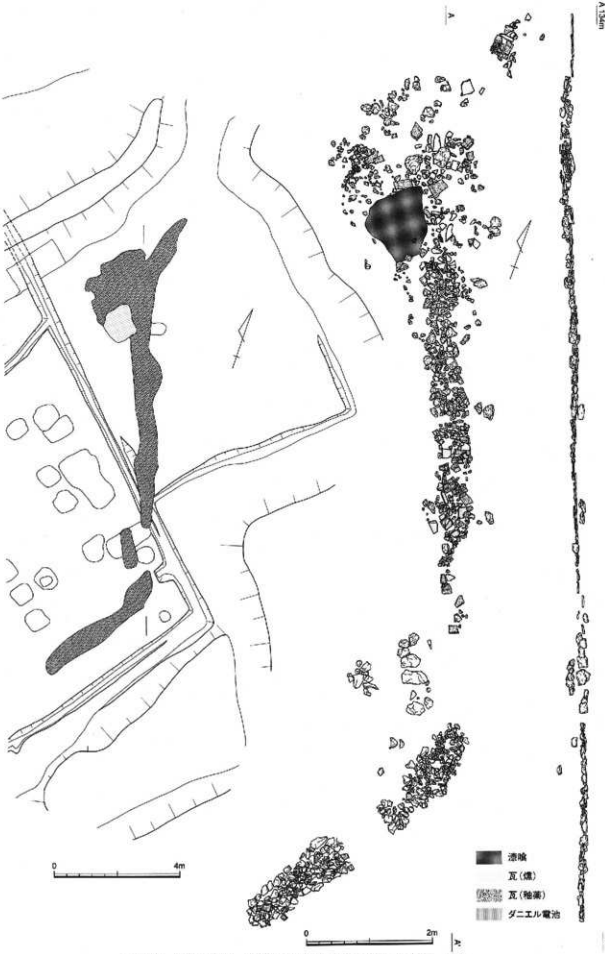
6．礫・瓦敷き遺構

遺構は、礫・瓦・漆喰片が意図的に帯状に敷かれているような状況で検出した。遺構の範囲は、敷地跡進入口より1.5m付近から始まり直線的に延びた後にSK05付近で南西方向に折れて終わっている。この範囲は、ちょうど進入口から建物跡の出入口に向かっているように見て取れ、建物跡の礎石と重ならない。おそらく道状の機能をもった遺構と推測される。

この遺構の幅は、0.6m程であり、厚さは、瓦・礫が二重に重なる程度のものである。また、他の遺構との前後関係を検討するとSK07、SK03、SK07が埋められた後に敷かれていることが分かる。この遺構は、建物と同時期に機能していた施設であるかどうかは、正確には不明であるが、その範囲を見る限りでは同時期に使用されていた可能性が十分考えられる。



第25図　御崎谷遺跡　敷地跡土坑（SK04～07）実測図（1/20）



第26図　御崎谷遺跡　敷地跡礎瓦敷き遺構実測図（1/120、1/60）

第５節　出土遺物

遺物は、敷地跡・盛土構築物・礫・瓦敷き遺構等から出土している。最も多数出土しているのは敷地跡周辺の遺構の存在しない地点である。この出土状況からも分かるように基本的に廃棄された状況で出土している。遺物は陶磁器・ガラス製品・金属製品・瓦が出土している。

１．陶磁器（土器）

陶磁器は総数で72点出土している。基本的に各型式ごとに１点図化しているが、小片のため図化しないで写真掲載だけで終わったものもある。出土器種は碗・坏類、碗蓋類、土瓶、急須、合子、皿、人形、行平、鉢、甕、七輪、七輪五徳が出土している。

碗・坏類（図27）　１～12は磁器碗で、13が酒坏である。出土した総数は27点である。碗は、形状や大きさで４種類程（大形、中形、小形、筒形）に細分できる。１～４は大形の碗で、飯碗として考えられる。口縁が直線的な器種（１、２、４）と内湾する器種（４）とに細分できる。また、３はスプレーによる文様で、やや他のものと異なっており新しい様相をもつものである。５～７は器形が類似した中形の碗で、いわゆる「湯飲み」であろう。また、７は底部中央が人為的に穿孔されている。８～10は筒形の碗で、これも「湯飲み」であろう。このうち９は釉下彩であることや色調からやや新しい様相をもつ。11、12は小形の碗で「湯飲み」であろう。このうち11は、緑色であり他の碗類とは明らかに異なるものであり、新しい様相をもつ。

碗蓋（28図１、２）　中形碗の蓋と考えられる。特に２は文様の類似性から28図５～７の碗とセットになるものと推測される。

蓋（28図３、４）　３は磁器の土瓶蓋、４は陶器で、土瓶又は壷の蓋である可能性があるが不明。

土瓶（28図５～８、10）　磁器の土瓶で、大形のものと中形のものが出土している。５・７と６・８は蓋がセットの大形の土瓶である。両者とも非常に器形が類似する。10は中形の土瓶で色調からやや新しめの様相をもつ。また、８は土坑状盛土の盛土内から完形で出土しており、やや特異な出土状況である。このことから盛土が当初から存在したものか問題が残る。

急須（28図９）　横に把手が付く磁器の急須で、釉下彩のものである。

合子（28図11）　磁器で蓋受けのある方形合子である。蓋受部には赤色顔料が付着している。この顔料については分析等は行っていないので不明であるが、朱肉を入れたものかもしれない。

皿（28図12、13）　磁器の皿は総数３点出土している。12は多角形の皿である。13は高台付の丸皿で多色の文様のものである。

つまみ（28図14）　磁器のつまみである。どのような器種のつまみかは不明である。

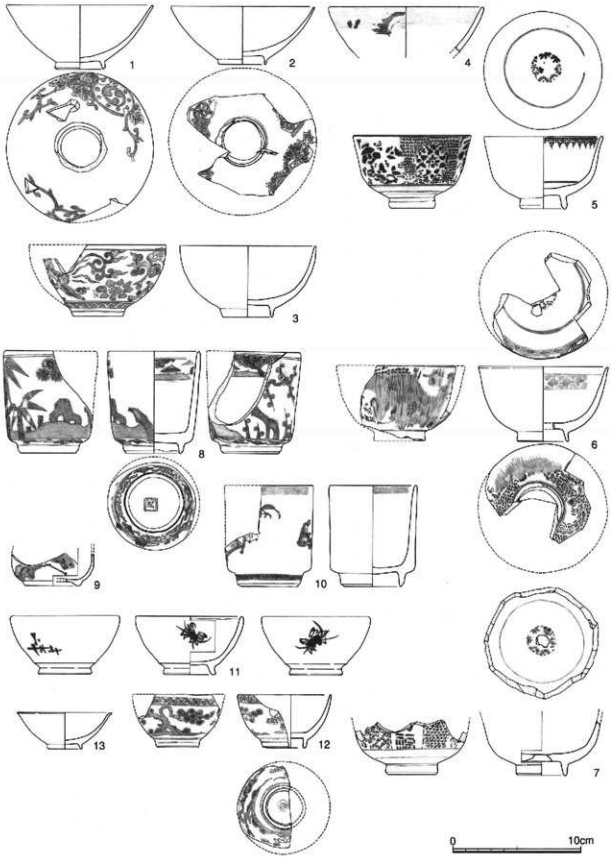
人形（28図15）　白磁の型作りの人形である。上半部は失われているが、銃を携えていることから軍人の人形と考えられる。

陶器皿（28図16）　黄褐色の丸皿又は浅い鉢である。石見焼である可能性が考えられる。

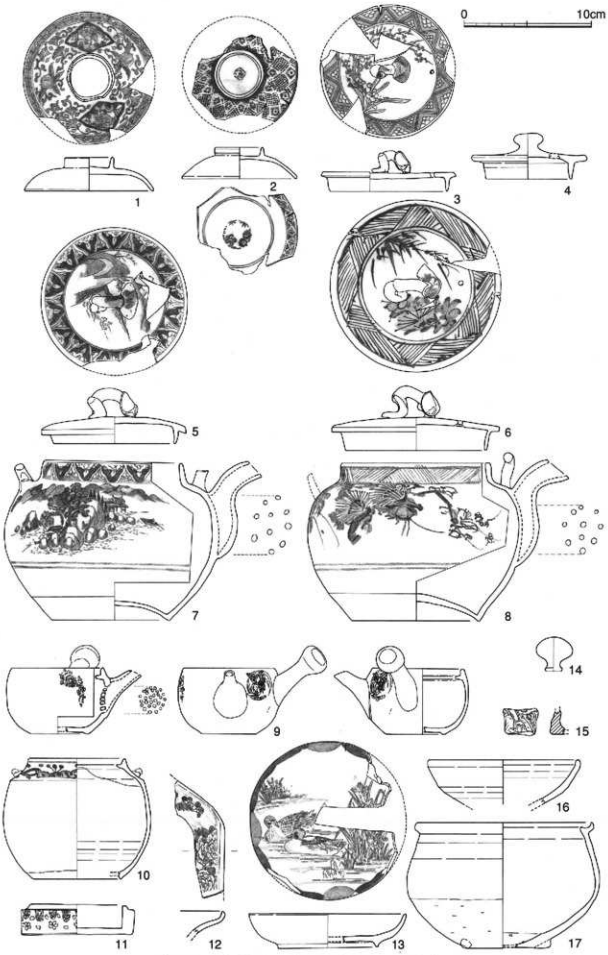
陶器行平（28図17）　行平は総数で６点出土している。基本的に緑色系の色調であり、器形も比較的類似したものと褐色系のものに二分される。緑色系のものは細かく見れば底部の形状や端部の大小で３つに細分できるが、全体が分かるもの１点を図化した。

陶器甕（29図１、３～５）　甕は小形のものと高台付の底部、大形のものが出土している。３は底部付近に染め付けで文様が施されている。５は建物内部（図20参照）に据え置かれていたものである石見焼の大甕で底部に墨書の文字が記されていた。記入内容は「四斗人、五升瓶弐本、二升[瓶]

三本、切片口三□、在中」と読める。これは、出荷時に大甕内部に小形品を一緒に詰めていることから、その内部に詰められた小形品が分かるように記されていたものである[8]。



第27図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（1）(1/3)



第28図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（2）(1/3)

第29図　御崎谷遺跡　出土陶磁器実測図（3）(1/6、1/3)

陶器鉢（29図２）　大形の鉢が１点出土している。

不明蓋（29図６）　つまみ付きの蓋であり、空気孔が１つ開けられている。材質、用途等が今ひとつ分からない器種である。

七輪等（29図７～９）　素焼きの七輪（９）、七輪五徳（８）、七輪の方形の蓋（７）が出土している。また、図化していない個体で七輪と推測される土器が１点存在し、胎土・色調から７の蓋とセットになる可能性が考えられる個体である。

出土陶磁器（土器）の構成・時期について（表２）　出土陶磁器（土器）は72個体程出土しているが、基本的に磁器が占める割合が多い。磁器・陶器・土器の各割合は、72%、21%、７%となり、基本的に小形品は磁器、大型品は陶器、加熱器等は土器といった構成である。器種では碗類が最も多く、土瓶、行平等も多い器種であり、日常品が主要なものである。

さて、陶磁器（土器）の産地[6]について検討してみたい。磁器は基本的に肥前系、瀬戸美濃系のどちらかに属するものと推測される。このうち肥前系のものは、27図５～７の中形の碗としてものだけに限られる。これらはすべて型紙刷りによる文様である。他のものについては、肥前系以外のものと推測され、ほとんどのものが銅板転写によって文様を付けている。これらを瀬戸美濃系として一応考えているが、今後の検討課題である。ただし、28図５～８の土瓶は肥前系・瀬戸美濃系どちらに判断して良いのか分からない個体である。

陶器の産地は、基本的に在地産（島根県内）と推測されるものである。27図４の蓋は県内の布志名焼によく似たものであるが、詳細な検討が必要である。27図16の皿・17の行平は、石見焼と思われる。また、29図１・５の大小の甕は石見焼である。他の29図２・３・４の鉢、高台付底部は現段階では不明である。

土器の産地については、陶器同様に在地産（島根県内）の可能性が高いが、不明である。

最後に出土陶磁器（土器）の時期について検討しておきたい。肥前系とした中形の磁器碗は、型紙刷りによるものであることから、1973年（明治６年）以降であることが確定される。また、瀬戸美濃系としたものもおおよそ明治の後半～大正頃のものとして良いものと思われる。ただし、27図９・11碗、28図10土瓶は他のものより色調等からやや新しい様相を帯びたものである。

陶器については、時期的に参考になるものは29図５の石見焼大甕である。これは、浜田市内の石見焼窯跡の調査成果等からある程度の時期が導き出される可能性を持つものである。この甕の時期の特定について、大甕の中に小形の瓶や鉢などを中に納め出荷する時期の特定作業、大甕の型式編年作業等が必要と考えられ、今後の検討によって時期がある程度判明することを期待したい。

以上のことから出土陶磁器（土器）は、新相と古相の２つに分けて考えることが可能でもあるが、時期の大きく異ならないおおよそ明治の後半～大正頃のものとして考えられる。この年代感は文献による「海軍望楼」の時期と一応大きく離れたものではない。また、大正時代に通信省の施設が機能していたものと想定した場合も大きく矛盾はしないと思われる。しかし、近・現代の陶磁器については詳細な検討があまり行われておらず、今後の検討が必要であることは言うまでもない。

表2　御崎谷遺跡　陶磁器一覧

器種	大別	細別	文様	挿図	個体数	器種個体数
碗	大形（飯碗）	直線	文様A（二巴文・唐草文）	27－1	1	23
			文様B（菊花文？）	27－2	1	
			文様C（スプレー）	27－4	1	
			文様D（草花・竹）	－	1	
		内湾	文様E（鳥・草花）	27－3	1	
	中形		文様A（花・圏線）	27－5	2	
			文様B（青海波・福）	27－7	1	
			文様C（草花・圏線）	27－6	1	
	小形		文様A（蟹）	27－11	2	
			文様B（松竹梅・水楽）	27－12	1	
	筒形		文様A（松竹梅・圏）	27－8	1	
			文様B（宝）	27－9	1	
			文様C（人物・碁盤）	27－10	1	
	破片			－	8	
坏	A		白磁	27－13	1	4
	B		白磁	－	1	
	端部破片				2	
鉢？	高台付、草花文			－	1	1
陶器蓋					1	1
碗蓋			文様A（銀杏・唐草・桃）	28－1	1	3
			文様B（連続文）	28－2	1	
			文様C（草花）	－	1	
土瓶蓋	人形		文様A（梅・草花・連続文）	28－3	1	4
			文様B（菊・笹・松葉）	28－6	1	
			文様C（山・家・海）	28－5	2	
上瓶	大形		文様B（木・花・松葉）	28－8	2	8
			文様C（家・山・人・船）	28－7	2	
	中形		文様A（底部淡赤白色）	－	1	
			文様B（草）	－	1	
			文様C（草花）	28－10	1	
	把手片			－	1	
急須				28－9	1	2
	（注口片）			－	1	
合子				28－11	1	1
皿	多角形皿			28－12	1	5
	丸皿	A	絵唐	28－13	1	
		B	白磁	－	1	
	陶器皿			28－16	1	
		（破片）		－	1	
つまみ				28－14	2	2
人形				28－15	1	1
陶器行平	緑色系	A	底部平底	28－17	2	6
		B	底部上げ底	－	1	
		C	口縁端部やや大きめ	－	1	
		破片	（底部に釉無し）	－	1	
	褐色系			－	1	
陶器鉢				29－2	1	1
陶器壺	小形			29－1	1	4
	高台底部		染め付け有り	29－3	1	
			文様無し	29－4	1	
	大形			29－5	1	
陶器壺	小片		緑釉で白色の縞	－	1	1
七輪五徳				29－8	1	1
七輪				29－9	1	1
七輪蓋				29－7	1	1
七輪？	淡黄褐色、台付き			－	1	1
不明蓋				29－6	1	1
合計					72	

2．ダニエル電池容器

遺跡からは白色の磁器とそれより小振りの素焼きの容器が出土しており、これはダニエル電池の容器であり、前者を長平瓶、後者を楕圓瓶と明治頃には呼称していたものと思われる[9]。ダニエル電池とは、簡易な電池であり、磁器製の容器内に素焼きの容器を入れて使用するものである。白色磁器容器内には、亜鉛板（37図3・4）と希硫酸が入れられ、素焼きの容器内には、銅板と硫酸銅が入れられていた[8]。また、実際の使用では基本的に1セットで1.1Vで、10個繋げて一組として使用されていた可能性がある[9]。また、ダニエル電池は電信用電池として明治以来使用されており、途中他の電池が普及するも昭和の前半頃まで使用されていたようである[8]。なお、表5で数量的な面から検討すると、明らかに素焼きの容器が多量に出土していることが分かる。これは、おそらく、素焼き容器には緑錆が付着している例が多く、耐用が短かったことが原因である可能性が考えられる。また、記録からも素焼き容器の方が多量に必要であった可能性が考えられる[8]。

素焼きの容器（図30）　容器は、側面が弧を描く楕円形の容器であり、口縁より底部の長径が短くなっている。また、規格的に作られたもので計測値が近似している。口縁部の長径は10cm前後、短径は3.2cm前後で、底部の長径は8.5cm前後、短径は2.8cm前後であり、器高は10.8cm前後にまとまる。ただし、やや例外的なものも存在し、口径で最大の9は長径10.3cmであり、10は器高10.2cmと低いものである。

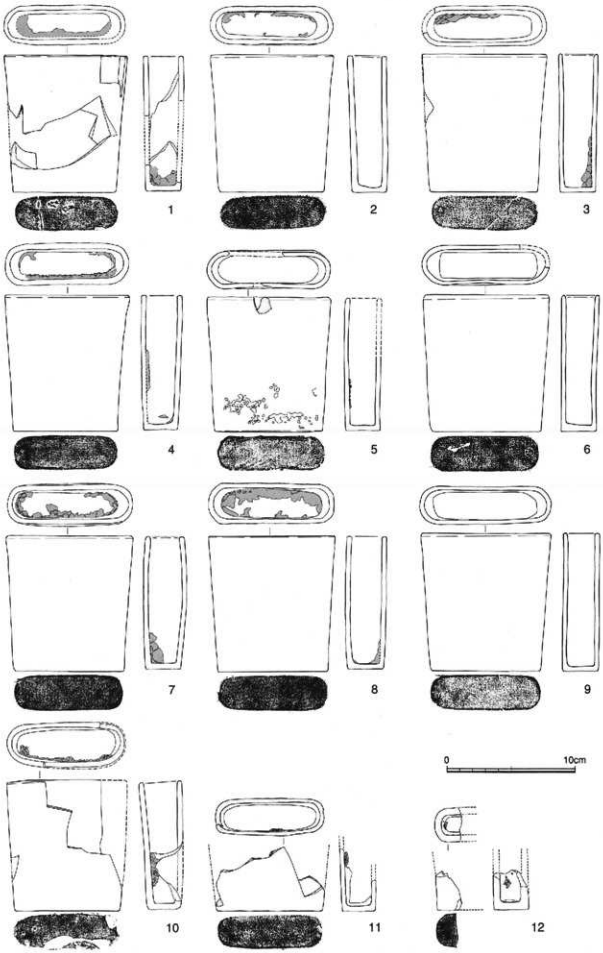
また、ほとんどの個体の底部やその付近には、熔け出した銅が付着し緑錆が確認される。この容器の底部にはスタンプによる7種類のマークが確認される。このマークは製作者等を表す可能性が考えられるが、詳細は不明である。マークは、「み」（1～4）、「㊨」（5，6）、「六」（7，8）、「BY」（9）、「㊫」（10）、「コ」（11）、「ト」（12）といった単純なものである。マークの種類では、表3からも分かるように「み」とスタンプされたものが最も多い。

容器の色調はその濃淡で大きく3つに分かれ、赤褐色－橙褐色－黄褐色の順に淡い色調となっている。この色調の違いは胎土や焼成温度の違いに起因する可能性が考えられる。

色調で最多数のものは橙褐色のものであるが、この色調の違いがスタンプの種類と関連をもつ可能性を検討するために作成したものが表3である。この表によると、ある程度スタンプの種類によって色調の濃淡が異なっており、両者が関連している可能性が考えられる。このことはスタンプが製作所のマークである可能性が高いものと推測され、また、製作所によって色調が異なっていた可能性が考えられる。

表3　ダニエル電池素焼容器　色調－スタンプ相関表

スタンプ / 色調	み	ト	六	BY	コ	㊫	㊨	不明	合計
赤褐色（レンガ色）	9	0	1	0	0	0	0	2	12
橙　褐　色	4	1	6	3	2	1	0	6	23
黄　褐　色	0	0	1	1	1	1	5	0	9
合　計	13	1	8	4	3	2	5	8	44



第30図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器実測図（素焼容器）（1/3）

白色磁器容器（図31・32）　容器は箱形の形状で、板材を組み合わせて作っており、底部の長辺に沿って高さ1.5cm程の仕切り板が設けられている構造である。この仕切られた空間の幅が広い方に素焼きの容器が入れられ、狭い方に電極の亜鉛板が入れられていたと推測される。

この容器は計測値からも分かるように、素焼き容器と同様に規格的に作られているが、やや数値的に大小の差が認められる。口縁の長径12.2cm前後、短径6.5cm前後で、底部の長径12cm前後、短径6.4cm前後であり、高さは12.5cm前後である。また、各部位の数値では底部の計測値が各個体とも差が少なくまとまっている。口縁部の長径・短径とも最大のものは31図2の個体であり、長径13.0cm、短径7.3cmである。また、器高で最小の個体は32図1で、11.9cmである。

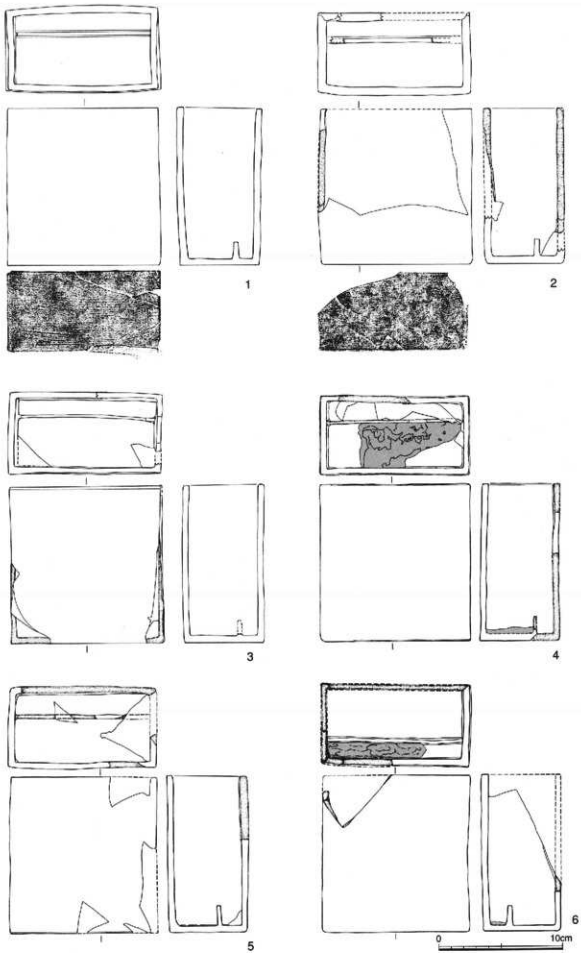
容器の底部にはいくつかの個体で付着物が認められた。付着が認められた個体は、31図4、6と32図1の3個体である。このうち4は仕切られた広い区域で、6、1は狭い区域で認められた。4の付着物は黒色を呈した物質であり、表面に緑錆が見られるものである。これは鉛かクロムである可能性が考えられる。ただし、付着物については理化学的に詳細に分析を行っていないので、付着物の特定はできていない。一方、6と1の付着物は白色を呈しているものであるが、何であるかは不明である。

容器の底部・側面には素焼き容器と同様にスタンプによるマークが確認される。ただし、素焼き容器では全ての個体に付けられている可能性が考えられたが、この容器は個体によって、付けられていないものも認められる。確認したマークは、「 」（31図2）「 」（31図4・6）「 」（32図1）「 」（31図5）「 」（32図3）の5種類存在する。このマークは「」とあるものからも推測できるように製作所のマークと考えられる。また、素焼きの容器と同一のマーク（「卜」、「BY」）も見られ、両容器が同一の製作地（者）または業者によるものであることが考えられる。マークの種類ごとの総数は表4のとおりであるが、「」「」は同一の製作所（者）と推測され、かつ最も多いマークである。

容器の色調は白色のものと少しだけ緑色がかったものの2種類が認められる。また、底部の調整を見ると4種類に分けることができる。底部の調整は長軸方向と平行して刷毛状の線が見られるもの、施釉されているもの、刷毛状の線が見えず不明瞭なものがあり、刷毛状のものにはやや色調が褐色のものと白色のものに細分される。これらの特徴とマークとの関連は表4のとおりである。マークの違いがそのまま色調と底部調整の違いと考えることも可能ではあるが、マークが付いたものが少数であり、確実には言い難いものがある。なお、表からも分かるように白色で底部に刷毛目が付いたものが主流である。

表4　ダニエル電池磁器容器　色調ースタンプ相関表

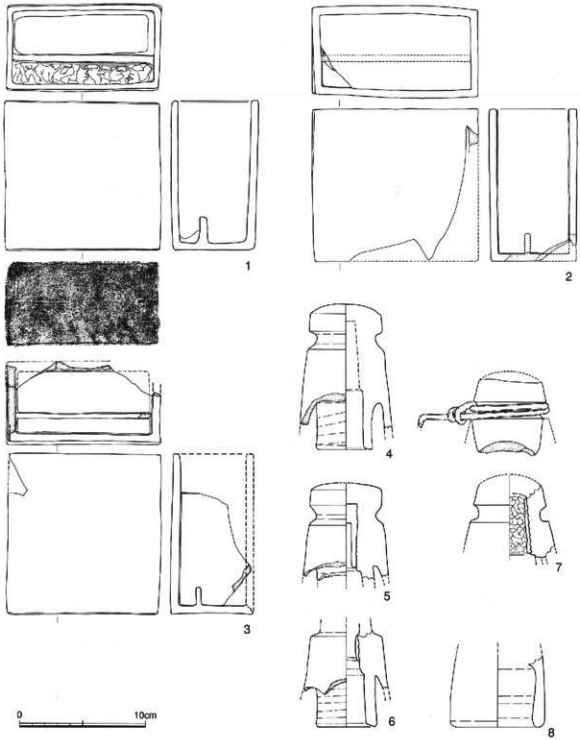
色調・底部調整 ＼ スタンプ					BY	⚓	不明	合　計	
①白色系	①長　軸	1	0	0	1	0	8	10	18
	②不　明	0	1	0	0	0	3	4	
	③施　釉	0	0	0	0	0	3	3	
	④長軸褐色	1	0	0	0	0	0	1	
②緑白色系	①長　軸	0	1	0	0	1	0	2	5
	②不　明	0	0	1	0	0	0	1	
	③施　釉	0	0	0	0	0	1	1	
	④長軸褐色	0	0	0	0	0	1	1	
合　計		2	2	1	1	1	16	23	



第31図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器実測図（白色容器）（1/3）

3．碍子（図32）

碍子は6個体出土しているが、完形に復元できるものはなかった。基本的に「通信用ピン碍子」と呼称されているもので、内側にネジ痕が認められるものである。4～6は裾部が二重のものであり、同一型式のものである。7は鉄線が巻かれた状態で残っているもので、二重の裾部を持つものであるが、やや形態が異なるものである。8は裾部の破片である。



第32図　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（白色容器）・碍子実測図（1/3）

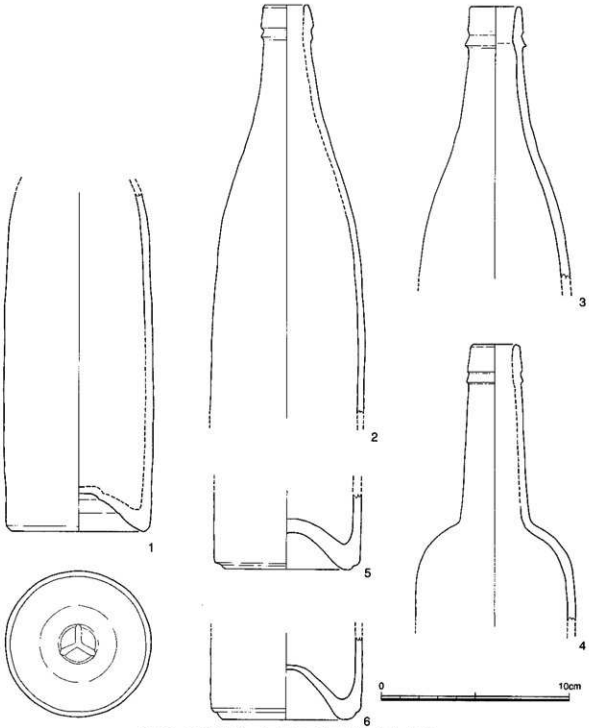
表5　御崎谷遺跡　出土電池容器　一覧

調査区		素焼容器					磁器容器						合計
		端部A	胴部B	底部C	完形に近いA～C	完形	端部A	胴部B	底部C	完形に近いA～C	仕切	完形	
遺跡数	2トレンチ	35	112	10	5	0	0	1	0	3	1	2	169
	14トレンチ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	6トレンチ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	7トレンチ	0	0	0	0	0	0	3	3	0	1	0	7
	10トレンチ	7	18	5	1	1	1	0	0	0	0	0	33
	11トレンチ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	12トレンチ	22	78	19	2	2	0	0	4	1	2	0	130
	13トレンチ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
	15トレンチ	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	3
	25トレンチ	24	54	8	2	0	2	0	0	0	0	0	90
	主軸ライン付近	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	礫石敷き	4	12	0	0	0	2	0	0	0	0	0	18
	9Aトレンチ	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	3
	Bライン	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	Aライン	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3
	cベルト	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3
	土壙	4	1	1	2	3	0	0	0	0	0	0	11
盛土構築物	21トレンチ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
	22トレンチ	13	20	7	1	0	1	4	1	4	0	0	51
	23トレンチ	0	0	0	0	0	0	4	0	0	1	0	5
	盛土入り口	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
その他	排土中	12	26	4	0	0	4	3	2	2	0	0	53
	その他	5	4	1	0	0	23	57	15	0	10	0	115
	表採	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		130	328	61	13	6	33	81	30	12	15	2	711
		538					173						

4．ガラス製品

ガラス製品は、瓶、レンズ、電球の傘、ランプ、板ガラスが出土している。板ガラス以外の製品は42個体程出土している。その内訳については、表6のとおりである。

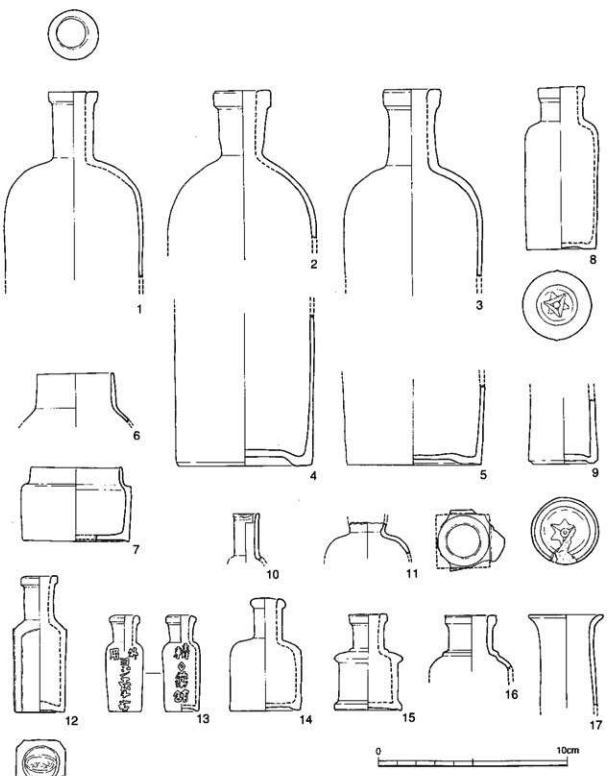
ビール瓶（図33）　ビール瓶は、完形に復元できるものはなく、口縁部を含めた上半分が6個体、底部が8個体出土している。また、製造会社名を表すような体部に銘が入ったものは1点も存在しなかった。瓶の特徴は肩部がしっかりとある個体（4）となで肩の個体（1～3）が存在しており、出土したものは4以外はなで肩のものである。底部は全て上げ底のものであり、2段になる1以外は1段のものである。また、1段の底部も5、6を比較しても分かるように上げ底の高さや厚みが



第33図　御崎谷遺跡　出土ガラス瓶実測図（1）(1/2)

異なっている。

大形の瓶（34図1～5）　胴部径が7㎝以上の大形の瓶は、緑色系（3、5）と淡青色系（1、2、4）の個体が出土している。器形は細部で異なるが、どれも口縁端部外面と頸部の境に段を持ち、底部は若干上げ底になるものである。完形に復元できるものが無いので器高の数値は分からないが、似たような容量と考えられる。



第34図　御崎谷遺跡　出土ガラス瓶実測図（2）(1/2)

なお、このような器形の大形瓶の総数は、緑色系のものが口縁部付近1、底部2で、淡青色系のものが口縁部付近2、底部2個である。

小型の瓶（34図6～16）　小形の瓶は、総数で15点出土している。それぞれ多種多様な器形のものであるが、口縁部径が4cm以上の大きめのもの（6．7）と口縁部径が2.6cm以下のやや小さめのもの（8～16）に大きく2つに分類される。なお、11はこの分類からはずれるやや異形のものである。

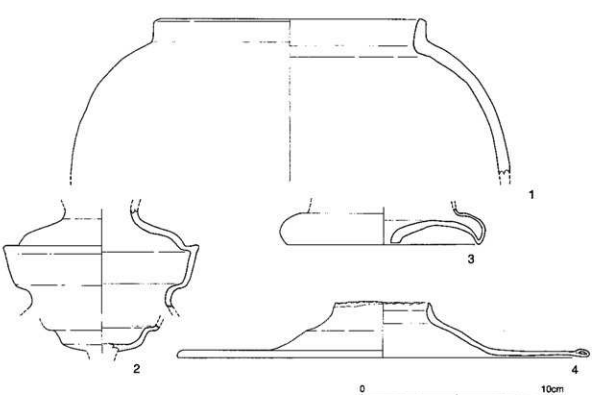
口縁部が大きめのものは、色調が透明で口縁部が単純で広口のものである。このような器形のものは総数で5点出土している。また、図化した6と7の口縁部上端面はざらついた状態のものである。

口縁部が小さめのものは、色調や胴部の器形がバラエティに富んだものであるが、口縁部は肥厚して段が付くものである。8、9はやや器高の高いものであり、底部に星形のマークが見られる。12も底部にマークがあるが、何であるのか判別できなかった。11は口縁部に注ぎ口が付いたものである。13の胴部には両面とも文字が見られ、「外用ヨジエムチンキ」、「精◇薬館」とあるので薬瓶と考えられる。16は他のものと異なり角瓶である。

フラスコ（34図17）　フラスコは2点出土している。17は色調は透明なものであり、口縁部が若干外反するものである。もう1点は図化していないが、肩盛りが付いた破片である。

電球（35図1）　1個体出土しており、他のガラス製品に比して厚く気泡が少ない透明度の高いものである。このような電球は一般家庭用とは考えられないものであるから、海軍望楼の通信用などに使用されていたものかもしれない。

ランプ（35図2．3）　おそらくランプの一部と考えられる製品が2点出土している。2は淡赤色



第35図　御崎谷遺跡　出土ガラス製品実測図（1/2）

の製品である。接合作業によって2つのパーツができたが、どのような形態になるのかは不明なものである。また、上下に関しても良く分からないものである。3は白色のものであり、端部が生きているものであるが、これも上下については不明なものである。

電灯傘　4は電灯の傘の部分である。乳白色を呈するものである。

表6　御崎谷遺跡　出土ガラス製品　集計表

器種名	部　分	特　徴	個体数
ビール瓶	上半部（口縁）	なで肩	5
		肩が張る	1
	下半部（底部）	二段の上げ底	1
		一段上げ底	7
大形の瓶	上半部	淡青色系	2
		緑色系	1
	底部	淡青色系	2
		緑色系	2
小形の瓶	口縁部	広口	5
		口径の小さい	9
		その他	1
フラスコ			2
電球？			1
ランプ			2
電球傘			1
総　数			42

5．金属製品（図36・37）

金属製品は表7のとおり、多種多様なものが出土している。中でも図化はしていないが、薄い板状の製品と幅2、3㎝程の板状製品が多く出土している。薄い板状の製品は建物の壁材と思われるものである。もう一方の板状製品は枠状のもので、直角に折れ曲がっているものが多く、孔に釘が打ち付けられているものがある。他の出土品には雨ドイ受けと思われるものや工具、釘等が出土している。以下、器種ごとに記述したい。

洗面器（36図1）　鉄地に白色のガラスを付けたホーローの洗面器と考えられるものである。このような容器状の金属器は、この1点だけ出土している。

やっとこ（36図2）　工具と呼べるものは、この1点のみ出土している。錆が全面を覆っているが、X線写真によって判明した。把手の端部付近は、鍛打され断面が長方形になるものである。

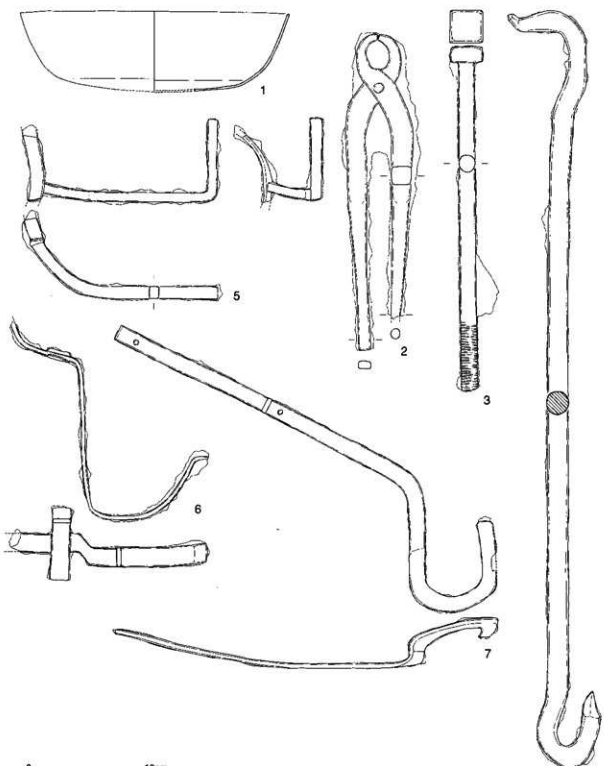
ボルト（36図3）　1点出土しており、頭部が方形のものであり、先端部はX線写真から螺旋状に溝が刻まれていることが判明した。

アンカー？（36図4）　アンテナ設置用の支線土坑（SK03）から出土していることから、支線を巻き付ける根元に設置されていた可能性が考えられるものである。

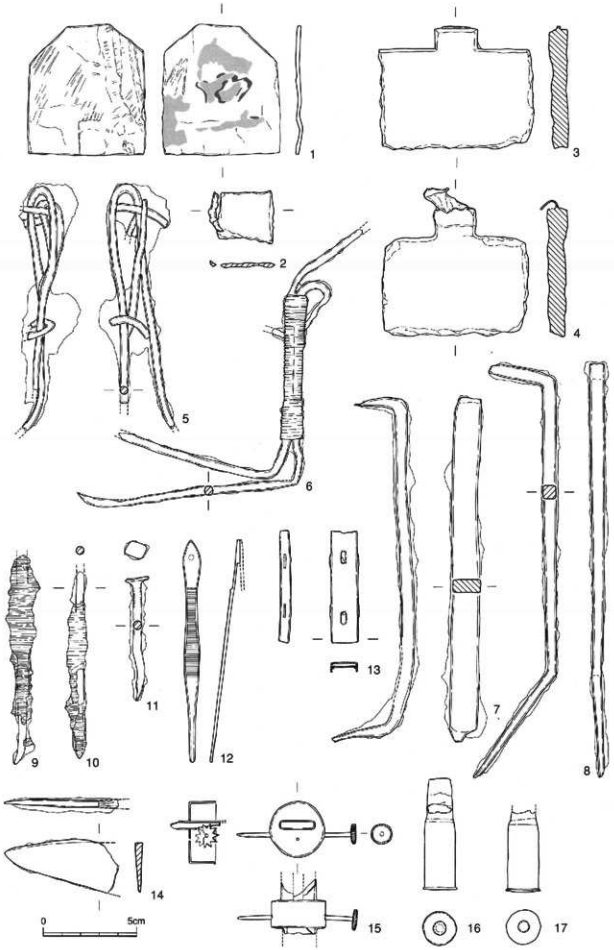
雨ドイ受け（36図5～7）　雨ドイと思われるものは、出土していないが、それを受けるための鉄製品は多く出土している。図化したものは3点であるが、いずれも形状が異なっている。おそらく設置されていた場所によって異なっているものと考えられる。

板状鉛製品（37図1～4）　1～4は鉛製の板状の製品である。これらは形状が5角形のもの（1）、小形の方形のもの（2）、長方形で上端に取り付け部があるもの（3、4）と多様なものである。また、2と4は材料が分からないが、別の部品が取り付けられているものである。これらは3と4がダニエル電池の電極となる亜鉛板であり、他のものは鉛製であることからアース等の電気関係の部品と推測される。

針金（37図5、6）　支線等と考えられる針金は、いくつか出土している。5は敷地跡の支線土坑出土であり、支線として使われたものと考えられる。6は2本の針金が先端付近で留められているものである。



第36図　御崎谷遺跡　出土金属製品実測図（1）(1/3)



第37図　御崎谷遺跡　出土金属製品実測図（2）(1/2)

かすがい（37図７）　かすがいは１点出土しており、断面が長方形のやや平たいものである。

釘（37図８～11）　釘は断面が方形で非常に大形のもの（８）と断面の丸いもの（９～11）が出土している。７は明確に頭部と呼べる部分は存在しないものであり、頭部付近は折り曲げられ状態である。これが当初からのものか使用時に曲げられてものかは不明である。

断面の丸い釘は長さで２分され、９と10は長い部類で、11は短いものである。頭部が残っているものは11のみであり、方形を呈しているものである。

ピンセット（37図12）　片側のみ遺存しているものが１点出土している。これは緑錆が見られるので銅製品と考えられるものである。

小形長方形製品（37図13）　小形の長方形を呈した銅製品が１点出土しており、楕円形状の孔が２か所あいたものである。これは用途不明品であるが、引き戸等の把手部分に使用されているものに類似しており、その可能性が一つ考えられる。

切先（37図14）　包丁の切っ先と考えられる破片が出土している。

調節機（37図15）　ランプの調節機の部品と思われる銅製品が出土している。これは円柱状の本体に歯車が付いたピンが差し込まれているものである。これでランプの芯を調節するものと考えられる。

表７　御崎谷遺跡　出土金属器　集計表

種別		個体数
板状製品	薄板状製品Ａ（鉄以外）	5
	薄板状製品Ａ（鉄）	4
	薄板状製品Ｂ（鉄）弧を描く	2
	板状製品（銅）	1
	板状製品（鉄・段有り・長い）	1
	枠状製品（鉄）	7
建物関連	雨ドイ受け（鉄）	6
釘など	かすがい（鉄）	1
	大形釘（鉄）	1
	鉄釘大	2
	鉄釘小	6
通信無線関係	アンカー（鉄）	1
	板状製品（電極）（鉛）	4
	番線（支線）（鉄）	12
	銅線	1
兵器関係	薬莢（銅）	2
道具	やっとこ（鉄）	1
	ピンセット（銅）	1
	洗面器（ホーロー）	1
	包丁（切先）（鉄）	1
部品	ランプの調節機	1
	ボルト（鉄）	1
	小形長方形製品（銅）	1
不明品	棒状製品Ａ（鉄）	1
	棒状製品Ｂ（鉄）	1
	円筒状製品（銅）	1
	直方体製品（鉄）	1
総数		67

薬莢（37図16、17）　薬莢は２点出土しており、どちらも計測値が同じであるので、同一形式のものと考えられる。軍事関連の遺物としてはこの２点が唯一のものである。

６．瓦（図38～42）

瓦はそのほとんどが敷地跡の礫・瓦敷き遺構から出土している。基本的に廃棄または、二次的な利用がされているものが出土しており、建物にどのように葺かれていたのかは出土状況からは解明できなかった。

瓦は、大きく２種類に分けられるものであり、燻し瓦と釉薬瓦（赤瓦）が出土している。その出土数は表８のとおりであり、釉薬瓦が燻し瓦の２倍近く出土している。これらの瓦は２時期の建物の可能性、瓦の葺き替えの可能性、同時期に２棟の建物の可能性、１棟に２種類の瓦が使用された可能性が考えられるが不明である。

表8　御崎谷遺跡　出土瓦　集計表

（燻し瓦）

種類	細分	破片分類	破片数
棟瓦	ひも付き雁振	大	2
		小	2
		不明小片	5
	大熨斗	孔有り	3
		孔無し	4
	割熨斗		1
	熨斗瓦	不明小片	37
	その他	小片	17
化粧瓦	棟巴	瓦当部	3
		体部	2
	棟止瓦	大	2
		小	2
	鳥伏間		1
軒桟瓦	文様2種類		2
軒袖瓦			0
袖瓦	左		2
	右		6
	不明		0
桟瓦	穴あき		1
	穴無し		6
袖又は桟	小片	①	3
		②	0
		③	9
		④	9
		⑤	0
軒、袖、桟	小片	①	24
		②	77
		③	21
		④	3
		⑤	52
その他	面戸瓦		46
小片			29
合計			371

（釉薬瓦）

種類	細分	破片分類	破片数
棟瓦	ひも付き雁振	大	22
		小	10
		不明小片	0
	大熨斗	長い	4
		短い	11
	割熨斗	孔付近まで施釉	16
		孔付近施釉しない	9
		孔端に空く	1
	熨斗瓦	小片	33
	その他	小片	0
化粧瓦	棟巴		0
			0
軒桟瓦	文様3種類		4
軒袖瓦			1
袖瓦	左		15
	右		9
	不明		7
桟瓦	穴あき		19
	穴無し		13
袖又は桟	小片	①	12
		②	4
		③	52
		④	78
		⑤	13
軒、袖、桟	小片	①	77
		②	110
		③	40
		④	0
		⑤	95
その他			0
小片			28
合計			683

（1）燻し瓦（図38～40）

燻し瓦は、桟瓦、軒瓦、袖瓦等の他に、棟止瓦、棟巴といった屋根の棟に葺く瓦が豊富に存在する点が施釉瓦とは異なっている。この燻し瓦の産地は、当時出雲地方の島根半島部で燻し瓦が製作されていたことからその可能性が十分に考えられる。しかし、出雲地方で焼かれた燻し瓦は、桟瓦の桟が右に付くという全国的にも一般的でない特徴であるのに対して、御崎谷遺跡出土の桟瓦は桟が左に付く一般的なものである。このことから出土した燻し瓦の産地は、出雲地方ではないと思われ、他の産地が鉄補に挙がるが、検討不足であり未だ特定できていない状況である。

棟止瓦（38図1、2） 棟止瓦は棟積の両端に置く瓦であり、2種類のものが各2個体出土している。これらは鳥休の付くタイプであり、棟止板の下端には棟巴と組み合わせるために抉られているものである。1は連珠三巴文の鳥休が付き、棟止板の中心にも連珠三巴文が配されている。2は1とほぼ同じ形状のものであるが、棟止板に連珠三巴文が3つ配されているものである。また、両個体とも雁振部分は湾曲した断面形のものと推測される。

鳥伏間？（38図3） 鳥伏間は1個体出土しており、雁振り瓦と同じ断面形の本体部上部から斜め上方にのびる筒の先端に円形瓦当が取り付くものである。瓦当部の文様は連珠三巴文である。また、本体の瓦上端には円形の孔が2つあいている。なお、この瓦は棟止瓦の可能性も考えられる。

棟巴（38図4、5） 棟巴は棟止瓦の下に組み合わせて使用されるものと考えられ、2種類のサイズのものが存在している。4はやや大形のもので、丸瓦に連珠三巴文の瓦当が付いたものである。5は4とほぼ形状、文様は同じであるが、より小形のものである。

雁振瓦（39図1、2） 雁振瓦は棟積の頂部に葺く瓦であるが、帯状の桟の幅で大小2種類各2個体出土している。1は帯状の桟が幅広のものであり、横断面は緩いカーブをしたものであり、上面の尻部付近に1条の沈線が認められ、中央付近には孔が1つあけられている。2は桟の幅がやや狭いものであり、1より小形のサイズと思われるものである。

熨斗瓦（39図3～5） 熨斗瓦は棟積みに使う瓦であり、遺跡からは、大熨斗と割熨斗の両者が出土しているが、剥熨斗と判明したものは1点のみであった。3は割熨斗であり、分割線が中央に刻まれ、分割線寄りに孔が1つあいているものである。大熨斗はサイズは同じであるが、長辺寄りに孔があるもの（5）と無いもの（4）が存在する。また、4は何らかの工具で焼成後に引かれた分割線が中央に見られ、瓦を葺く作業時に割熨斗として割って使おうとした形跡が認められる。

袖瓦（39図6、7、8） 袖瓦は屋根の妻側をおさめる瓦であり、左右のどちらかに袖板が付くものである。遺跡からは左に付くものが2点、右に付くものが6点出土している。

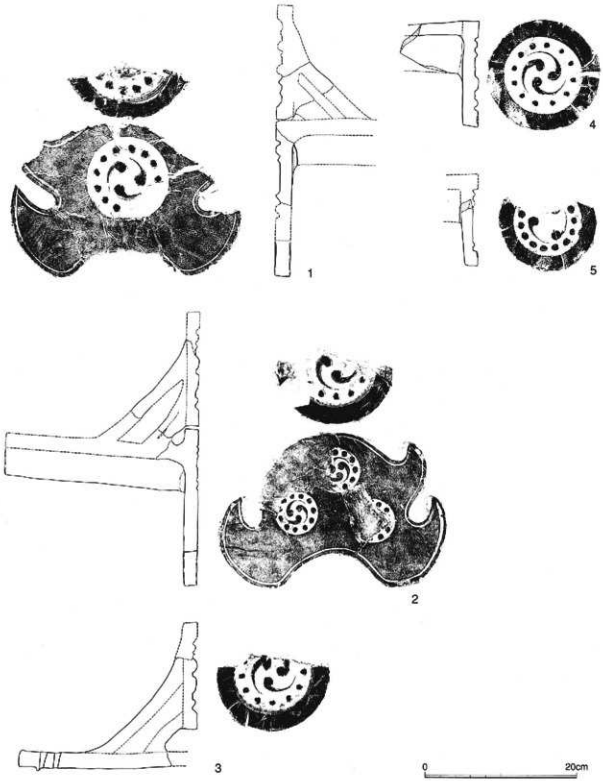
6は左に袖板が付くもので、袖板は頭部まで伸びていないものである。このタイプは桟が付かないで、頭部右側コーナーに切り込みがある。瓦と袖板の接合部には縦方向の櫛目状の条線が刻まれ、支持粘土で補強して作られている。

7は破片であるが、右に袖板が付くものであり、袖板の形状は6と変わらないものであり、尻部に孔が1つ認められる。このタイプは6と相対する位置に葺くもので、左側面に桟が付くものである。また、8は袖板の破片である。出土したものでこの個体のみ形状が異なり、袖板のコーナーがカットされているものである。

軒桟瓦（40図1、2） 軒桟瓦は瓦当文様が異なる2種類出土している。1は尻部に孔が2つあけられているものである。瓦当文様は、中心に三巴文を配した唐草文である。

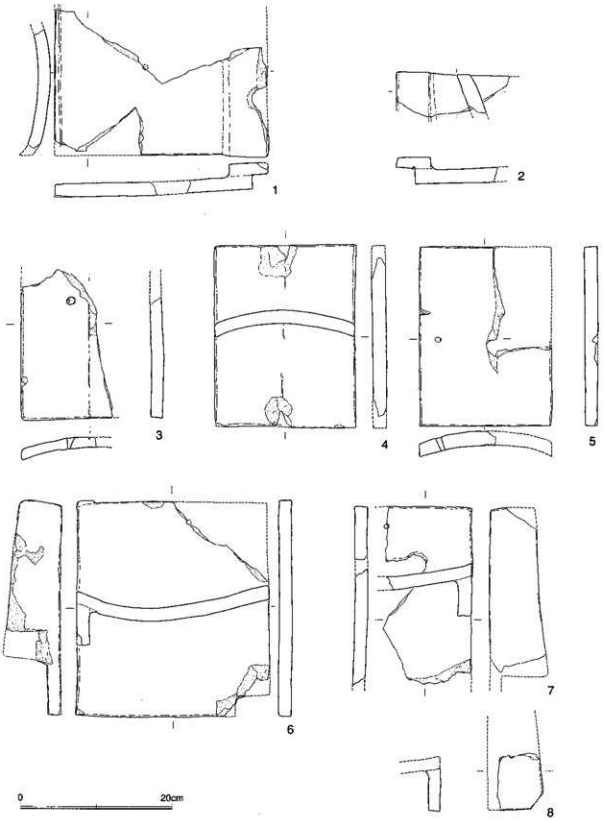
2は瓦当の破片である。文様は中心にやや大きめの巴文が配された唐草文と推測される。

面戸瓦（40図3）　面戸瓦は桟瓦の隙間を埋める瓦であり、三日月状を呈したものが出土している。これは中央に孔が1つあいているものである。3は孔に釘が付いたままの状態で、漆喰が付着したものである。



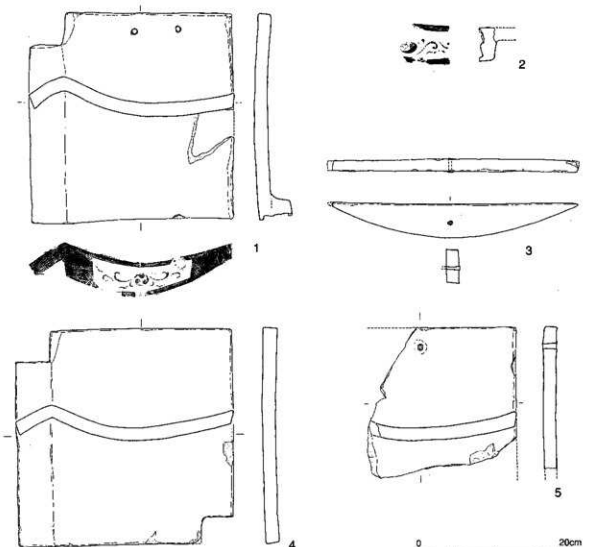
第38図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（棟瓦）（1/5）

桟瓦（40図4）　桟瓦は瓦を葺く際に最も量が多いものであり、出土している種別が確定できない破片のほとんどが桟瓦片と考えられる。4は左に桟を作り、頭部右側と尻部桟側の隅に切り込みが入るものである。



第39図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（雁振・熨斗・袖）（1/5）

その他（40図５）　５は孔が１つ穿たれている瓦片であり、桟瓦・袖瓦・軒瓦のどれかと思われる個体である。



第40図　御崎谷遺跡　出土瓦実測図（軒・桟・面戸）（1/5）

（２）釉薬瓦（図41～42）

釉薬瓦は燻し瓦とは異なり、いわゆる化粧瓦等のような棟積みの両端に置く瓦は出土していない点が特徴である。この出土した釉薬瓦の産地は、最も可能性があるものとして、石見地方（島根県の西部）が考えられる。石見地方で生産された釉薬瓦は赤い瓦であり、宍道湖南岸で産出されるいわゆる来待石（凝灰質砂岩）を原料とした釉薬を用いたものである。また、石見地方は全国的にも釉薬瓦の一大生産地である。遺跡出土のものは釉薬の色調などを見ても石州瓦と変わらないものであるから、産地は石見地方を考えて差し支えないものと思われる。

雁振瓦（41図１、２）　雁振瓦は大小２つのサイズが出土している。どちらのものも断面は緩いカーブを描くものであり、中央に１つ孔があけられているものである。また、上面尻部側には１条の沈線が刻まれ、釉薬はここまで施されているものである。

１は大形のサイズのものである。帯状の桟を取り付ける接合面には、櫛目状の条線が刻まれてい

る。2は小形のサイズのものであり、帯状の桟の幅も狭いものである。

熨斗瓦（41図3～10）　熨斗瓦は割熨斗（3～7）と大熨斗（8～10）の両方がともに出土している。

割熨斗は分割線が下面の裸胎部分に刻まれているものであり、上面に刻まれた葺し瓦の割熨斗とは異なっている。釉薬は5、6のように中央付近には無く両側辺に施されるのが一般的であるが、3、4のように全面に施されているものが存在し、遺跡出土のものは全面に施釉しているものが多く見受けられる。また、孔は3のように中央付近に2つあけるものが一般的であり、4と5も同様のものであるが、6のみが端部に片寄ってあけられている例外的なものである。

大熨斗は一方の側面側に釉を施さないで、そこに孔を穿つものが出土している。また、長さが異なる2種類のものが存在する。7は長さが短いタイプのものであり、この長さは割熨斗とほぼ同じものである。8も7と同じサイズのものと想定される。9と10は長さが長いサイズであり、10の大熨斗下面の裸胎部には、釉薬で文字が書かれている。

10の釉薬による文字は人名が書かれているもので、上段が「岩谷」、下段が「九八郎　万市　安市」と読めるものである。また、「岩谷」の右にも何らかの文字が書かれているが、欠損のため不明である。この書かれた名の人物は釉薬で書かれていることから瓦の製作者と考えられる。

袖瓦（42図1～3）　袖瓦は左右両方のものが出土している。どちらも尻部側に釉薬を施さない部分があり、そこに孔があけられているものである。また、袖板は長方形で頭部まで伸びないものである。

1と2は左側に袖板が付くものである。1は袖板が無く剥がれた状態のものであり、接合面の櫛目状の条線が確認される。尻部側の中央には孔があるが、貫通していないものである。また、頭部側の右隅は矩形に切り込みが入っている。

3は右側に袖板が付くものであり、尻部桟側の隅が矩形に切り込まれている。また、尻部側に孔が1つあるが中央より右によった位置に穿たれている。

軒袖瓦（42図4）　軒袖瓦は軒先の角（袖側）に葺かれる瓦であり、形状は軒桟瓦と袖瓦が一緒になったような形である。また、この種の瓦は葺かれる数の非常に少ない瓦であり、憑し瓦も合わせて4の瓦1点だけ出土している。

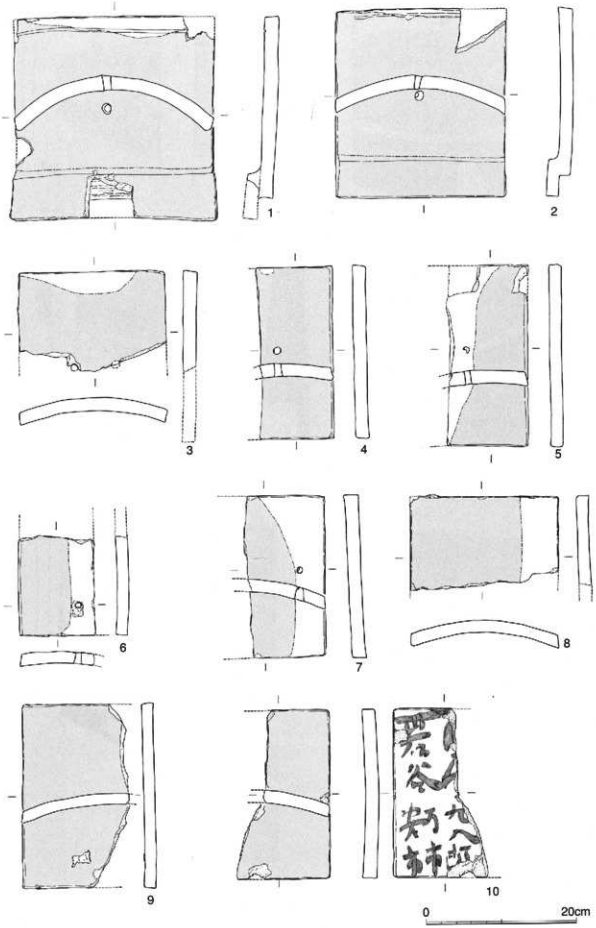
4は右側に袖板の付く軒袖瓦であるが、袖板は欠損している。瓦当文様は中央に「井」とありその外方にやや肥厚した唐草文が施されているものである。

軒桟瓦（42図5～7）　軒桟瓦は尻部側に釉薬が施されずそこに孔があいており、文様から少なくとも3種類出土している。5は尻部側の中央と左寄りに2つの孔があくもので、尻部桟側に隅切りが入れられている。瓦当文様は中心飾の外方に唐草文を配置したものである。また、これは焼成が悪いもので、釉薬がガラス質になっていないものである。

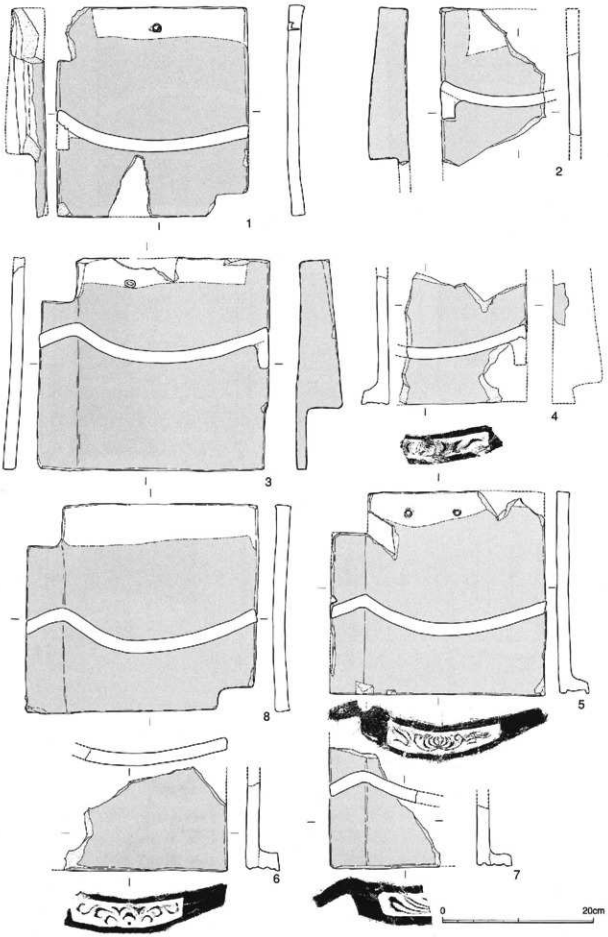
6は瓦当部分の厚みがあるもので、頭部右側隅周辺の破片である。瓦当文様は中心飾の外方に唐草文を配したものである。

7は中心飾は分からないが、外方に幅の厚い草文を配したものである。

桟瓦（42図8）　桟瓦は桟が左に付くもので尻部に釉薬を施さず、頭部右側と尻部桟側を矩形に隅切りしているものである。8は孔が無いものであるが、上面の尻部側の裸胎部分に孔をあけている桟瓦も出土している。



第41図　御崎谷遺跡　出土施釉瓦実測図（雁振・熨斗）(1/5)



第42図　御崎谷遺跡　出土施釉瓦実測図（袖・軒・桟）(1/5)

第6節　小　結

これまでの節で述べてきたように、御崎谷遺跡では、近代以降の遺構と遺物を検出した。これらの遺構と遺物について、ここでは成果と今後の課題点について簡単に整理しておきたい。

1、検出遺構について

遺構はこれまで述べてきたように盛土構築物、アンテナ設置用土坑、建物がある敷地跡で構成されている。これらは防衛庁の残された資料から「海軍望楼」として設置された施設であることがほぼ間違いないものである[2]。ここでこれらについて、もう一度整理すると以下のとおりである。

盛土構築物 ― 海軍望楼の監視所本体で、高さ2m程の盛土による下部構造の上部に砕石を混ぜたセメント状の建造物を建設し、ここから日本海沿岸を監視していた。また、上部構造は馬蹄形を呈し、日本海側に窓が付けられていた可能性が高い。

アンテナ設置土坑 ― 通信無線用アンテナ用の木柱を設置。木柱の長さは、2.6m以上（主柱土坑に付設した溝から推測）と考えられる。また、空中線を張るためにもう1本の木柱が必要であるから調査区外に同形態の土坑が存在している可能性が考えられる。また、四柱設置土坑としたものも関連する柱の設置用である可能性も考えられる。

敷地跡 ― 望楼の管理棟の置かれた場所。管理棟は通信無線用のダニエル電池を置いた電源室、トイレ等が置かれていたものと思われる。また、敷地跡は竪穴状に造成された平坦面であり、土塁状の盛土により2辺が区画されている。

以上の遺構によって検出した施設は機能していたものと推測される。

2、出土遺物について

出土遺物は基本的に勤務者が使用していた物と、施設やそれに関連する機器の部品と思われる物が出土している。

陶磁器 ― 管理棟などで使用した食器などの用途が考えられ、一部に五徳などの火器が存在する。また、施設の期間が文献の通りであれば、明治後期の一括性の高い陶磁資料として評価できる可能性をもつものである。

ガラス製品 ― ビール瓶、薬瓶、照明関係であり、基本的に日常品が出土、ただし電球片で厚いものは通信関係で使用していた可能性が推測される。

金属製品 ― 基本的に工具と管理棟の建設に使用されていた物であるが、鉛製品の中ではダニエル電池の電極である亜鉛板が2個体出土している。

瓦 ― 管理棟に葺かれていた瓦と推測されるが、二次的に敷地内の道に敷かれた状態で出土している。また、施釉と釉薬の2種類の瓦が存在し、軒桟瓦の文様も多種である。このことから管理棟の葺き替え、立て替えといった可能性や、瓦がかき集められ葺かれていた可能性、さらには最初から道に敷くためのものであった可能性などあらゆる可能性が浮き上がる結果になった。

ダニエル電池容器 ― 通信無線用の電池として使用されていたものと考えられる。他の無線通信施設の状況から全国的にダニエル電池が使用されていた期間と矛盾無いものである。

3、西郷海軍望楼について

検出した施設は、明治30年12月27日付けの海軍省の現地領収に関わる文書から西郷海軍望楼であることが判明している。ここではこの西郷海軍望楼について、文献資料などから検討したい。

西郷海軍望楼に関連する年表を表9に挙げているが、その機能した時期は、設置された1898（明

治31）年から1910（明治43）年までの12年間と非常に短いものである。また、常設の海軍望楼として設置[7]されているものである。また、この設置の契機は、時期的に考えて日本とロシア間の緊張関係が関係するものと推測され、日本海沿岸の海上監視のために設置されたものと考えられる。また、このことは1898（明治31）年から1901（明治34）年までの間に日本海沿岸部に8か所（西郷含む）も常設の海軍望楼が設置されていることからも窺える[8]。

これらの海軍望楼の業務は、1894（明治27）年の勅令第77号の海岸望楼条例[9]によると、海上の監視、付近を通航する船舶との通信、気象観測、犬気予報、海難報告等が主なものであったようである。また、海軍望楼には下士官、兵のみが配置され、必要に応じて海軍望楼長として兵科将校、特務士官あるいは准士官が置かれることもあった[10]。

1903（明治36）年には無線電信機が実用化され20か所の海軍望楼に装備され、西郷海軍望楼にも設置されている[6]。この無線電信機は、「36式送信機[6]」と呼ばれるものであり、海軍省の開発した無線電信送信機としては初期の型式のものである。これの装備によって西郷海軍望楼において無線通信業務が執り行われていたことが分かり、さらに出土したダニエル電池はこの通信機に関連したものである可能性が高いと考えられる。

1904（明治37）年には日露戦争が開始され、戦況に応じて県内でも隠岐島前と大社町日御碕の2か所に新たに海軍望楼が設置されている。

1910（明治43）年に西郷海軍望楼は、廃止されており、これは、日露戦争終結とその後の無線電信機の発達による大型の無線電信施設の設置、さらに海上部隊の増強などが背景にあり、廃止されたものと推測される[6]。その後は、1924（大正13）年に盛土構築物の部分を通信省が取得しているが、実態は未だ不明である。

4、今後の課題点について

発掘調査と文献資料等により、検出した遺構についてある程度の性格は解明できたが、いくつかの課題点も残された。最後にその点について述べておきたい。

文献資料では、海軍望楼設置の前段階で、隠岐島後の併合町村会評決に関わる文書や、設置後の開始時期の海軍省告示、廃止後の土地取得関係の文書（通信省が関連するか？）が存在しているものと思われるが、これらについてはまだ未調査である。また、海軍望楼の構造などについて他の海軍望楼の類例や陸軍の海岸監視哨との比較等の検討も今後必要と考えられる。その他にも残された課題は多いと思われ、今後の検討が必要であることはいうまでもない。

表9　西郷海軍望楼（御崎谷遺跡）関連年表（註11、12、13文献より作成）

時　　期	内　　容	備　　考
1897（明治30）年9月5日	島根県から海軍望楼用地の献納申請	島根県知事→海軍大臣・内務大臣
1897（明治30）年12月27日	現地領収済み（12月16日）の届け	呉鎮守府司令長官→海軍大臣
1898（明治31）年2月3日	西郷海軍望楼の設置	明治31年2月海軍省告示第2号
1903（明治36）年	無線電信機（36式）の装備	
1904（明治37）年	日露戦争	
1910（明治43）年4月1日	西郷海軍望楼の廃止	明治43年4月海軍省告示第5号
1924（大正13）年	通信省が土地の一部を取得	

表10　御崎谷遺跡　出土陶磁器　観察表

掘図NO	区	遺　構	器　種	口径	底径	器高	最大径	文　　様	技法	産地	備　考
27－01	散地跡	12トレ	碗 (飯A)	11.5	(3.6)	5.1	11.6	青色で草花	銅板転写		
27－02	散地跡	12トレ	碗 (飯B)	(11.2)	(3.5)	4.6	(11.4)	青色竹縞1条 青色で蛇草マーク	銅板転写	瀬戸美濃?	
27－03	散地跡	2トレ 12トレ	碗 (飯E)	10.8	4.0	5.7	－	青色で鳥・花	銅板転写	瀬戸美濃?	
27－04	排土		碗 (飯?C)	12.4	－	－	－	青色で草?	スプレー		
27－05	散地跡	2トレ	碗 (中型A)	9.2	3.4	5.8	9.4	青色で花 青色圏線	型紙刷	肥前系	
27－06	散地跡	12トレ	碗 (中型C)	(10.2)	(4.0)	(5.9)	(10.4)	青色圏線 青色で草花	型紙刷	肥前系	
27－07	排土		碗 (中型B)	－	3.8	－		青色圏線 青色で青海波、文字種	型紙刷	肥前系	
27－08	散地跡	15トレ	碗 (筒形A)	(7.2)	4.4	8.1	7.5	青色で松竹梅	銅板転写	瀬戸美濃?	角枠銘 「開」
27－09	不明		碗 (筒形C)	－	(4.2)	－	－	緑色で葉	銅板転写	瀬戸美濃?	
27－10	散地跡	12トレ	碗 (筒形B)	(6.7)	(4.4)	(8.0)	(7.0)	青色で人物・碁盤・行灯・植物	銅板転写	瀬戸美濃?	
27－11	散地跡	1・2トレ 周辺	碗 (小型A)	8.4	4.0	4.6	8.7	黒色で葉2匹	銅板転写	瀬戸美濃?	
27　12	排土		碗 (小型B)	(7.4)	3.4	4.2	7.4	青色圏線 青色で松竹梅	銅板転写	瀬戸美濃?	丸枠銘 「永楽」
27－13	散地跡	土軸ライン 北側	坏 (酒杯A)	7.6	2.8	2.9	－	－	－	瀬戸美濃?	
28－01	散地跡	25トレ	盆(鉢又は中型碗)	10.2	－	2.7	10.3	青色で銀杏・唐草・桃・鳥	銅板転写	瀬戸美濃?	
28－02	散地跡	10トレ	盆 (中型碗)	－	(9.0)	(2.5)	(9.2)	青色圏線、帯線 青色で連続紋	銅板転写		焼印
28－03	散地跡	9－Aトレ	盆 (上瓶A)	9.0	－	3.2	10.6	青色で梅・草花・連続紋	銅板転写		
28－04	散地跡	9－Bトレ	つまみ付蓋	6.9	－	3.6	9.2	－	－	布志名	陶器
28－05	散地跡	2トレ	蓋 (大中瓶C)	9.8	－	4.4	11.5	青色で文様帯・山・海・家	銅板転写		
28－06	散地跡	10トレ	蓋 (大中瓶B)	11.0	－	5.1	13.4	青色で菊・笹・松垣	銅板転写		
28　07	散地跡	2トレ	上瓶 (大土瓶C)	(10.8)	9.4	残存 12.7	－	青色帯線2条 青色で家・山・人物・鳥	銅板転写		
28－08	散地跡	築地上中	上瓶 (大土瓶B)	11.5	10.1	18.4	－	青色帯線 青色で木・花・松垣	銅板転写		
28－09	散地跡	12トレ	急須 (A)	－	－	－	－	黄色とピンクで草花・蝶・菊	銅板転写	瀬戸美濃?	
28－10	散地跡	12トレ	中瓶 (中上瓶C)	7.6	8.0	9.6	11.8	青色で草花	銅板転写		胴部鮫肌状
28－11	散地跡	2トレ	合子	7.5	8.8	2.1	9.0	青色で松花	型紙刷又は、銅板転写	瀬戸美濃?	
28－12	散地跡	15トレ	Ⅲ (八角皿?)	－	－	－	－	青色で花	銅板転写		
28－13	散地跡	Bライン	Ⅲ	12.4	7.9	2.8	12.6	黒茶青緑色で鳥・池・水花	絵皿		
28－14	散地跡	ハンド内	つまみ	－	－	2.7	2.8	－	－		
28－15	排土		人形	－	－	－	－	－	－	瀬戸美濃?	人物、鉄砲
28－16	散地跡	10トレ	Ⅲ (丸皿A)	(12.2)	－	－	－	－	－	石見焼?	陶器

挿図NO	区	遺 構	器 種	口径	底径	器高	最大径	文 様	技法	産地	備 考
28−17	敷地跡	2トレ 12トレ	行平 (A)	13.8	5.5	10.0	15.4	−	−	石見焼？	陶器
29−01	敷地跡	12トレ	壺	(13.6)	−	−	−	−	−	石見焼？	陶器
29−02	敷地跡	25トレ	鉢	(24.4)	−	−	−	−			陶器
29−03	敷地跡	25トレ	底部 (人型品)	−	14.6	−	−	青色で草？	染付		陶器
29−04	敷地跡	10トレ	蓋 (高台付)	−	22.2	−	−	−	−		陶器
29−05	敷地跡	ハンド	人類	−	−	−	−	−	−	石見焼	墨書あり 陶器
29−06	敷地跡	12トレ	つまみ付蓋	8.2	−	−	−	−	−		
29−07	敷地跡	12トレ	蓋 (七福C)	長辺 7.3	短辺 6.3	厚さ 0.9	−	−	−		素焼
29−08	敷地跡	10トレ	七厘 (五符)(B)	(7.2)	−	(17.7)	(20.0)	−	−		焼印「花、鼠、 風雅」素焼
29−09	敷地跡	10トレ	七厘 (A)	(12.5)	−		−	−	−		素焼

表11　御崎谷遺跡　出土ダニエル電池容器（素焼）観察表

挿図NO	区	遺 構	口径	口縁幅	底径	底幅	器高	マーク	付着物	色調
30−01	敷地跡	15トレ南西	9.7	3.2	8.1	2.8	10.9	み	緑錆	赤茶
30−02	敷地跡	12トレ北西	9.8	3.1	8.4	2.8	10.9	み	緑錆	赤茶
30−03	敷地跡	10トレ	−	3.2	8.5	2.9	11.0	み	緑錆	オレンジ
30−04	敷地跡	築地北東部	9.8	3.3	8.2	2.7	10.8	み	緑錆	赤茶
30−05	敷地跡	築地北東部	9.8	(2.8)	8.6	2.8	10.7	㊄	緑錆	黄
30−06	敷地跡	12トレ北西	10.0	3.0	8.7	2.8	10.9	㊄	緑錆	黄
30−07	敷地跡	築地北東部	10.1	3.1	8.7	2.8	10.8	六	緑錆	オレンジ
30−08	敷地跡	築地北東部	10.0	3.2	8.7	2.9	10.7	六	緑錆	オレンジ
30−09	敷地跡	12トレ北西	10.3	3.0	8.7	2.8	10.9	BY	緑錆	黄
30−10	敷地跡	10トレ	−	−	8.3	2.8	10.2	㊅	緑錆	黄
30−11	敷地跡	12トレ	−	−	8.4	2.7	−	コ	緑錆	オレンジ
30−12	盛土部	22トレ	−	−	−	−	−	ト	緑錆	オレンジ

表12　御崎谷遺跡　出土ダニエル容器（白色容器）観察表

挿図NO	区	遺構	口径	口縁幅	底径	底幅	器高	マーク	付着物	色調	底部調整
31−01	敷地跡	2トレ	12.3	7.0	12.4	6.5	12.8			白	長軸方向ハケメ
31−02	排土		12.2	−	12.2	6.5	12.6	〈木上〉		白	長軸方向ハケメ茶色
31−03	敷地跡	12トレ	12.3	6.5	12.1	6.5	12.7			白	長軸方向ハケメ
31−04	敷地跡	12トレ	12.2	(6.5)	12.1	6.5	12.7	〈木上製〉	緑錆	白	不明瞭
31−05	排土		12.0	(6.5)	−	6.3	12.7	◇BY◇	緑錆	白	長軸方向ハケメ
31−06	敷地跡	2トレ	−	(6.5)	11.9	6.4	12.7	〈木上製〉		緑	長軸方向ハケメ
32−01	敷地跡	2トレ	12.4	6.7	12.3	6.5	11.9	〈下〉	白錆	緑	不明瞭
32−02	敷地跡	15トレ	13.0	7.3	−	−	12.1			白	施釉
32−03	盛土部	22トレ	12.1	−	12.0	6.5	12.7	⚓		緑	長軸方向ハケメ

表13　御崎谷遺跡　出土碑子　観察表

挿図NO	区	遺構	頂部径	最外径	最内径	長さ
32−04	不明		5.8	−	4.1	11.55
32−05	不明		5.7	−	−	7.9
32−06	盛土部	8トレ	−	−	4.6	7.8
32−07	敷地跡	12トレ	−	−	−	6.6以上
32−08	敷地跡	12トレ	−	6.5	−	5.7

表14　御崎谷遺跡　出土ガラス製品　観察表

挿図NO	遺　構	器　　種	口径	底径	器　高	最大径	色調など
33−01	不明	ビール瓶底部	−	7.0	18.0 以上	8.0	㊇
33−02	不明	ビール瓶上部	2.2	−	21.8	8.2	
33−03	不明	ビール瓶上部	2.6	−	14.5 以上	8.0	
33−04	不明	ビール瓶上部	2.2	−	14.6 以上	8.4	
33−05	2トレ	ビール瓶底部	−	6.8	4.0 以上	7.9	
33−06	不明	ビール瓶底部	−	6.8	4.3 以上	8.0	
34−01	不明	大型瓶上部	2.6	−	9.9 以上	7.4	淡青色
34−02	不明	大型瓶上部	2.8	−	7.9 以上	7.9	淡青色
34−03	不明	大型瓶上部	3.0	−	10.0	7.4	淡緑色
34−04	不明	大型瓶底部	−	7.0	8.0 以上	7.4	淡青色
34−05	不明	大型瓶底部	−	7.2	4.3 以上	7.6	淡青色
34−06	不明	中型瓶	4.1	−	2.6 以上	5.7 以上	
34−07	不明	中型瓶	4.9	5.7	3.9	5.8	
34−08	上軸ライン 北側	小型瓶	2.6	3.6	8.6	3.9	淡緑色 ✡
34−09	不明	小型瓶	−	3.2	3.5 以上	3.7	
34−10	不明	小型瓶	1.4	−	2.5 以上	−	淡青色
34−11	不明	中型瓶	−	−	1.7 以上	4.6	淡緑色
34−12	不明	小型瓶	7.9	2.6	7.2	2.8	
34−13	不明	小型瓶	1.1	1.8	5.1	4.0	精◇薬館
34−14	不明	小型瓶	1.6	3.7	6.0	3.8	
34−15	不明	小型瓶	2.1	3.6	5.1	3.6	淡緑色
34−16	不明	小型瓶	2.6	−	2.9 以上	4.2 以上	
34−17	不明	フラスコ	3.8	−	4.8 以上	−	淡緑色
35−01	不明	電球？	14.8	−	8.2 以上	23.4	淡紫色
35−02	不明	ランプ	−	−	5.4+1.5= 6.9以上	(10.4)	ピンクと白
35−03	不明	ランプ	−	−	1.9	10.9	白
35−04	不明	傘	5.0	−	2.9	21.8	白

表15　御崎谷遺跡　出土金属製品　観察表

挿図NO	区	遺構	種　別	長さ	幅	厚さ	備　考
36－01	敷地跡	10トレ	碗形製品	口径 21.4	器高6.4 (復元)	0.1	外面白色 (ホーロー)
36－02	敷地跡	築地盛土内	やっとこ	25.1	(最大幅) 5.4	－	鉄製
36－03	敷地跡	10トレ	ボルト	27.4	(頭部) 2.6	1.3	頭部方形・鉄製
36－04	アンテナ設置部	SK３	板状アンカー製品	60.0	－	2.8	鉄製
36－05	盛土部	18トレ	雨ドイ受け	15.6	6.5	0.8	鉄製
36－06	敷地跡	瓦溜まり	雨ドイ受け	15.8	1.5	0.4	鉄製
36－07	盛土部	20トレ	雨ドイ受け	36.0	1.3	0.4	鉄製（曲がる）
37－01	盛土部	４トレ南東側	多角板状製品	7.0	6.1	0.2	鉛製
37－02	敷地跡	15トレ	板状製品	3.0	2.7	0.2	鉛製（破片）
37－03	不明		電池電極	8.1	－	－	亜鉛板
37－04	不明		電池電極	6.9	7.7	0.9	亜鉛板
37－05	敷地跡	SK02	支線	(13.7)	－	0.4	木質付着 ２本セット鉄製
37－06	敷地跡	築地盛土上面	支線	27.0	1.2	0.5	２本を１ヶ所でまとめる鉄製
37－07	敷地跡	10トレ	かすがい	18.1	1.5	0.7	鉄製
37－08	敷地跡	26トレ	大釘？	23.0	－	0.7	鉄製（頭折る、先端曲がる）
37－09	盛土部	16トレ	鉄釘（大）	10.9 以上	－	0.45	木質付着（多）
37－10	盛土部	16トレ	鉄釘（大）	9.9 以上	－	0.4	木質付着（多）
37－11	盛土部	20トレ	鉄釘（小）	6.6	－	0.45	
37－12	敷地跡	瓦溜まり	ピンセット	11.7	0.9	0.15	銅製
37－13	敷地跡	10トレ	長方形製品	6.0	1.4	0.5	銅製 孔２
37－14	不明		刃の先	6.0 以上	2.6	0.4	鉄製（包丁？）
37－15	不明		ランプの調節機本体	径 3.0	高さ 1.3	歯車径 1.2	銅製 ピン付
			ピン頭部	長さ 6.5	径 0.2	頭径 1.1	
			ピン軸	長さ 1.9	幅 0.5	高さ 2.9以上	
37－16	敷地跡	Aライン南西側	薬莢	5.9	1.8	0.1	銅製？
37－17	不明		薬莢	4.4	1.8	0.1	銅製？

表16　御崎谷遺跡　出土瓦　観察表

師岡NO	区	遺　構	種　別	a	b	c	d	e	f	g	h	I	j	備　考
38－01	散地跡	ストンロード12トレ(北側)	鳥休付棟止瓦(大)	15.0	1.7	0.7	2.3	不明	6.0	1.9	−	−	−	連珠三巴文
				20.2	10.4	0.6	2.2	31.4	不明	−	−	−	−	
38－02	散地跡	9Bトレ	鳥休付棟止瓦(小)	15.0	2.0	0.5	1.8	25.3	6.3	1.7	−	−	−	連珠三巴文の3個
				20.6	6.0	0.2	1.8	30.0	2.0	−	−	−	−	
38－03	散地跡	1トレ周辺	鳥伏間？	14.1	2.1	0.6	1.8	(23.4)	5.2	0.85	−	−	−	孔2
38－04	散地跡	1トレ周辺	棟瓦(大)(棟巴)	14.0	2.1	0.5	2.0	8.0以上	−	−	−	−	−	連珠三巴文
38－05	散地跡	ストンロード	棟瓦(小)(棟巴)	12.4	2.0	0.6	1.7	不明	−	−	−	−	−	連珠三巴文
39－01	散地跡	Aライン(北側)	雁振瓦(大)	28.1	(19.6)	5.2	1.7	1.8		−	−	−	−	沈線孔子あり
39－02	散地跡	ストンロード	雁振瓦(小)	13.4以上	6.0以上	4.4	1.5	2.0		−	−	−	−	
39－03	散地跡	12トレ	割り熨斗瓦(穴有)	12.0以上	19.5以上	1.6	深3.0	孔1.0	−	−	−	−	−	分割線入れてある孔1
39－04	散地跡	9Bトレ	大熨斗瓦(穴無)	18.5	24.0	1.8	3.5	−	−	−	−	−	−	分割の割付線あり
39－05	散地跡	2トレ	大熨斗瓦(穴有・分蘭)	17.5	23.6	1.6	3.3	0.75	−	−	−	−	−	孔1
39－06	散地跡	Aライン(北側)	袖瓦(左)	25.4	28.5	1.8	1.7	5.6	21.9	(0.7)	−	−	−	シンプルな袖部
39－07	散地跡	ストンロード	袖瓦(右)	12.5以上	23.4以上	1.7	1.7	5.8	21.4	0.5以上	−	−	−	孔1袖はシンプル
39－08	散地跡	12トレ	袖瓦片(右)	不明	不明	不明	1.6	(7.0)以上	−	−	−	−	−	袖部片
40－01	散地跡	9Bトレ	軒桟瓦(A)	4.3	0.6	0.5	2.7	3.2	13.2	27.3	27.3	1.8	0.7	瓦当面、三巴文・唐草文
40－02	散地跡	ストンロード	軒桟瓦(B)	(4.5?)	0.5	0.4	2.0	(3.4?)	不明	不明	不明	(1.8)	−	巴文と唐草文
40－03	散地跡	9Bトレ	面戸瓦	33.3	4.5	1.8	0.5	−	−	−	−	−	−	しっくい付
40－04	散地跡	ストンロード	桟瓦	28.7	28.5	1.7	−	−	−	−	−	−	−	凹面沈線
40－05	散地跡	ストンロード	孔のある瓦	(19.8)	(19.7)以上	1.8	0.8	−	−	−	−	−	−	孔1
41－01	散地跡	ストンロード12トレ7トレ	雁振瓦(大)	26.5	26.3	5.8	1.9	2.0	1.3	−	−	−	−	孔1面とり
41－02	散地跡	瓦溜まり	雁振瓦(小)	25.0	22.5	5.1	1.7	1.8	1.2	−	−	−	−	孔1
41－03	散地跡	ストンロード1トレ	熨斗瓦(割A)	19.7	13.3以上	1.9	3.5	(1.0)	−	−		−	−	孔1対全面施釉
41－04	散地跡	10トレ	熨斗瓦(割A)	9.6	22.9	1.9	不明	1.0	−		−	−	−	孔1全面施釉
41－05	散地跡	ストンロード12トレ9Bトレ	熨斗瓦(割B)	10.5	24.0	1.8	不明	0.9		−	−	−	−	孔1中央無釉
41－06	散地跡	25トレ	熨斗瓦(割C)	10.0	13.0以上	1.7	不明	0.7	−	−	−	−	−	孔1中央無釉
41－07	散地跡	不明	熨斗瓦(大のし短)	10.7以上	21.4	1.9	不明	0.8	−	−	−	−	−	孔1
41－08	散地跡	7トレ	熨斗瓦(大のし短)	19.7	12.2以上	1.7	3.7	不明	−	−		−	−	
41－09	散地跡	13トレ	熨斗瓦(大のし長)	14.4以上	21.4	1.7	不明	不明	−	−	−	−	−	

挿図NO	区	遺 構	種 別	a	b	c	d	e	f	g	h	I	j	備 考
41－10	散地跡	13トレ	熨斗丸	12.5 以上	22.2	1.8	不明	不明	－	－	－	－	－	裏面文字入
42－01	散地跡	ストン ロード	袖丸 (左)	25.5	27.7	1.8	1.8	不明	(19.4)	1.0	－	－	－	孔 貫通しない
42－02	散地跡	ストン ロード	袖丸 (左)	13.8 以上	20.7 以上	1.7	1.8	3.8	20.1	－	－	…	－	
42－03	盛土部	18トレ	袖瓦 (右)	30.8	28.0	1.8	1.6	4.2	19.7	1.5	－	－	…	孔1
42－04	散地跡	瓦溜まり	軒袖瓦 (右)	16.8 以上	17.2 以上	1.6	1.8	不明	不明	－	－	－	－	「井」単文
				3.8	0.7	0.3	1.8	2.6	11.5 以上	－	－	－	－	(軒部分)
42－05	散地跡	瓦溜まり	軒桟瓦 (C)	3.9	0.8	0.5	1.8	2.7	14.5	28.5	26.5	1.7	1.1	唐草文
42－06	散地跡	13トレ	軒桟瓦 (A)	4.5	0.8	0.3	2.4	3.0	14.9	21.6 以上	13.5 以上	1.7	－	唐草文
42－07	散地跡	13トレ	軒桟瓦 (B)	4.6	0.8	0.4	1.7	2.9	6.5 以上	14.7 以上	15.9 以上	1.7	－	唐草文
42－08	盛土部	18トレ	桟瓦	30.7	27.2	1.9	－	－	－	－	－	－	－	黒色の釉

表17　御崎谷遺跡　出土瓦　計測位置対応　一覧

種類	a	b	c	d	e	f	g	h	I	j
棟止瓦 (鳥休)	棟止板高さ	文様部分径	文様部分深	棟止板厚	棟止板幅 (左右)	平瓦厚	－	－	－	－
	瓦当径	瓦当玉縁幅	瓦当玉縁深	瓦当厚	平瓦長	筒部外径	筒部厚	－	－	－
鳥伏間?	瓦当径	瓦当玉縁幅	瓦当玉縁深	瓦当厚	平瓦長	筒部外径	孔径	－	－	－
棟巴	瓦当径	瓦当玉縁幅	瓦当玉縁深	瓦当厚	丸瓦長	－	…	－	－	－
雁振瓦	長 (桟－尻部)	幅	桟幅	桟厚	平瓦厚	孔径	－	－	－	－
剣熨斗	短辺幅	長辺長さ	厚	高さ	孔径	－	－	－	－	－
大熨斗	短辺幅	長辺長さ	厚	高さ	孔径	－	…	－	…	－
袖瓦	幅(左右)	長 (頭部－尻部)	厚	袖厚	袖部幅 (短辺)	袖長(長辺)	孔径	－	－	－
軒袖瓦 (瓦当)	幅(左右)	長 (頭部－尻部)	厚	袖厚	袖部幅 (短辺)	袖長(長辺)	－	－	－	－
	瓦当高さ	瓦当玉縁幅	瓦当玉縁深	瓦当厚	文様部分高	文様部分幅	－	－	－	－
軒桟瓦	瓦当高さ	瓦当玉縁幅	瓦当玉縁深	瓦当厚	文様部分高	文様部分幅	幅(左右)	長 (頭部－尻部)	厚	孔径
桟瓦	幅(左右)	長 (頭部－尻部)	厚	－	－	－	…	…	－	－
面戸瓦	長さ	最大幅	厚	孔径	－	…	－	－	－	－

第５章　大床遺跡の遺構と遺物

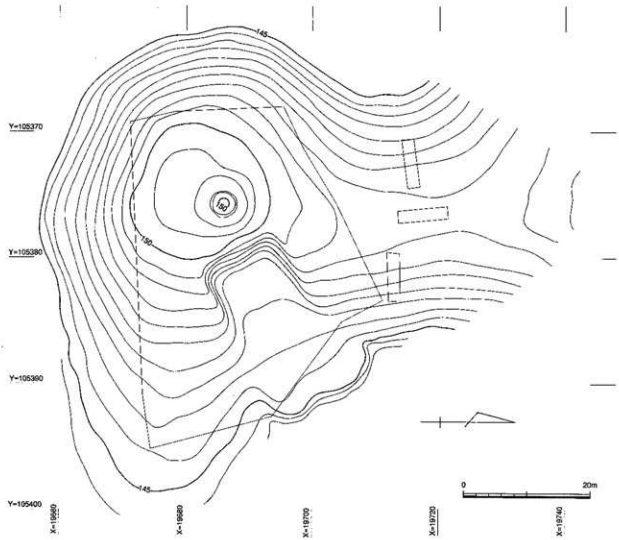
第１節　調査前の状況と概要

調査前の遺跡の現況は山林であった。伐採前は標高151mの山頂部に崩れた円形のレンガ積み施設が確認できるだけであり、後に建物跡が存在していた平坦部はある程度想定はできるものであったが、立ち木の多さから明瞭には分からなかった。伐採とその後の地形測量（43図）によってレンガ積み施設が若干の高まりを持つマウンド中に設けられていることが判明した。また、大きく斜面を造成して造り出した平坦部に存在する建物基礎の一部が露出しているのが確認された。

発掘調査の結果（44図）、検出した遺構はレンガ積み半地下施設、建物跡、横穴である。また、調査前から調査中にかけてこれらの施設が、第２次世界大戦中の防空監視用の施設であることが地元の人々からの情報で寄せられた。そして、最終的に当時勤務していた人による説明によって遺構の性格等について明確にすることができた。

第２節　レンガ積み半地下施設（「聴音壕防空監視哨」）

レンガ積み半地下施設は、聞き取り調査によって、「聴音壕防空監視哨」と呼ばれるタイプの防空監視施設であることが判明した。構造はレンガによって半地下状の円筒形の部屋を作りその周囲



第43図　大床遺跡　調査前地形測量図（1/600）

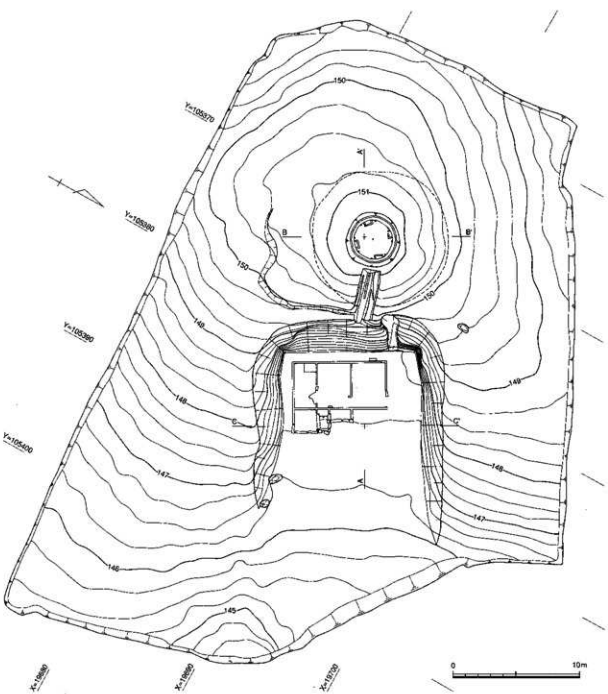
を盛土によって古墳状にしているものである。また、付属するものとして土中に埋め込まれた土管を検出している。

1．形状と規模（図45）

レンガ積み半地下施設は、大床山山頂部の標高151mの自然地形上に築かれている。施設の現況での最高所の高さは標高151.2m、盛土裾の標高は150mであり、盛土は0.5m程盛られている。また、本来は施設の上部構造として屋根が設けられていたものと推測される。

盛土は径5.5m程の範囲に平面円形状に盛られており、その中心部に円形のレンガ積み施設が設けられている。

レンガ積み施設はレンガをセメントによって接着して円筒状に積み上げている。このレンガは戦後、地元住民によって上半部を抜き取られており、本来の高さについては不明である。



第44図　大床遺跡　調査後地形測量図（1/300）

レンガは6㎝程の隙間を置いて2重に積み上げられており、外側の外法径3.8m、内法径は、3.1mである。現状ではレンガ積みは内側で床面から60㎝の高さで7段程しか残っていないが、外側の抜き取り痕跡等から14段以上は積み上げられ、高さは1.1m以上と考えられる。

床面には壁に沿って4方向にレンガによる方形区画が設けられている。これは長辺側がレンガ3個、短辺側がレンガ1個で組み合わされており、内法で長径48㎝、短径27㎝の大きさのものであり、2段以上は積み上げられていたものと推測される。この方形区画の性格については確かなことは不明であるが、その設置されている位置から方角を示している可能性が考えられる。

それは、座標軸で検討してみた限りでは、中心から北西・北東・南西・南東の各方向に正確に設置されており、角度的に誤差が無いことから想像される。防空監視では、敵機の発見方角と進行方向の方角についての情報が必要であり[9]、こういった点を考慮に入れると検出した方形区画は、方角を知る目安となる構造物の一部であった可能性が十分に考えられるのではなかろうか。

また、方形区画の両側にはそれぞれ径12㎝のピットが、総数で8か所あいている。これはおそらく他地域のこのタイプの防空監視哨施設[8]を見る限りでは、上部の屋根を支える柱穴と考えることができるものである。

床面のピットは中央にも1つ存在している。これは径10㎝程のもので、ピンポールによる調査では、後述する埋設された土管の方向に「L」字形に曲がるものであり、柱穴と考えるよりは土管とセットのものと考えられる。

2．埋設土管（図45）

レンガ積み施設の東側に付設して土管が埋設されている。これは盛土を構築する以前に溝を掘って埋設されてものである。また、土管はレンガ積み施設の床面中央のピットとつながるものと推測され、その先端は建物が建つ平坦部の後背斜面に出てくるものである。

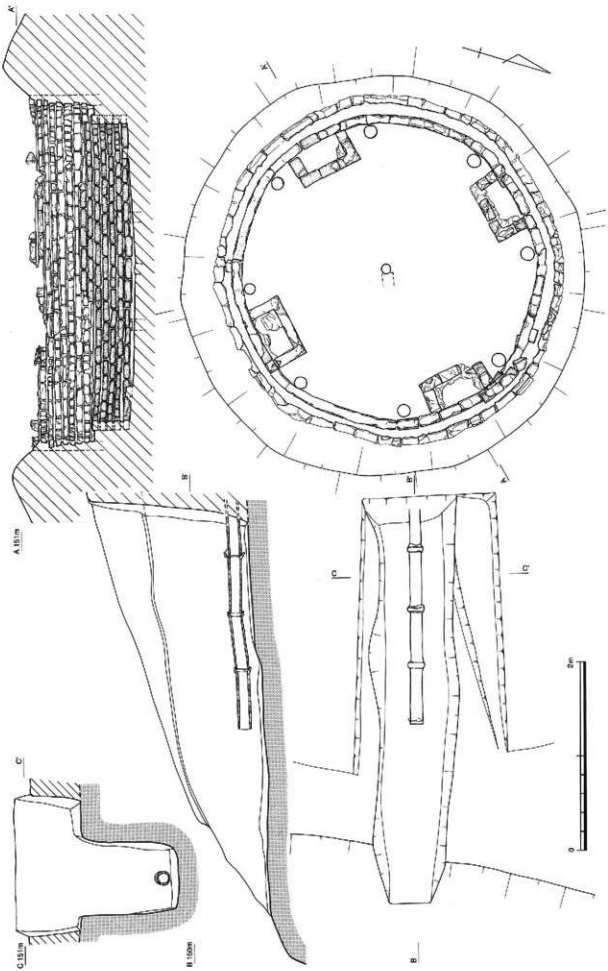
土管が埋設されている溝は、地山に掘られているものであり、幅80㎝、長さ4.5m以上のもので、深さは深いところで1.1mである。また、溝底は敷地側に向かって若干傾斜しており、その上に土管が主軸に沿って設置されている。

土管は調査した範囲では4本つながれているものであるが、これは溝の端まで設置されているものではなく、途中で終わっているものである。これがなぜ途中までしか土管が置かれていないのか良く分からない。

この埋設された土管の性格は2つの可能性が考えられるものである。ひとつは監視壕に流入した雨水等を外に排水する目的が考えられる。もうひとつの可能性は通信用等の配線を通すための用途である。以上のどちらの可能性が考えられるのかは判断できないものであり、また両者の機能を兼ね備えたものであるのかもしれない。今後の検討課題である。

3．構築状況（図46）

レンガ積みの半地下施設の構築は、周囲に施された盛土と関連しながら行われている。その確認のため、盛土をAライン（敷地跡と半地下施設の中軸を通るライン）と直行するBラインによって土層断面を確認した。ただし、完全に立ち割っていないことと土管埋設用の溝の中軸と軸がずれていることから、完全に構築状況を把握しているとは言い難い。それでは各構築工程に沿って記述していきたい。なお、盛土は各土層断面で旧表土が認められることから、当時の自然地形の大きな改変を行わない程度で盛土が施されているものと考えられる。



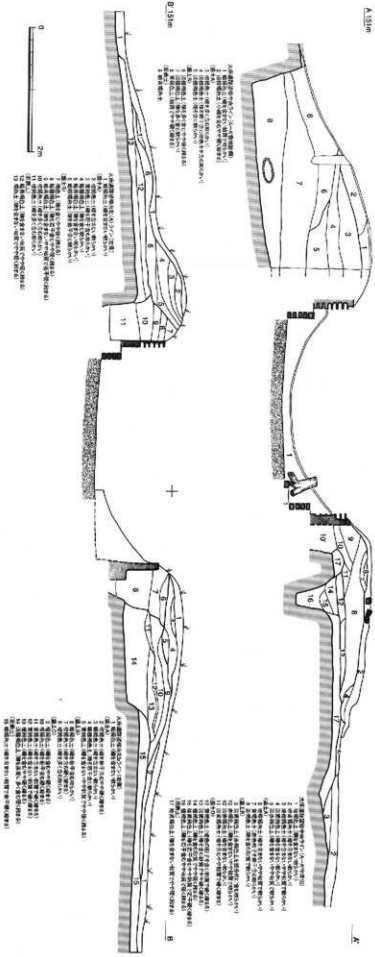
第45図　大床遺跡　防空監視哨実測図（1/40）

最初の工程は、若干理解に苦しむものであるが、Bライン南側で確認されるC層群の盛土を施すことから始まる。このC層群は10cm程地表面を掘り下げ平坦面を造り出してから盛土したものであり、この断面のみで確認された。この盛土の性格については不明である。

次の工程は、径4.8m程の円形の土坑と土管埋設用の溝を掘削する工程である。円形土坑は、この中にレンガ積の半地下壕を構築するためのものであり、Bラインでは最初に盛土したC層を穿っている。また、Aラインではその外側に深さ10cm程の落ち込みが認められ、これはこの工程の前後か同時に穿たれているが、範囲や性格については良く分からない。

その次の工程では、おそらくレンガを積み上げながら裏込め的にB層を充填し、レンガ積みを完成させているものと考えられる。また、このB層の段階ではすでにAラインの西側で検出した落ち込みは、埋められた状態である。

そして、最後に最終的な盛土（A層）を施して完成させているものと推測される。



第46図　大床遺跡　防空監視哨土層断面図（1/60）

第3節　敷地跡

レンガ積み半地下施設の北東に近接して「コ」字形に大きく掘削して造り出された平坦部が存在している。平坦部の標高は146.4mであり、上方の施設との比高差は3.5m程あり、非常に大規模な掘削である。また、平坦部は長径15.5m、幅11mの規模であり、幅30cm、深さ8cmの溝がレンガ積み施設側（北西辺）と南西側に「L」字形に巡る。

この平坦部には建物が1棟置かれており、この監視壕の管理と勤務者の休息に使用されていたようである。

1．敷地跡の堆積状況（図47）

敷地跡の土層は基本的に周囲からの自然に流入した土砂である。ただし、10層は地山と類似した層であり、また、上面で炭化物がまとまって検出されていること等からこの10層は整地土と考えられ、この層の上面が生活面であったと推測される。

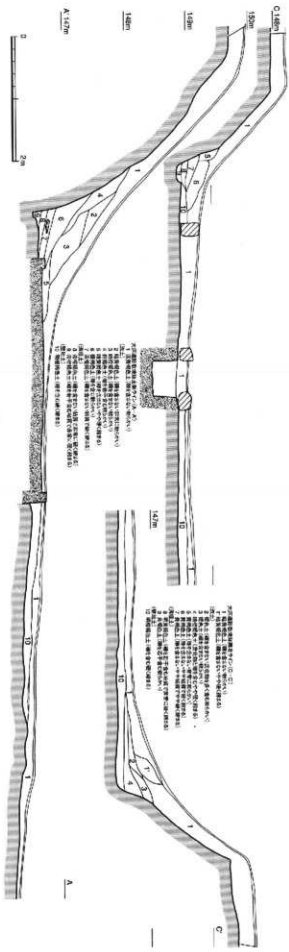
2．建物跡（図48）

建物跡は型枠に流し込んだコンクリートの基礎が残されていた。また、一部で遺存していなかったが、コンクリート床が張られていた。また、この床の下部構造として焼し瓦片が混ぜて使用されている。

建物跡の形状は長径7.5m、短径4m程の長方形のものの南東側に、細かく3つに間取りされたものが付いたものであった。また、全体で短径側は最大5.6mを測る。

建物の間取りは北西側（レンガ積み施設側）は3つに分けられており、北西隅の部屋には壁に沿って方形の区画が存在していた。これは幅2cm前後のコンクリートの壁が高さ10cm程残っているものであるが、良く分からないものであった。

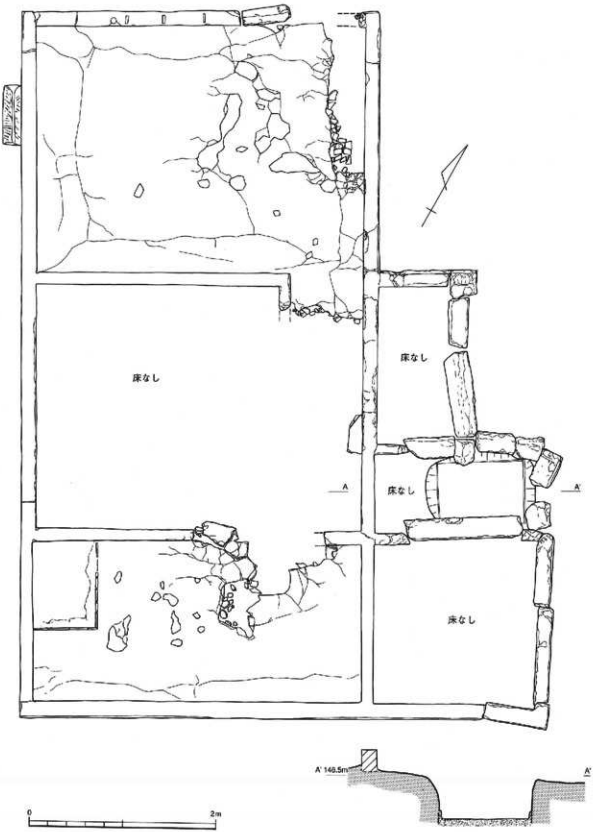
南東側の細かく間取りされた小規模の部屋は中央のものがトイレであり、ここだけ深く土坑状に穿たれており、土坑壁はセメントに



第47図　大床遺跡　敷地跡平坦面土層断面図（1/60）

よって作られていた。なお、その両隣の部屋は明確には特定できなかった。

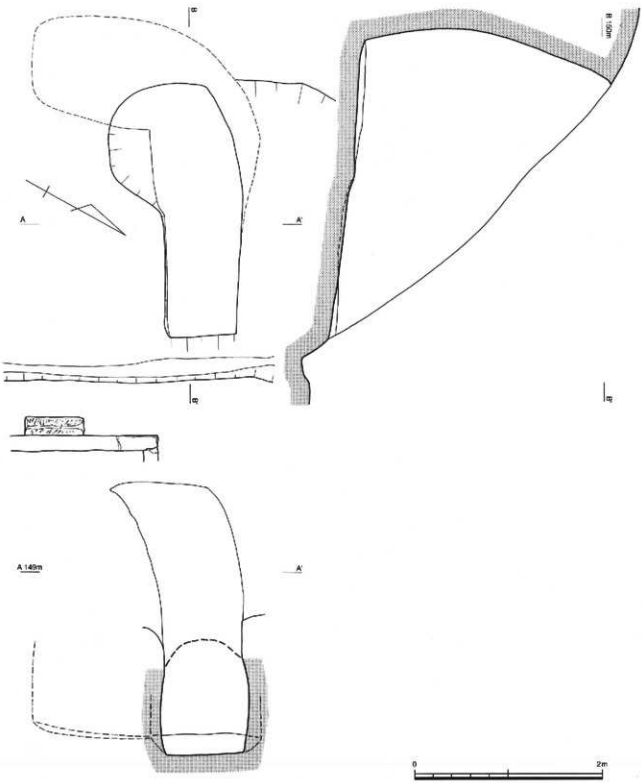
また、この建物の出入口は南東辺側にあるものと考えられるが、検討不足もあり不明である。



第48図　大床遺跡　建物跡実測図（1/40）

3．横穴（49図）

敷地跡の後背斜面（レンガ積み施設側）には横穴が穿たれている。これは倉庫または防空壕であった可能性が考えられるものである。入り口は幅80cmであり、奥に3m程入ったところで左に折れて1.15mで終わっているものである。高さは遺存している部分で1.2m程である。

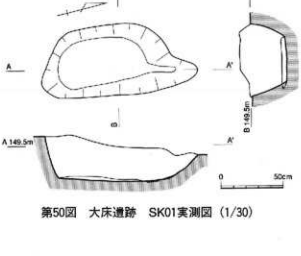


第49図　大床遺跡　敷地跡横穴実測図（1/40）

3．土坑（50図）

レンガ積み施設の存在する尾根頂部から4m程北の標高149.5m付近では、土坑を1基検出している。

土坑は覆土に炭を多く含むものであり、平面形は楕円形を呈するものである。その規模は長径1.25m、短径0.55mで、深さは30cmである。瓦が出土しているが時期や性格については不明である。防空監視哨と同時期のものである可能性が考えられる。



第50図　大床遺跡　SK01実測図（1/30）

第4節　出土遺物

遺物はレンガ積み施設周辺・敷地跡等から出土しているが、ほとんどのものは表面採取に近い状況で遺構の周辺斜面などで発見している。このことからほとんどのものは廃棄された後のものと考えられる。また、戦後この場所に来たことがある西郷町内の住民が比較的多く存在しており、後世の遺物が混在している可能性もある。出土した遺物の種類は陶磁器、ガラス製品、金属製品、瓦である。

1．陶磁器

陶磁器は総数で40点出土しており、かまどの縁の2点以外は磁器である。各種類ごとに図化したが小片は写真のみ掲載した。出土した器種は丼、碗、皿、蓋、土瓶、急須等があり、また戦中の典型的な遺物である「国民食器」や統制番号が付けられたものが含まれていた。

丼（51図1～5）　丼は口縁部が外に内湾しながら折れる形態で、蓋とセットになっているものである。また2種類出土している。

2、3、5は「国民食器」と呼ばれるものであり、2の底部には「岐960」と統制番号が付いたものである。この丼の口縁部には二重の圏線が巡るものであり、1の形状の蓋がセットとなり、蓋にも同じように圏線が巡る。また、圏線の色調は1と2が緑色で3が青緑色である。

5は朱色の文様が施されたもので、4の蓋とセットになるタイプである。

碗（51図6～13）　碗は比較的多く出土している器種である。碗は形状やサイズで大きく3種類（中形、小形、筒形）に細分した。6は中形としたもので、口縁部が内湾しながら外に若干開く形態のものである。他の椀よりやや大きめのサイズであり、飯碗であったのかもしれない。

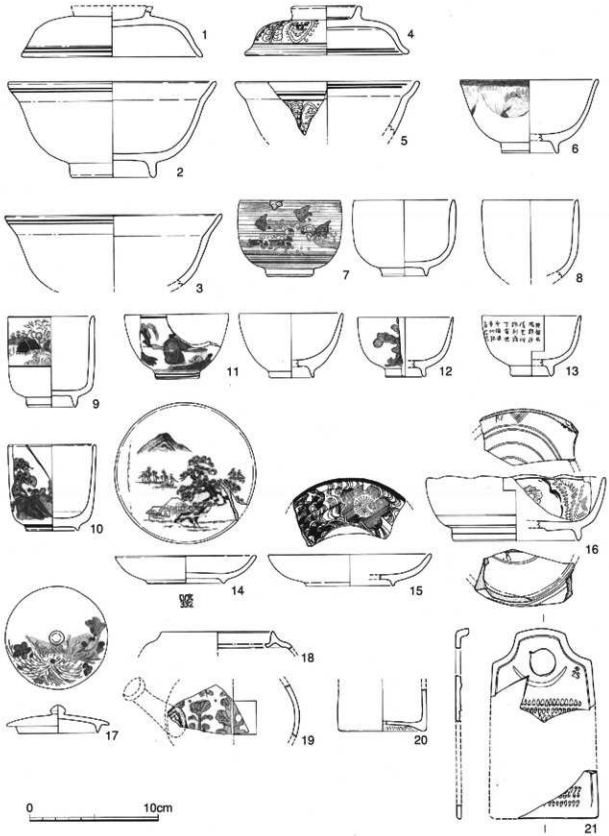
7、11～13の椀は小形としたものである。7は底部に「岐360」と統制番号が付けられているものである。11～13は7よりも小振りなものである。これらは湯飲みとして使用されたと考えられる。

8～10は筒形としたもので湯飲みである。9には「岐389」と統制番号が付いている。

皿（51図14、15）　皿は2種類出土している。14の黒色で松が描かれた皿が比較的多く出土しており、この底部には、「岐332」と統制番号が付いている。

鉢（51図16）　高台の付いた鉢が1点出土しており、口縁部に稜がついているものである。文様の色調が朱色で、4、5の丼の文様の色調と良く似たものである。

急須蓋（51図17）　つまみの付いた急須の蓋が１点出土している。草花文様が外面に施されたものである。セットになる可能性の急須は出土していない。



第51図　大床遺跡　出土陶磁器実測図（1/3）

土瓶・急須（51図18、19）　18は土瓶の口縁部と推測される個体である。19は急須と推測される胴部片であり、注口部分が剥がれた状態のものである。

瓶底（51図20）　20は磁器製の瓶の底と推測されるものであり、乳白色を呈している。

おろし板（51図21）　21は磁器製のおろし板であり、使用面の端部付近に銘が入っているが良く読みとれないものである。

瓦質かまど縁（52図1）　かまどの縁と考えられるものが2点出土している。そのうち1点にはセメントが付着しており、セメントによって箱形状に作られたかまどの縁部分に使用されたと想定される。また、この陶器には煤の付着が認められ、内面には「ヒ250」と番号が刻印されているが、何を示す番号かは不明である。これが統制番号であることも考えられるが、出土例[9]を見るとカタカナのものは無い。ただし可能性として「肥○○」の省略と考えることもできる。

表18　大床遺跡　出土陶磁器　集計表

器種	大別	細別	文様	挿図	個体数	器種個体数
丼		A（国民食器）	緑色圏線（岐960）	51－2	2	21
			青緑色圏線	51－3	1	
		B	朱色文様	51－5	1	
碗	中形		緑	51－6	1	
	小形	A	青（岐390）	51－7	1	
		B	人物	51－11	1	
		C	文字	51－13	2	
		D	松	51－12	1	
		E	不明		1	
	筒形	A	赤色　家屋（岐389）	51－9	2	
		B	青磁	51－10	1	
		C	暗青色	51－8	1	
		D	紫色		1	
	端部片				5	
皿	丸	A	黒色　松（岐332）	51－14	3	18
		B	緑色　花	51－15	1	
		C	青色		1	
鉢	稜		赤色	51－16	1	1
蓋	丼	A（国民食器）	緑色圏線	51－1	1	6
		B	朱色文様	51－4	3	
	急須	つまみ付き	草花	51－17	1	
	不明		青色		1	
土瓶	口縁		乳白色	51－18	1	1
急須	体部片		草花	51－19	1	1
下ろし板			銘有り	51－21	1	1
磁器片					1	1
陶器かまど縁			ヒ250	52－1	2	2
瓶底				52－20	1	1
合　計					40	

出土陶磁器の時期等について（表18）　出土陶磁器は小形の器種のみであり、大形品が存在しない点が特徴である。これらの時期は国民食器の丼と統制番号が付けられた器種は戦時下の遺物として間違えないものと考えられる。また、統制番号によって産地を確定することができた。

沼崎陽氏の検討[3]に依拠すると、「岐960」の国民食器は岐阜県駄知陶磁器工業組合加入者の製作、「岐390」と「岐389」の椀、「岐332」の皿は土岐津陶磁器工業組合加入者の製作であることが判明する。以上のように大床遺跡出土陶磁器の大部分は瀬戸美濃系のものである可能性が考えられる。さらに、沼崎氏の指摘にあるように都内遺跡の出土傾向でも岐工聯の番号がある陶磁器の割合が多く、大床遺跡も同様の傾向にある。

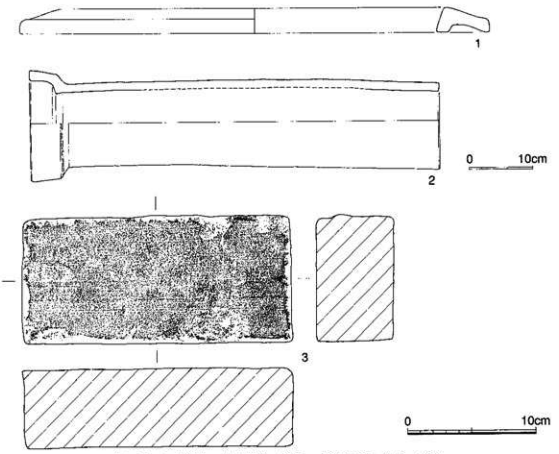
最後に出土した陶磁器の時期は戦時中の遺物として考えて良いものと思われる。なお、瓦質のかまどの縁については今後の検討課題としておきたい。

2．土管（52図2）

土管はレンガ積み施設に埋設されものである。検出したものの内1点のみを持ち帰り図化している。形態は細長いもので、受部内面や端部には条線等は認められない。胎土は赤褐色を呈し、内外面に褐色の釉が施されている。また、刻印等の製造所に関わるものは無かった。

3．レンガ（52図3）

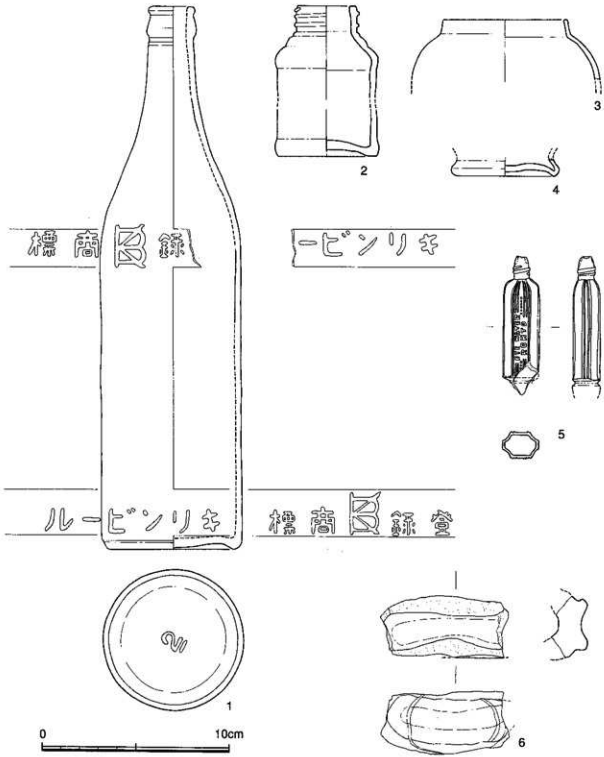
レンガは監視用の半地下壕の材料である。積み上げられているもののうち、5点をサンプルとして持ち帰り、1点を図化した。レンガはいわゆる「赤煉瓦」である。このレンガの表面には縮緬状の痕跡が認められることから、機械によって製作されたものと推測される[4]。また、刻印等の製作所に関わるものはいずれの個体にも認められなかった。



第52図　大床遺跡　出土陶器・煉瓦・土管実測図（1/6、1/3）

4．ガラス製品（第53図）

ガラス瓶は鏡片を合わせて９点出土しており、個体数は少ない。その内訳は表10のとおりであるが、すべて器形の異なるものであり同種のものは存在しない。なお、大形の瓶の２点（焼酎瓶、ソース瓶）は地表面に転がっていたものを採取したものであり、遺跡に伴うものか判断できなかったこともあり、写真のみ掲載している。



第53図　大床遺跡　出土ガラス製品実測図（1/2）

ビール瓶（53図1）　ビール瓶は1点出土している。口縁部は御崎谷遺跡出土のものと異なり、底部が上げ底にならないで端部外面が肥厚するものであり、王冠で栓をするタイプである。また、肩部付近と底部付近に「登録商標　キリンビール」と右から記されている。御崎谷遺跡出土のものより時期的に新しいものと推測される。

中形の瓶（53図2～4、6）　ビール瓶より小形のものをとりあえず中形の瓶として一括している。2は、口縁部に回し蓋で栓をするように螺旋状の凹凸がある瓶である。用途は不明である。

3は広口の瓶と推測されるものである。口縁部は直立し、その端部はざらついた感じのするものである。用途は良く分からないものである。

4は瓶の底部と考えられ、やや上げ底状になるものである。全体的に気泡が多い個体である。

6も瓶の底であり、楕円形に近い瓶と推測され、色調がいわゆる「ウイスキー瓶」に良く似ている。また、底部が外面には沈線状に窪む部分が認められる。

小形の瓶（53図5）　断面が八角形の瓶である。幅の広い側面の片面には、「EYE WATER」とあることから目薬の瓶と考えられる。口縁部は螺旋状の凹凸がある。

表19　大床遺跡　出土ガラス製品　集計表

器種名	部分	特徴	個体数
大形の瓶	ビール	なで肩　登録商標キリン	1
	焼酎	淡青色系　DARUMA	1
	ソース	淡青色系　SAUCE	1
中形の瓶	角瓶	褐色系（ウイスキー？）	1
	丸瓶	黄色系の透明	1
	広口	透明	1
	底部	淡赤色系	1
小形の瓶	薬瓶	青色系　ROHUTO	1
鏡片	板状		1
総数			9

5．金属製品（図54）

金属製品は表20のとおり総数で29点出土しており、全体的に少ないものである。基本的に建物に使用されたものと、道具が出土している。

碗（1）　1はホーロー製の椀である。これは鉄地に外面が茶色で内面が白色のものであり、底部外面には「☆」マークが付けられたものである。このマークは陸軍を表現したマークと推測され、食器として使用されたと推測される。また、このようなホーロー製の碗は東京都目黒区大橋遺跡[8]からも出土している。この大橋遺跡出土の碗と比較するとサイズが異なるものであるが、おそらく陸軍用に作られたホーロー製の碗と考えられるものである。

信管（2）　2は詳細な検討を行っていないのが、信管とその周囲の黒色物質は火薬と推測されるものである。その形状などから「手榴弾」に良く似ているものであるが、今後の詳細な検討が必要なものである。

方形袋状鉄製品（3）　3は1枚の薄い鉄板を折り曲げて「封筒」状にしているものである。口の部分は細かく折り曲げられてすぼまるようになっている。この製品の用途は検討不足もあり良く分からないものであるが、おそらく中に物を入れる袋としての役割が想像される。

鉄パイプ（4）　パイプは、薄い鉄板を円筒状に曲げて、端部を重ね合わせて接着させたものが出土している。平坦部の溝から出土していることから排水などで使用したものであろうか。

排水口の蓋（5、6）　鋳造の鉄製品で透かしが入ったものが2点出土している。用途は良く分からないが、排水口の蓋ととりあえあえず推測している。なお、5と6は同一の個体である可能性もあるが、出土地点は異なる。

5は半円形に復元される蓋である。方形の透かしの列が3重に弧を描くものである。6は方形の透かし列が2重に弧を描いている破片である。

枠状製品（7）　7は幅2.1cmの細長い鉄板が直角に折れ曲がっているものである。また、円釘穴と思われる穴が2つ認められる。

包丁（8、9）　包丁は2個体出土している。8は縁金具（銅製）が茎に装着されているものであり、茎は途中から両関状になっていることがX線写真から窺える。9の茎は、単純なものである。

鉄刀（10）　10は幅の狭い片刃の刃物であり、包丁とは形状が異なるので、鉄刀と推測している。これは切先側と茎部分が欠損しているが、細長いものと思われる。茎はX線写真から片関と推測されるものである。

鉄釘（11～13）　釘は6本出土しており、断面と頭部は円形のものである。長さから大・中・小の3つのサイズに分けられる。また、レンガ積み施設から出土していることから上部の屋根に関係したものと推測される。

11は長さが15.6cmと最も長い釘であり、木材の一部が付着したままのものである。

12は長さが12.7cmと中形の釘であり、13は長さが6.2cm前後の小形の釘である。

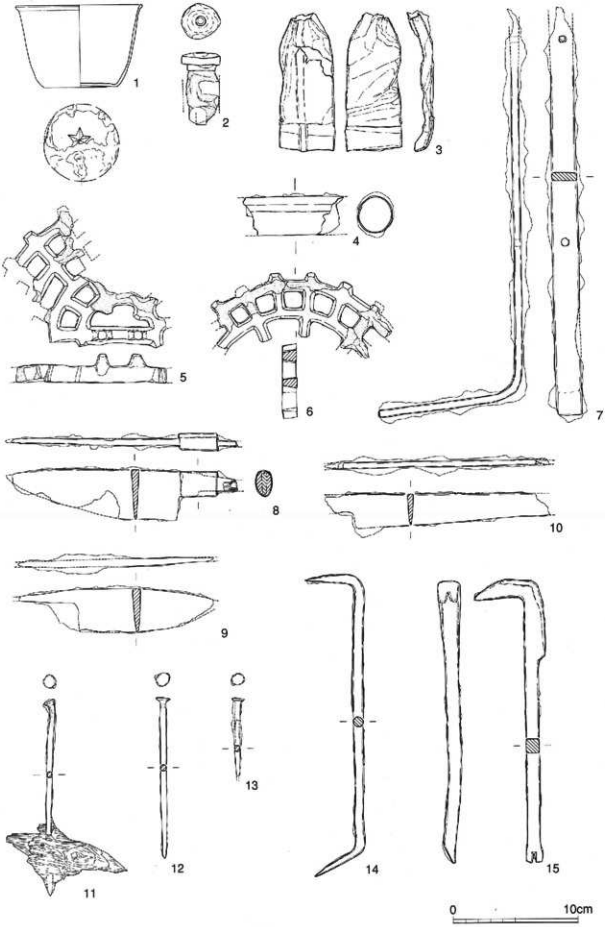
かすがい（14）　かすがいも釘と同様にレンガ積み施設から出土している。このことから上部構造に関連して使用されていたものと推測される。

14は断面が円形のもので、折り曲げられた両端部は、断面が方形に作られている。

釘抜き（15）　釘抜きは1点出土している。両端部が使用部位として作られたもので、片側は直角に曲がっているものである。断面は方形である。

表20　大床遺跡　出土金属器　集計表

種別		個体数
食器	カップ（ホーロー製）	1
兵器	信管＋火薬？	1
	小刀？	1
道具	釘抜	1
	包丁	2
	やっとこ	1
釘など	かすがい	4
	釘（大）	2
	釘（中）	3
	釘（小）	1
その他	蓋？（排水溝）	2
	パイプ	2
	枠状製品	1
線	支線	2
	銅線	1
不明	不明鉄器（コ字形）	1
	不明銅製品	1
	方形袋状製品	2
総数		29



第54図　大床遺跡　出土金属製品実測図（1/3）

6．瓦（図55）

瓦は全て敷地跡から出土している。その出土数は表12のとおりであり、釉薬瓦と燻し瓦の２種類が出土している。釉薬瓦は大熨斗の１種類だけ出土しており、個体数が少ない。このことから屋根に葺かれていたものであるかは疑わしいものである。

一方、燻し瓦は建物跡の床の下部構造として砕かれて使用されているものであり、桟瓦のみが出土している。

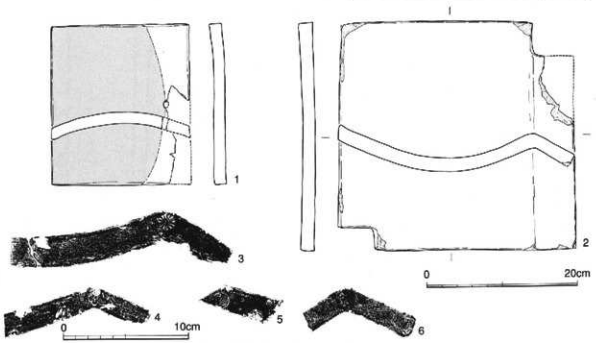
以上のように出土した瓦は建物の屋根に葺かれたものでは無く、別の用途で使用されているものが出土している。

大熨斗（１）　釉薬瓦であり、一方の側面側に釉薬を施さない裸胎部分があり、そこに孔を１つ穿っているものが出土している。この釉薬瓦の産地は石見地方である可能性が高いが、釉薬は黒色に近い色調のものであり、やや異なっている印象を受けるものである。

桟瓦（２～６）　桟瓦は桟が右側に付く一般的ではないタイプであり、おそらく出雲地方で焼かれたものである可能性が高いものである。形態は頭部の左側と尻部桟側を短形に隅切りしているものである。また頭部側の端面の「山」形になる位置には、すべてスタンプ（３～６）が押されていた。スタンプは４種類あり、これは、製作者個人を表すものと考えられる[※]。

表21　大床遺跡　出土瓦　集計表

種類	細　分		破片分類	破片数
釉薬棟瓦	棟巴			0
	ひも付き雁振			0
	大熨斗		施釉部	17
			裸胎部	9
	割熨斗			0
化粧瓦				0
軒瓦				0
袖瓦				0
燻し桟瓦	穴あき			0
	穴無し（残存率高い）			44
	小片		①	162
			②	109
			③	336
			④	101
			⑤	468
			マーク桜（55－４）	1
			マーク東（55－６）	2
			マークシダ（55－５）	7
			マーク菊（55－３）	20
	細片			519
合　計				1795



第55図　大床遺跡　出土瓦実測図（1/3、1/5）

第5節　小結

これまで述べてきた大床遺跡で検出した遺構は、大戦末期の防空監視哨跡であることが判明している。ここではその遺構と遺物について、成果と今後の課題点について簡単に整理しておく。

1、検出遺構について

遺構は、これまで記述したように聴音壕防空監視哨と呼ばれるタイプのレンガ積み半地下施設と、管理棟のある敷地跡を検出している。このレンガ積み施設は、円筒状で2重構造をとるものであり、同様な類例として県内では平田市小伊津町高山の佐香監視哨[3]でも認められ、また群馬県勢多郡東村の防空監視哨[4]でも確認できる。このことから全国的にある程度共通した規格が存在していたものと推測される。また、検出した施設の床面内の4方に作り出された区画については、今後の調査例等によって再検討が必要と思われる。また、上部構造については8本の木柱に支えられた「東屋」に似た藁葺きの屋根が存在していたものと推測される。

2、出土遺物について

遺物は陶磁器、ガラス製品、金属器、瓦が出土している。その中で陶磁器は国民食器や統制番号が付けられた陶磁器が出土している。特に統制番号が付けられた陶磁器は「岐○○」と付されたものだけであり、「岐阜縣陶磁器工業組合聯合會」中の土岐津陶磁器工業組合加入者の製作であることが判明している。このような陶磁器については、この時代の県下における調査例が無いこともあり、検討が不十分であった。今後は、東京都内の検討例[5]のように戦時下の消費地における陶磁器流通を解明することが必要と考えられ、木遺跡出土資料が活用されることが望まれる。

3、業務状況等について

次に発掘調査した防空監視哨についての聞き取り調査の結果について述べたい。本来は多数の人々が係わっていた施設であることを考えれば、非常に調査が不十分であり、今後の調査によって明らかにすべき課題は多いものである。

聞き取り調査は当時15歳前後で勤務していた崎田登喜夫氏（隠岐郡西郷町在住）に御協力いただいた。それによって得られた情報を整理すると以下になる。

（聴音壕）当時は、「監視哨」と呼称していた。また、その上部には「東屋」に良く似た屋根が付いていた。また梯子が置かれていた。（聴音壕に降りるものか？）

（管理棟）建物内には炊事場・座敷（畳敷き）・便所があり、屋根は瓦葺きであったような気がする。ここで休息をとった。電話も置かれていた。

（勤務関係）国民学校を出て1年程勤務し、3交代で行っていた。飛行機の確認時には電話によって本部（現在の西郷町西町付近に所在）へ連絡していた。本部で受ける担当者は若い女性であった。また、当初は他の場所に設置されていたものが、大床山へ移されている。井戸が西郷岬灯台の方へ降りた所にあった。

4、まとめ

最後に文献からの防空監視哨設置について述べたい。防空監視哨は1937年の「防空法」制定を契機に内務省管轄のもと、各都道府県警察が統行機関として各地に作られている。島根県では3か所（松江、浜田、西郷）の防空監視隊本部と、38か所の防空監視哨が設置されている[6]。今回検出した遺構は西郷防空監視隊本部に所属する防空監視哨と断定できる。ここでの敵機飛来情報は電話で防空監視隊本部に電話連絡され、そこから松江の県防空本部に伝達されたと考えられる。

表22　大床遺跡　出土陶磁器　観察表

挿図NO	区	遺構	器種	口径	底径	器高	最大径	文様	産地	備考
51-01	散地跡	右手前	蓋（飯碗A）	14.2	-	-	14.4	緑色圏線2条	瀬戸美濃	国民食器
51-02	表採		飯碗（A-1）	16.3	6.45	7.6	16.5	緑色圏線2条	瀬戸美濃	国民食器 岐960
51-03	表採		飯碗（A-2）	17.0	-	-	17.2	青色圏線2条	瀬戸美濃	国民食器
51-04	盛土部	北側	蓋（飯碗B）	12.6	つまみ径 5.0	3.9	13.0	茶色圏線 茶色で文字「寿」・植物	瀬戸美濃	
51-05	散地跡	4トレ	飯碗（B）	14.4	-	-	14.6	茶色圏線 茶色で文字「寿」・植物	瀬戸美濃	
51-06	表採		碗（中型）	11.0	4.4	5.8	-	青色、白色で青海波	瀬戸美濃	
51-07	表採		碗（小型A）	7.9	3.45	6.05	8.2	青色で波・鳥	瀬戸美濃	岐390
51-08	散地跡	7トレ	碗（筒形B）	7.5	-	-	-		瀬戸美濃	
51-09	盛土部	8トレ	碗（筒形A）	6.8	3.7	7.2	-	茶色圏線 茶色で家・松・草花	瀬戸美濃	岐389
51-10	表採		碗（筒形C）	6.7	4.0	6.8	7.0	青色圏線3条 青色で家・木	瀬戸美濃	
51-11	表採		碗（小型B）	8.1	3.5	5.1	8.25	青色圏線 青色で柳・人物・草花	瀬戸美濃	
51-12	散地跡	7トレ	碗（小型D）	7.5	3.0	4.75	-	青色で松・草	瀬戸美濃	
51-13	表採		碗（小型C）	7.8	3.1	4.8	-	青色で文字列	瀬戸美濃	
51-14	表採		皿（A）	11.0	6.0	2.2	11.2	黒色で家・松・山・草	瀬戸美濃	岐332
51-15	散地跡	不明	皿（B）	12.85	7.0	2.5	-	茶色唐線 緑色で青海波	瀬戸美濃	
51-16	表採		皿（筒）	14.0	9.9	3.1		青色圏線 赤色で草花	瀬戸美濃	ゴム版
51-17	表採		つまみ付皿（急須）	6.25	つまみ径 1.15	2.2	-	青色で草花	瀬戸美濃	
51-18	散地跡	左側	上瓶（急須）	8.8	-	-	-		瀬戸美濃	
51-19	散地跡	左側	急須？	-	-	-	10.65	青色で草花	瀬戸美濃	
51-20	表採		瓶底？	-	6.5	-	-		不明	
51-21	散地跡	4トレ	おろし金	-	-	-	-		瀬戸美濃	鉢？
52-01	散地跡	左側	カマド縁	-	-	2.0	37.4		不明	「七250」印
52-02	散地跡	6トレ	土管	長さ 65.1	内側の径 10.9	-	17.6		不明	
52-03	不明		レンガ	長さ 21.5	幅 10.2	厚さ 6.2	-		不明	

表23　大床遺跡　出土ガラス製品　観察表

挿図NO	区	遺構	器種	口径	底径	器高	最大径	色調など
53−01	敷地跡	左側	ビール瓶	2.4	6.8	28.8	7.5	登録商標 キリンビール
53−02	不明	〃	中瓶	3.0	5.2	7.4〜 8.0	5.6	薄黄色
53−03	不明	−	中瓶？	6.6	−	(3.2) 以上	(10.0) 以上	半透明
53−04	敷地跡	右壁	中瓶 (底)	−	3.2	(0.9) 以上	(5.8) 以上	薄ピンク
53−05	敷地跡	左側	小瓶 (目薬)	0.4	−	7.3 以上	1.9	青EYE WATER ROHTO
53−06	不明	〃	瓶 (角)	−	2.4× 6.1以上	2.8 以上	−	ウイスキー瓶？

表24　大床遺跡　出土金属製品　観察表

挿図NO	区	遺構	種別	長さ	幅	厚さ	備考
54−01	敷地跡	左壁	碗	10.2	6.5	6.0	ホーロー ☆マーク
54−02	敷地跡	不明	信管	5.7	3.1	−	火薬付着
54−03	敷地跡	6トレ	方形袋状製品	11.1	4.5	0.7	鉄製 袋状になる
54−04	敷地跡	左壁溝内	パイプ	8.1以上	3.0	0.1	鉄製
54−05	表採		蓋（排水口）	11.8以上	10.5	1.3	鉄製
54−06	敷地跡	左側	蓋（排水口）	14.0以上	5.2 以上	1.2	鉄製
54−07	敷地跡	5トレ	棒状製品	32.3以上	2.1	0.6	鉄製　孔2
54−08	敷地跡	左側	包丁	17.9以上 刀身長13.2	3.9	0.6	縁金具付
54−09	敷地跡	右壁	包丁	15.5以上 刀身長10.7以上	3.5	0.6	
54−10	敷地跡	左奥	小刀？	17.9 刀身長15.6	2.5	0.5	直刀？
54−11	盛土部	8トレ サブトレ	釘（大）	15.6	〃	0.5	木質付着
54−12	盛土部	内壁	釘（中）	12.7	−	0.45	真直ぐ
54−13	盛土部	8トレ	釘（小）	6.2以上	−	0.45	先端欠
54−14	盛土部	内壁	かすがい	21.8	3.9	0.9	
54−15	敷地跡	不明	釘抜き	22.5	5.7	1.1	

表25　大床遺跡　出土瓦　観察表

挿図NO	区	遺構	種別	a	b	c	d	e	f	g	h	I	j	備考
55−01	敷地跡	左側	熨斗瓦 (大のし)	18.4	21.3	1.8	3.6	1.0	−	−	〃	−	−	釉薬瓦
55−02	敷地跡	奥壁	桟瓦	31.4	30.3	1.8	−	−	−	−	−	−	−	燻し瓦

第6章　ま　と　め

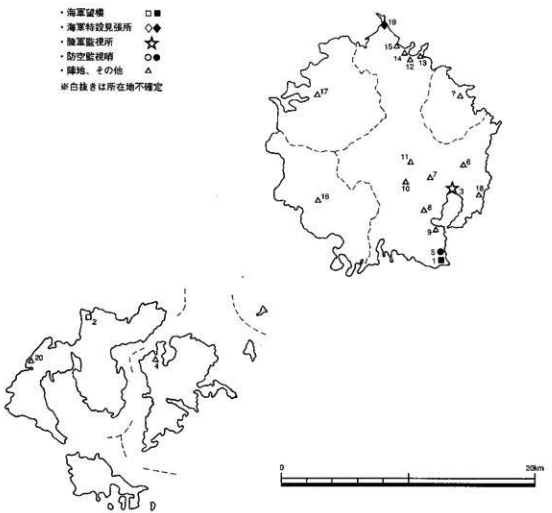
今回の御崎谷遺跡と大床遺跡の2遺跡の発掘調査では、日露戦争とその後の第2次大戦に係わる戦争遺跡を明らかにすることができた。このような戦争遺跡について、隠岐をはじめとして島根県下における状況について、この章では概観して本書の締めくくりとしたい。

第1節　隠岐の近代の戦争遺跡

隠岐は周辺を日本海に囲まれていることから、古代より国際関係が緊張した情勢になった期間は、海防のための施設や人員が置かれた場所である。古代には新羅との緊張関係の中で、特に9世紀頃には頻繁に中央から警護を固めるよう命ぜられており、また869年には弩史を置いている。また、幕末の外国船警備の為に松江藩によって見張所や台場が設置されている※。

近代では日露戦争や大戦に係わる緊張関係の中で軍事施設が置かれていた。これらの軍事関係の遺跡（いわゆる戦争遺跡）については、知り得る限りのものを表26に集成し、分布図（図56）を掲載している。

日露戦争前後の軍事施設　日露戦争前後に関連した軍事施設では海軍望楼が設置されている。また、日露戦争勃発後の1904（明治37）年には海底電線揚陸地点（西郷町東郷塩浜、海士町太井・菱



第56図　隠岐の戦争遺跡

浦）の警備のため陸軍が監視兵を西郷町と海士町菱浦に派遣している[9]。

海軍望楼は西郷町岬町（御崎谷遺跡）と西ノ島町の高崎山の2か所に設置されている。西郷海軍望楼は1898（明治31）年に設置された常設の海軍望楼であり、高崎山海軍望楼は日露戦争開始後の1904（明治37）年6月に設置されたものである[9]。おそらく高崎山に設置した背景には、西郷海軍望楼ではカバーできない隠岐の北側の海上を監視強化する目的が推測される。また、日露戦争後にはこれらの海軍望楼は廃止されているが、高崎山海軍望楼については、廃止された年月日やその設置された現地について今後の調査が必要である。

1904（明治37）年2月に海底電線揚陸地点の警備のために陸軍が派遣した監視兵は、西郷と菱浦の2か所存在するが、これは日露戦争勃発に対応して陸軍が沿岸監視を兼ね有線通信網の防御をねらったものと推測される。これらの監視兵派遣に伴う施設等については明らかにできていないが、おそらく官舎等の施設が設置されている可能性が推測される。

大戦に係わる軍事施設　大戦に係わる施設は、島後については西郷町誌によって明らかにされているが、島前については調査不足もあり今後の調査が必要である。また、警察署に管轄された防空監視哨は西郷（大床遺跡）に1か所設置されているが、島前など他の場所にも設置されている可能性は考えられ、今後の資料調査によって明らかになるものと思われる

大戦中の防御陣地は13か所の所在が西郷町誌によって明らかになっているが、これらの現地の状況等についての詳細な調査が今後必要なものである。その他に陸軍と海軍の監視部隊と考えられる部隊が西郷町に置かれていた。

海軍のものは「島後特設見張所[9]」と呼称されていたもので西郷町西村に存在していた。これは、「電波探信機」と呼ばれたいわゆるレーダーを装備したものであり、その敷地面積は1万㎡以上と大規模なものであった。

表26　隠岐島の近代の戦争遺跡

番号	戦争遺跡	内　容	所在地	備　考
1	西郷海軍望楼	明治海軍の監視所	西郷町岬町	（御崎谷遺跡）
2	高崎山海軍望楼	明治海軍の監視所	西ノ島町	
3	（西郷）	海底電線揚陸点監視	西郷町	明治37年に監視兵派遣
4	（菱浦）	海底電線揚陸点監視	西郷町海士町	明治37年に監視兵派遣
5	西郷防空監視哨	大戦中防空監視施設	西郷町岬町	（大床遺跡）
6	岩下陣地	大戦中の陣地	西郷町	特設警備隊201大隊（西部第7159部隊）
7	栗鼠太松陣地	大戦中の陣地	西郷町	〃
8	狸山陣地	大戦中の陣地	西郷町	〃
9	飯ノ山陣地	大戦中の陣地	西郷町	〃
10	高野陣地	大戦中の陣地	西郷町	〃
11	仏谷陣地	大戦中の陣地	西郷町	〃
12	正面陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	〃
13	左水の滝下陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	〃
14	天神山陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	〃
15	西村分営陣地	大戦中の陣地	西郷町西村	〃
16	千光寺山陣地	大戦中の陣地	都万村	〃
17	北方陣地	大戦中の陣地	五箇村	〃
18	陸軍監視所（分遣隊）	大戦中の監視所？	西郷町犬来	西郷町東郷か？中部軍通信部隊隠岐支隊
19	島後特設見張所	大戦中のレーダー基地	西郷町西村	海軍監視部隊
20	（国賀海岸）	不明	西ノ島町国賀	コンクリートによる構造物

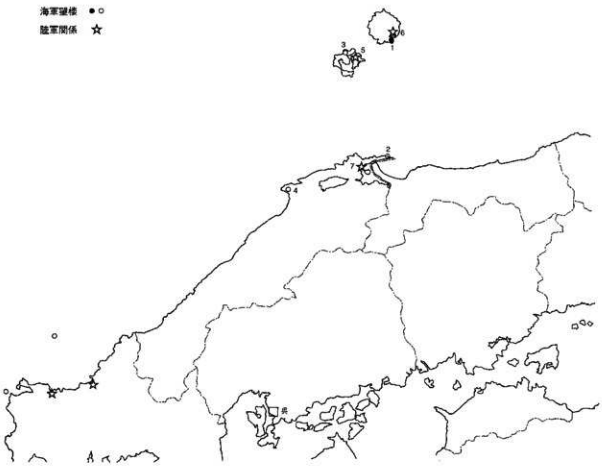
さらに、これは対空レーダー3基を装備し対空監視を行っていたものであるとともに、対水上艦艇専用見張所として計画設置されており、水雷兵器を装備していたが、対水上用レーダーは装備されていなかったものと考えられる。

陸軍の監視所[8]は西郷町東郷に所在していたと推測されるが、これについては西郷町誌の記述が無いものである。可能性として西郷町誌にある西郷町中町に本部を置き、西郷町大来に分遣隊を置いた通信部隊が該当するのかもしれない。この監視所については今後の調査で整理しておく必要がある。また、西ノ島町の国賀海岸にコンクリートによる構造物が存在しており、監視所と伝えられているが実態は明らかにできなかった。

このように隠蔽には近代の戦争に係わる施設が多く存在している。これは日本海に開まれた地理的環境が大きな要因と考えられ、また、大戦中には多くの防御陣地が築かれたように、最前線に立たされる状況も想定される環境に置かれていた。

第2節　日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸監視関連）

この節では、島根県下の日露戦争前後の戦争遺跡について述べたいが、特に日本海沿岸部の監視に係わるものを紹介したい。この時期の沿岸監視に係わるものは海軍望楼と陸軍の海岸監視哨があるが、県下では海軍望楼[9]が4基設置されている。



第57図　日露戦争前後の戦争遺跡位置図

また、1904（明治37）年２月に海底電線揚陸地点監視のため監視兵が派遣された場所が３か所あり、これに伴う施設の存在が想定される。

海軍望楼　海軍望楼は海軍省が主に沿岸監視の目的で設置したものであり、全国に120か所程が設置されている[8]。日露戦争中は79か所が機能しており、そのうち県下には４か所に設置されていた。今回発掘調査した西郷海軍望楼、そして美保関海軍望楼は日清戦争後に設置された常設の海軍望楼である。この時期の段階では他地域の日本海沿岸部にも多く設置されており、ロシアとの国際情勢が緊迫する中で日本海沿岸監視強化の目的をもって設置された望楼として位置付けられているものである。また、両望楼とも1903（明治36）年に無線電信機が装備された望楼20か所[9]に含まれるものである。

残り２つの高崎山海軍望楼と杵築海軍望楼は、日露戦争勃発後の1904（明治37）年に設置された仮設の海軍望楼である。常設と仮設の相違については資料調査の不足で不明であるが、この２つの望楼が設置されたことによって、島根半島の東端と西端、隠岐島の南北を監視できる体制を整備強化したものと推測される。なお、この２つの仮設望楼は日露戦争終了後まもなく廃止されている。

陸軍監視兵派遣箇所　1904（明治37）年の日露戦争勃発直後に隠岐島海底電線揚陸地点の監視警戒の任務を担った監視兵が３か所に派遣されている。当時の海底電線揚陸地点を見ると松江－西郷線が美保関町千酌から海士町大井を経て海士町菱浦と西郷町東郷塩浜に分岐している[9]。このことから派遣された監視兵は美保関町千酌、海士町大井・菱浦、西郷町東郷塩浜の各地点を監視警戒していたものと推測される。これらの派遣された監視兵に係わる監視所、官舎等の施設が存在していたと思われるが、資料調査によって裏付けて整理していく必要がある。

まとめ　以上、日露戦争前後の軍事施設について述べてきたが、日本海に面した環境から県下に多くの施設が存在しており、特に隠岐島は海上の警戒監視の上で重視されていたことが分かる。

なお、これらの中で西郷海軍望楼以外のものについては詳細な所在地が不明であり[9]、文献資料調査が不十分である。今後の現地での確認と防衛庁防衛研究所に保管されている資料の検索によって明らかにすべき点は多い。それによって海軍望楼の構造についての検討、常設と仮設の比較、陸軍の沿岸監視哨との比較、勤務状況などについての検討が今後可能になってくるものと考えられる。

表27　日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸部監視関係）（註13文献より）

海軍望楼				
番号	名称	所在地	時代	内容
1	西郷海軍望楼	隠岐郡西郷町神町	明治31．2．3設置	常設の海軍望楼
2	美保関海軍望楼	八束郡美保関町	明治34.12.14設置	常設の海軍望楼
3	高崎山海軍望楼	隠岐郡西ノ島町	明治37年6.21設置	
4	杵築海軍望楼	簸川郡大社町	明治37年8．9設置	
陸軍監視兵派遣か所				
5	（菱浦）	隠岐郡海士町	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視
6	（西郷）	隠岐郡西郷町東郷	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視
7	（千酌・本庄）	松江市本庄町	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視

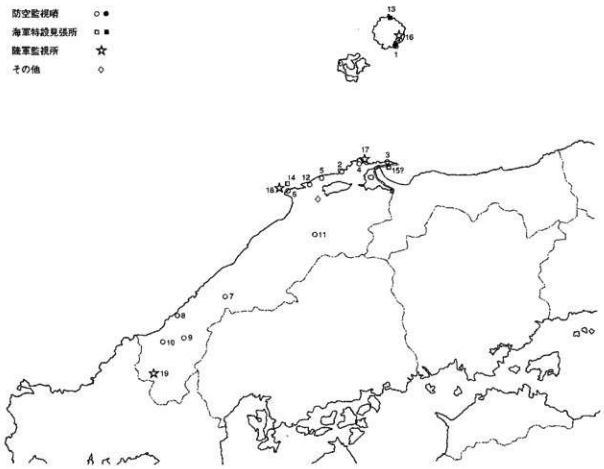
第３節　第二次大戦中の戦争遺跡（監視施設）

この節では、大戦中の島根県下における監視施設を中心に述べてみたい。監視施設は防空監視哨、海軍特設見張所、陸軍監視所の３つが設置されている。

防空監視哨[※]　防空監視哨は1937（昭和12）年成立の防空法を契機にして、島根県警察署が執行機関として各地に設置したもので、県下に38か所存在する。これらは基本的に沿岸部や山頂部に設置され防空監視をおこなったもので、敵機の飛行状況についての情報を電話によって各防空監視隊本部（松江・浜田・隠岐西郷）へ連絡していたようである。なお、防空法からも分かるようにこれらの監視哨は基本的に一般市民が行う防空対策を担う目的で設置されており、軍が行う防空とは異なるものであった。

監視哨の従事者は20歳以下の若者が主力であったようである。その本体構造は「聴音壕」と呼ばれる二重壁の円筒状構造物であり、その中で口と耳によって敵機を監視警戒していたものである。また現在所在地が分かる例から推測すると、聴音壕の他に管理棟が付属するのが一般的である。なお、全国の一部では「電波警戒機[※]」が配備された防空監視哨が存在していたようであるが、県下の配備状況については現段階では不明である。

海軍特設見張所[※]　海軍の監視施設は「電波探信機」と呼ばれるいわゆるレーダーを配備し、通信機器を備えていたものであった。これは県下に３か所設置されており、対空レーダーを装備している見張所である。このうち島後と日ノ御碕は基本的に装備された機器や数量は同じであるが、島後



第58図　第２次大戦中の戦争遺跡位置図

は水雷兵器を装備しており、対水上艦艇監視も目的としていたものである。また、敷地面積について見ると、島後のものは非常に大がかりなものであったことが分かる。

一方美保関の見張所は航空基地に伴う対空レーダー装備の監視施設である。

陸軍監視所　陸軍監視所は現段階の調査では不明な点が多いものであるが、断片的な資料から防空監視をおこなっていた施設と推測される。その内容、設備等については不明な点が多く、今後の調査が必要である。県下には隠岐郡西郷町、島根町野波、大社町日御碕、津和野町の4か所に設置されていた[8]。

まとめ　以上述べてきたように、大戦中には海軍、陸軍と民防空組織の3者による監視体制が採られていたことが分かり、多数の施設が存在していたことが窺える。また、大社町日御碕は陸・海・民の、美保関町には海・民の、島根町野波には陸・民の監視施設が、それぞれ近接して存在していたことになり、防空監視などの要地として認識されていたことが分かる。これら3者の監視施設の関連については今後検討が必要であるが、防空通信の連絡協調は無くそれぞれが独自に監視していたようである[9]。

表28　第2次大戦中の戦争遺跡（監視施設）

防空監視哨（註40文献、西尾良一氏資料より）

番号	名称	所在地	形態	内容	備考
1	（西郷）監視哨	隠岐郡西郷町	聴音壕（レンガ）	建物跡、横穴	大床遺跡
2	恵曇監視哨	八束郡鹿島町恵曇			
3	美保関監視哨	八束郡美保関町			
4	野波監視哨	八束郡島根町多古鼻	聴音壕？		
5	佐香監視哨	平田市小伊津町高山	聴音壕（コンクリート）	管理棟跡、壕	西尾良一氏資料
6	日御碕監視哨	八束郡大社町日御碕			
7	石見今市監視哨	那賀郡旭町今市			
8	三保監視哨	那賀郡三隅町三保			
9	津茂監視哨	美濃郡美都町津茂			
10	小野監視哨	益田市白岩町小野			
11	掛合監視哨	掛合郡掛合町天神平	建物1.		
12	（十六島）監視哨	平田市（通称丸山）	聴音壕（コンクリート）		西尾良一氏資料
合計38か所（不明26か所）					

海軍特設見張所（註33文献より）

13	島後特設見張所	隠岐郡西郷町中村	用地　13,967㎡ 居住施設　300㎡	対空レーダー3基、逓信機2、全波受信機1、自力発電機2、水雷兵器132	水上艦艇専用見張所を兼ねる
14	H ノ御碕特設見張所	簸川郡大社町日御碕	用地　3,934㎡ 居住施設　89㎡	対空レーダー3基、逓信機2、全波受信機1、自力発電機1	
15	美保特設見張所	（八束郡美保関町）	不明	対空レーダー2（航空基地）	
合計3か所					

陸軍監視所（註43文献より）

16	（東郷）	隠岐郡西郷町東郷	不明	不明	
17	（野波）	八束郡島根町野波	不明	不明	
18	（日御碕）	簸川郡大社町日御碕	不明	不明	
19	（津和野）	鹿足郡津和野町	不明	不明	
合計4か所					

第4節　小結

この章ですでに述べてきたように、県下には各戦争に係わる監視関連施設が多数設置されている。また、これらの監視施設以外にも多くの施設が存在していることは言うまでもない。本節ではこれまで述べてきた調査した御崎谷遺跡・大床遺跡や県下の戦争遺跡についての今後の調査における課題点等について整理して終わりたいと思う。

戦争遺跡の調査　島根県下において、いわゆる「戦争遺跡」と近年呼称されているものについての調査はいくつかの例[5]が見られるが、本格的な考古学的調査は今回の御崎谷遺跡と大床遺跡が初例となるものと考えられる。この調査によって考古学的な調査からあらゆる情報を提供可能なものであることが判明した。もちろん今回の調査でも分かるように、文献資料と聞き取り調査によって初めて施設の性格等について明らかにすることができるものである。このように戦争遺跡の調査には、考古学的な調査、文献資料調査、聞き取り調査といった3つの異なる調査方法が必要不可欠なものであり、これらの調査成果によって初めて史料として活用が可能なものになることは、すでに述べられている通りである[6]。そこで調査における方法論ごとに以下に若干の検討をしてみたい。

考古学的調査　この章で挙げた施設については、ほとんどのものが現地については確認していないものであり、今後その所在についての確認作業（いわゆる分布調査）が第一に必要と考えられる。そして、その構造等について把握できるものについては記録する必要がある。また、発掘調査を行った場合には、遺構、遺物については比較が可能なものに資料化する必要があるものである。この資料化することによって他の調査例との構造の比較、出土遺物の検討が可能になるものと思われる。例えば、東京都大橋遺跡の調査[7]のように使用者の階級と食器との関係や統制番号の付いた陶磁器から戦時下の流通について検討ができるようになるものと思われる。また、様々な出土遺物から兵舎等での生活の一端が窺えることも可能と思われる。

文献資料等の調査　文献資料の調査は、特に防衛庁防衛研究所に所蔵されている公文書等の資料調査が重要になるものである。これによって今回の御崎谷遺跡のように単事施設の所在地の特定が可能になる場合がある。また、資料によってはその性格、設置年月日、構造、敷地面積等についての把握が可能になるものと思われ、特に大戦中の施設については終戦時の米軍への兵器類の引き渡しに係る目録から多くの資料を得ることが可能である。

また、今回大床遺跡で検出した民防空に係わる防空監視哨については都道府県の警察に資料が残存している可能性があり、これによって防空体制の実態が明らかになるものと思われる。なお、大床遺跡では今回この調査が不十分であり、今後の検討が必要なものである。

文献資料の他にも当時の写真が残存していれば非常に重要な情報であり、遺構のように下部構造しか分からないものに対して上部構造の解明が可能になるものである。大床遺跡でも他の監視哨の写真から上部構造を推測することができた。さらに当時の勤務者の服装、階級等について推測が可能になる場合も考えられる。

聞き取り調査　今回の調査において、大床遺跡では当時の勤務者からの聞き取り調査によって検出遺構の性格、勤務状況等について明らかにできた。このように大戦中の施設については、付近に当時の施設について情報提供が可能な人々が存在しており、聞き取り調査は非常に重要な情報を得ることが可能な方法である。さらに実際に出土遺物を手にとってもらうといった調査も必要であり、重要な情報が得られたと思われるが、今回は出来なかった。この点に関しては今後の調査が必要で

あることを痛感している。また、聞き取り調査において証言者によっては推測等が混在している場合が考えられることはすでに指摘されており※、慎重に調査を行う必要もある。

聞き取り調査は、複数の証言を慎重に重ねることによって多くの事実が浮かび上がる重要な方法である。しかし、当時を知る者の高齢化が進むといった大きな問題も抱えており、この調査方法が可能な期限は迫っており、緊急性の伴うものである。

以上脈絡も無く述べてきたように、それぞれの調査方法によって近代の戦争遺跡の実態を明らかにしていく必要がある。そして、各遺跡が資料化され比較検討されることで、「戦争の世紀」と呼ばれる20世紀を検討する材料になるものと思われる。

今回の御崎谷遺跡・大床遺跡の調査は、不十分な点があり課題点も多いものであるが、「戦争遺跡」への関心を呼ぶ契機となり、今後の近現代史の史料として活用され、新たな21世紀において平和を考える上での資料として貢献出来れば幸いである。

(註)

① 法政大学多摩校地遺跡調査団編『法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ―A 地区―』1986年
同上『法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ―C・R 地区―』1988年
伊藤玄三「現代史を掘る--多摩送信所（法政大学構内）の発掘より―」『考古学ジャーナル』278、1987年
伊藤玄三「東京・多摩送信所跡の調査」『季刊考古学―近・現代の考古学―』72号、2000年

② 2000年度調査の御崎谷Ⅱ遺跡（海軍望楼官舎跡）では、ほぼ同一の建物跡が検出されており、この礎石7に対応する礎石が存在している。調査担当者の伊藤徳広氏（財福文センター）の教示による。

③ 東森晋氏（財福文センター）の教示による。これによれば、四斗入りの大甕の中に、五升瓶が2本、二升瓶が3？本、切片口鉢が3つ入れられて出荷されていたものと考えられる。

④ 陶磁器の産地については、家田純一氏（佐賀県立九州陶磁歴史化館）に多くの御教示をいただいた。基本的に産箱系としたものは、検討していただいた結果である。瀬戸美濃系としたものは、壁面系以外のものを一括している。詳細な検討や指摘を受けたものでないので、今後の検討が必要な点である。

⑤ 逓信省編『逓信事業史』第3巻　1940年　逓信協会

⑤ D.アボット編、渡辺正雄監訳『物理学者辞典4―物理学者―』1986年　厚書房
大井才太郎『電信及び電話』電友社　1894年
マグロ・ヒル科学技術用語大辞典編集委員会　1985年『マグロ・ヒル科学技術用語大辞典　第2版』山刊工業新聞社

⑦ 西郷町在住の池田金次氏によると昭和20年代に勤務していた電電公社では、電力が十分で無いために通信機の電力としてダニエル電池が使用されていたそうである。そこでは、10個つないだものが1組で、電池室には2～3組置かれていたとのことである。また、銅がすぐに錆びつくために網業に手入れが必要であったという。

⑧ 前掲書『逓信事業史』第3巻より

⑨ 明治24年度に国内で製した電池材料は、「丹礬約1万貫、亜鉛板1万個、銅板8千個、亜鉛銅板6万5千個、楕円瓶4万3千個、長半瓶2万6千個」であり、楕円瓶（素焼き容器と想定）が圧倒的に多い。なお、丹礬は硫酸銅である。
前掲『通信事業史』より

⑩ 瓦の名称等については以下の文献を参照した。また、熱田貴保氏（県埋文センター）の教示による。
鳥取県教育委員会　1992年『石見空港建設予定地内遺跡　堀蔵文化財調査報告書Ⅰ
内藤正中編『図説日本の歴史32―島根県の歴史―』河出書房新社

⑪ 明治の海軍省の公文書には、望楼設置に係る土地の献納についての文書が存在し、その付図の場所が御崎谷遺跡と一致している。「現地領収済御届」明治33年12月27日　『明治30年　公文雛考土木1:24』防衛庁防衛研究所保管

⑫ 電波管理委員会　1951年『日本無線史』第10巻―海軍無線史―

⑬ 原剛「研究資料99R01－1　国土防衛史その3―日清戦争後から日露戦争まで―」1999年　防衛庁防衛研究所戦史部
海軍望楼については、この文献を参照し、また原剛氏（防衛庁防衛研究所）本人に多くの御教示をいただいた。

⑭ 前掲書『日本無線史』第10巻、屋嶋・安岡明男編『日本陸海軍辞典』1997年新人物往来社を参照した。

⑮ 前掲書『日本陸海軍辞典』

⑯ 前掲書『日本無線史』第10巻　これによると隠岐と松江に装備されていることになる。松江とあるものは美保関に設置された海軍望楼を指すものと推測される。

⑰ 「火花式送信機」に分類されるもので、直流を電源に用い感応線輪から空中線波長変更箱又は逓信省電器に放電させるタイプである。前掲書『日本無線史』第10巻より

⑱ 前掲書『日本無線史』第10巻

⑲ 群馬県前橋市史には、防空監視隊で使用した「監視隊本部情報通信用旅」が掲載されており、これには発見方向、進行方向について記入する項目が存在している。前橋市史編さん委員会編『群馬県前橋市史』1984年

⑳ 群馬県渋川市に設置された防空監視塔の残されている写真を見ると、藁葺きのとんがり帽子状の屋根を支える柱が円

形状に5本以上配置されたものが認められる。また、鳥取県東伯郡北谷防空監視哨の写真からも6本以上の柱が見られ、簡根は基礎とも思われる。さらに、監視哨も1段高くなっており、大東遺跡と同様に盛土が存在していたものと思われる。

法川市市誌編さん委員会編 「法川市誌」1995年 鳥取県警察史編纂委員会編「鳥取県警察史」第1巻 1981年

⑫ 沼崎陽氏の検討にある「陶磁器工業組合一覧」を見る限りでは、統制番号は基本的に「識字1文字・番号」といった様式で付けられている。

沼崎陽 1999「戦時下の『生産者別表示記号』(いわゆる統制番号リスト)を実見して」「東京考古」17 東京考古談話会

⑬ 註7の文献より

⑭ 上野恵司 2000年「近代建瓦」「季刊考古学 特集 近・現代の考古学―」72号 有山閣を参照した。

⑮ 大橋遺跡では、大型(口径17.0cm、器高5.2cm)と小形(口径10.9cm、器高5.1~5.3cm)の2種類の機が出土しており、兵隊が使用していたものと推測されている。また戦局の悪化による物資不足から当初はアルミ製のものがホーローに変わったという証言もある。

桜井準也 1999「日黒区大橋遺跡出土の近代遺跡―使用者の聞き取り調査を通じて―」「東京考古」17 東京考古談話会

⑯ このスタンプは瓦職人の各人ごとに異なっており、職人が瓦を何枚製作したのかが分かるように押されていたものである。 熱田貴保氏(私立文センター)の教示による。

⑰ 西尾良一氏の資料の写真による。平田市内の防空監視哨については西尾氏に資料を提供していただき、御教示いただいた。また佐各監視哨については、次の文献を参照した。佐賀郷土誌編纂委員会編「郷土誌さが」2000年 佐賀公民館

⑱ 完成した状況では コンクリートによる2重構造である。また、上端部のコンクリートの不自然な広がりから周辺に盛土が施されていた可能性も考えられる。なお、完尾には菲島県埋蔵文化財調査事業団の石塚久則氏にお世話になった。また、静岡県内の防空監視哨については石塚氏、菊池実氏(静岡県埋蔵文化財調査事業団)から様々な御教示をいただいた。

⑲ 沼崎陽氏の検討のように、それぞれの地域ごとに戦時下の陶磁器出土例を集成し、その流通等についての検討が必要と考えられる。前掲 沼崎陽 1999年「戦時下の『生産者別表示記号』(いわゆる統制番号リスト)を実見して」

⑳ 島根県警察史編さん委員会編「島根県警察史」昭和編 1984年 島根県警察本部

㉑ 隠岐島後では、台場が西郷町岬と伊後の2か所にあり、遠見番が西郷町矢尾、伊後に置かれていた。なお岬の台場は調査した御崎谷遺跡周辺に存在する可能性が考えられるが、所在は明らかになっていない。

永海一正「近世隠岐島史の研究」1972年 報光社、田中豊治「隠岐島の歴史地理学的研究」1979年 古今書院

中村郷土誌編纂委員会「中村郷土誌」1996年

㉒ 陸軍大臣が明治37年(1904年)2月12日に第5師団長に監視兵を置くために監視兵派遣を命じている。

前掲 原剛 1999年「国土防衛史のさ―日露戦争後から日露戦争まで―」より

㉓ 明治37年6月21日内令第269号により開設。前掲 原剛「1999年」より

㉔ 島後将設見張所については、以下の資料によっている。

「海軍用地及び同施設引渡目録(追加の分)」1945年11月26日 「兵器書品引渡目録(追加)島根県」引渡目録487 防衛庁防衛研究所保管

呉海軍警備隊 1945年9月1日「兵器軍需品施設等目録」「警備隊・保安隊・潜艇基地隊・在勤武官 引渡目録」引渡目録153 防衛庁防衛研究所保管 電波管理委員会1951年「日本無線史」第10巻

㉕ 陸軍監視所については、以下の文献の「巡航軍説明資料」に見られる。

島根県警察史編さん委員会編「島根県警察史」資料編 1986年 島根県警察本部

㉖ 海軍望楼については、網羅的な検討が行われている以下の文献を参照した。前掲 原剛 1999年より

㉗ 前掲書「日本陸海軍辞典」

㉘ 前掲書「日本無線史」第10巻より

㉙ 西郷町誌編さん委員会編「西郷町誌」下巻1976年 西郷町役場

㉚ 美保関海軍望楼については、美保関町すの沿岸部に「望楼ト」と呼ばれる場所が存在しその周辺に存在している可能性が考えられる。「月刊 山陰の釣り4」2000年 よなごブレス社

㉛ 防空監視哨については、以下の文献を参照している。

島根県警察史編さん委員会編「島根県警察史」昭和編 1984年 島根県警察本部

㉜ 原崎・安岡昭男編「日本陸海軍辞典」1997年新人物往来社 によれば、1941年頃から電波警戒機が全国の警戒要点に展開配置されていたようである。

㉝ 特設見張所については、次の資料によっている。前掲「海軍用地及び同施設引渡目録(追加の分)」1945年、呉海軍警備隊 1945年「兵器軍需品施設等目録」「日本無線史」第10巻

㉞ 前掲書「島根県警察史」資料編

㉟ 前掲書「島根県警察史」昭和編

㊱ 簸川郡斐川町直江に所在した「大社航空基地」関連した調査がいくつか見られ、池橋達雄、除山慶一、橋原善嗣・足立正民、松江南高校社会部の研究がある。また高射砲陣地を発掘調査した例も存在しており、県内では戦争遺跡に着目して発掘したものは初例となる。

池橋達雄「斐川の海軍航空基地」2000年11月 島根史学会資料

橋原善嗣・足立正「川の中の飛行場(汗と涙の青春、新川基地)」1998年

除山慶一「今甦る山陰海軍航空隊「大社基地」」島根日日新聞社 1996年

県立松江南高校社会部「大社基地」2000年11月 島根史学会資料

「平野迫跡発掘調査報告書Ⅰ」島根県斐川町教育委員会 1983年

㊲ 菊池実 2000年「近代戦争遺跡調査の視点」「季刊考古学―特集 近・現代の考古学―」72号 有山閣

㊳ 前掲 桜井準也 1999年「目黒区大橋遺跡出土の近代遺跡―使用者の聞き取り調査を通じて―」

㊴ 前掲 桜井準也 1999年より